

海外協力の 現場から

セネガル編

青年海外協力隊員の記録

国際協力事業団
青年海外協力隊事務局

昭和58年12月

JICA LIBRARY



1064949E9J

| | |
|-------------------|-----|
| 国際協力事業団 | |
| 受入 月日 '84 3.16 | 526 |
| | 36 |
| 登録No.10091. | JVP |

序にかえて

昭和58年12月

青年海外協力隊
事務局局長 野村 忠 策

青年海外協力隊が発足して18年を経た。昭和40年末から41年初にかけて1次隊の隊員48名がフィリピン、マレーシア、カンボディア、ラオスの4カ国へ派遣されて以来、今日までに約4,600名の隊員が32の開発途上国へ派遣された。協力隊創設にかかわりをもった者のひとりとして、今昔の感にたえない。

同時に、このような協力隊の発展を見るにつけ、私は、受入各国で高い評価を培ってきた隊員および、本事業の意義を理解して協力隊を育てることに地道な努力を注いでこられた政府、政界および都道府県の方がた、青少年運動指導者をはじめ広範な関係者各位に対して深甚なる敬意と感謝の意を表したい。

さて、協力隊事務局では昭和54年度から、隊員が事務局へ提出した業務報告書を国別にとりまとめ、「海外協力の現場から」と題して報告書集の刊行を始めた。幸い、各界から「協力隊員の生々しい活動と生活状況に触れて感動をおぼえる」との好評をいただいたので、本年度もセネガル、タイ、スリ・ランカの3カ国編を刊行することとした。

いうまでもなく、協力隊員の活動は、開発途上諸国の国づくり、人づくりに「草の根」で協力しようとする我が国の青年のボランティア活動である。日本とは全く異なる文化、環境の中で、そこに住む人びとと共に暮らし、共に働くことには種々の「壁」があり、時には挫折感にとらわれる。報告書は、その壁を乗り越えて新しい協力の手法を生み出そうと日夜努力している隊員の哀歎に満ちた貴重な体験の記録である。協力隊事業の財産であると同時に、我が国、我が国民全体の財産でもある。

私は協力隊の仕事は隊員受入国にとってはもちろん、我が国の将来にとっても素晴らしい事業であると確信している。今後の協力隊の飛躍的発展のためには国民各位の御理解、御支援が不可欠である。一層、御理解を深めていただくうえで、この報告書集が活用されれば幸甚である。末筆ながら、報告書集作成に御協力願った関係職種の技術専門委員の方がた、ならびに隊員（OB）諸君に謝意を表する次第である。

セネガル編

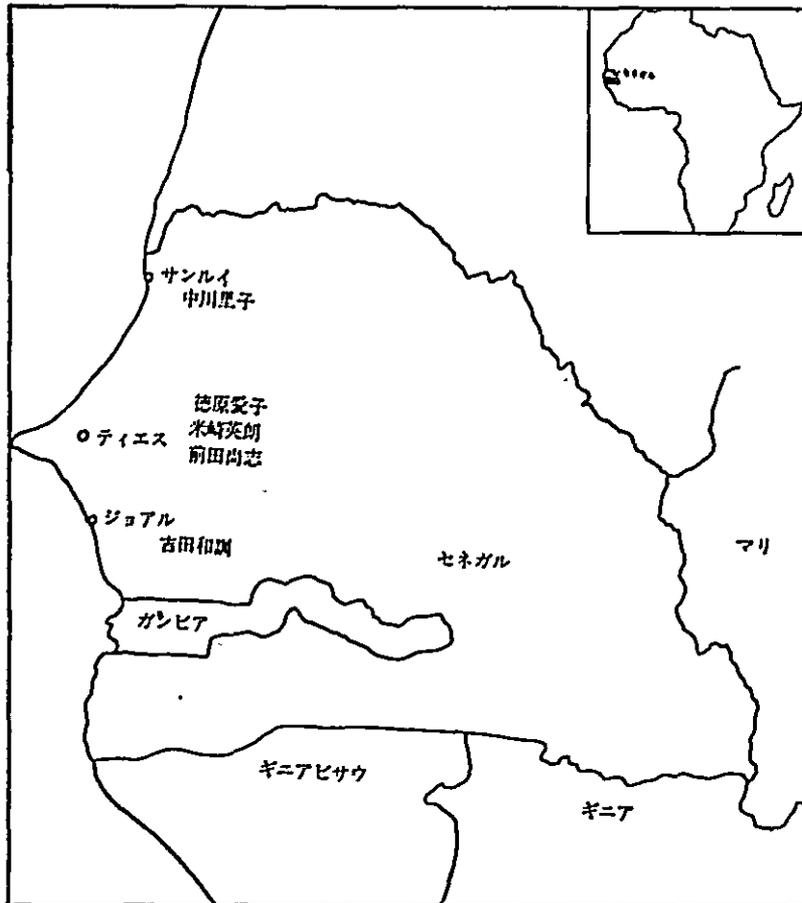
目 次

| | | |
|------------------|-------|-------|
| 序にかえて | 野村 忠策 | (1) |
| ◎ティエス市を中心とした任国事情 | 徳原 愛子 | (5) |
| 帰国後考えること | 徳原 愛子 | (19) |
| ◎セネガルの水産物加工の現状 | 吉田 和訓 | (21) |
| 帰国して想うこと | 吉田 和訓 | (38) |
| 吉田隊員の報告書を読んで | 鈴木たね子 | (39) |
| ◎セネガルの農業と協力活動 | 前田 尚志 | (41) |
| 前田隊員の報告書を読んで | 斉藤 朝雄 | (61) |
| ◎フループ州病院での医療活動 | 中川 里子 | (63) |
| 中川隊員の報告書を読んで | 赤尾 信吉 | (66) |
| ◎水泳指導において考えること | 米崎 英朗 | (69) |
| 米崎隊員の報告書を読んで | 梅田利兵衛 | (106) |
| ◎あとがき | | (110) |
| 〔付〕セネガルと協力隊 | | (2) |
| セネガルの略図と概要 | | (3) |

セネガルと協力隊（昭和58年8月1日現在）

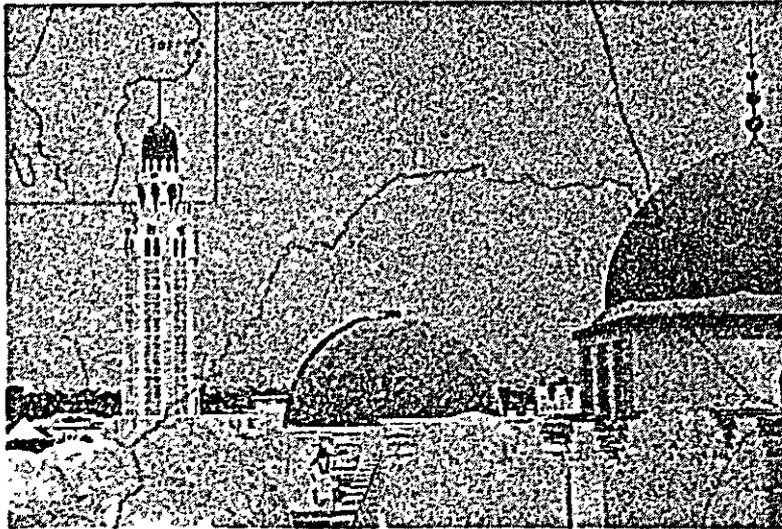
| 最初の隊員派遣：昭和55年10月 | | | | | | | | |
|------------------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|
| 職種部門 | 農林水産 | 加工 | 保守操作 | 土木建築 | 保健衛生 | 教育文化 | スポーツ | 合計 |
| 派遣中 | 20 (2) | 2 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 3 (3) | 1 (0) | 1 (0) | 27 (5) |
| 実績計 | 20 (2) | 3 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 5 (5) | 1 (0) | 1 (0) | 30 (7) |

(注) カッコ内は女性隊員。



セネガル国の概要

面積：196,192km²
 人口：581万人（1981年）
 宗教：イスラム教85％，原始宗教10％，カトリック5％
 公用語：フランス語
 1人当たりの国民所得：450ドル（1980年）
 通貨：CFAフラン（50CFAフラン＝1仏フラン）
 首都：ダカール（Dakar）＜人口85万人＞
 政体：共和制
 元首：アブドゥ・ディウフ大統領



ティエス市を中心とした任国事情



—執筆者—
氏名 徳原 愛子
生年月日 昭和25年3月8日
出身地 鳥取県
学歴 東京衛生学園看護科卒
職種 看護婦
派遣期間 昭和55年10月～57年10月

1. ティエスの町と市場

ティエス州の州都・ティエスは、首都ダカールにつぐ第二の都市である。人口17万人のティエスは、ダカールからわずか70キロという距離にある。都市計画に基づいて建設されたので、地方都市の中では垢抜けた町である。街並に入ると緑の多さが一番目につく。大通りには街路樹がうっそうと繁っている。道のあちこちにセメントで作られた長椅子がおかれ、庶民の休憩とおしゃべりの場を提供している。フランス人の影響だろう。

ティエスの中心に Place de France (フランス広場) がある。モザイク模様の壁がたち、芝生に囲まれている。噴水の装置があるが、止ったままだ。出ているのを見たのは数回。水不足のために、噴水を動かすほどの余裕はないからだ。

私の家は、この町の一番にぎやかな場所にある。日本でいえば〇〇銀座というところだろうか。三つある市場 (Grand marché, Moussanté, Grand Thiès) のうち一番大きな Grand marché がすぐそばにある。朝早くから活気がみなぎる。セネガル人の家庭は買いためをしないから、その日の食事の材料はその日のうちに準備する。だから毎朝の買いためが主婦の日課である。バケツを手にはさげ、大きなひょうたんを二つに割ったものを頭にのせ、お尻に赤ん坊をくくりつけた (のせたと買った方が適切だ) 女性が市場へ向かう。

市場の中は所狭しと店が並ぶ。大勢の人混みで、異様な臭いが鼻につく。特に魚を売っている所は、干物の悪臭がひどくハエが黒々とたかっている。板場の上に商品が並べられ、そのまわりには生ゴミが散乱している。

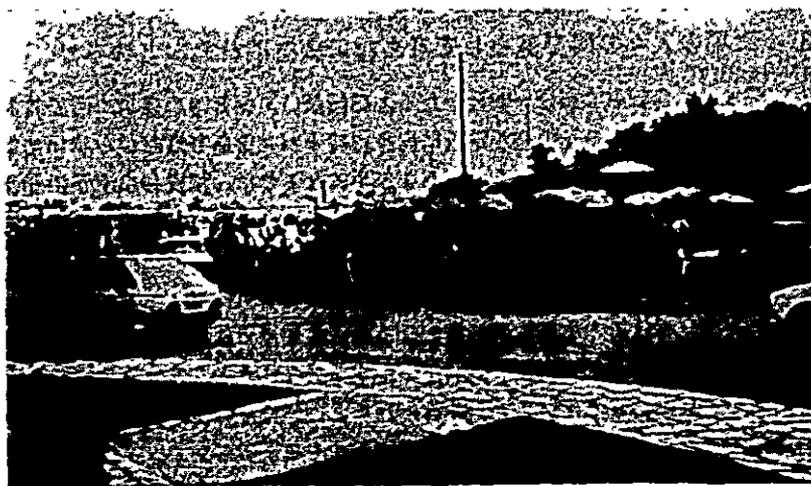
市場には肉、野菜、魚、米、粟、落花生、日用品、古着、化粧品、装飾品、靴、カバン、洋品など何でもある。かわったところでは空缶、空ビン、誰が持ってきたのか使用後の点滴ビンさえも売られている。

市場の一角にチュバツ (白人市場) がある。外人用の市場という意味である。白人が好む野菜とか、グレープ・フルーツ、メロン、パイナップルなどの果物を売っている。種類も豊富で新鮮だけれど他で買うより高い。セネガルでは商品に値段がない。だから交渉して買うより仕方ない。ところが現地人値段と外人値段があって、私達には倍以上の値をふっかける。現地人値段に下げるまで、並たいていの苦勞ではない。

おかみさんがデソと腰をおろして、屋台の前に野菜を並べている。ニンジン、トマト、ナスがそれぞれ5〜6個、赤唐辛子、ピーナツ・バターなどは

小出しで売っている。この様にして売られている物はキロ単位ではないので、私の様にひとり暮らしには無駄がなく、経済的である。まず買いたいと思うものに出会ったら、値段の交渉から始めなければならない。物の本当の値段がわからないと交渉はむずかしい。100セファ(1CFA=約1円)と言われれば、三分の一の30セファと試みる。時には、そのとおりになる。それでは売らないと言われて、引き下がってはいけない。しばらくその値段でねばり、それでも売らないなら10セファ上げて、40セファが最後だという。それでもダメなら「ああ、いらぬよ」と帰るふりをする。すると、後ろから待てと声をかけてくる。そうすればしめたもの、自分の言い値の40セファで買う事ができる。これで値段の交渉が成立する。

赴任した頃は歩いているだけで買ってくれと声をかけられるのと、値切るのが面倒くさくて、外人だからと値を高くふっかけられるのがいやで、買物が嫌いだった。それでセネガル人の友達と一緒に連れて行って、彼女に買ってもらうか、頼むかしていたけれど、今では値切る度胸もついた。ゴチャゴチャしている市場の中で、珍しい物にぶつかる事もある。気晴らしにもなるので、よく出かける様になった。



市場風景

2. セネガル人にとっての物の価値

10セファ、20セファの差は私にとって取るに足りない金額だけれど、市場のおばさんには、お金の価値が違う。でも値段のやりとりはゲームである。おば

ティエス市を中心とした任国事情

さん達にとっては、いかに高く売ったかであり、それを楽しむ気持ちが高い。最低の値段は決めてあって、それ以上に売りつけようとするのだ。本当に値を割る様だったら、おばさん達は売らないし、あきらめもさっぱりしている。だから彼女達にとってもゲーム、外国人にとってもそういう気持ちで割り切れば、買物も楽しい。

私のアパートの階下で、朝8時におばさんが店開きの準備を始める。雑貨店の軒下である。ダンボール箱をくずしたものを敷物にして、ジャガイモ、玉ネギ、落花生、粟、木の実を売る。市場に限らず、人通りの多い商店街や、広場、タクシー乗り場、病院前などに露店がある。自転車で病院に行こうとする私に「ナガデフ」（ウオロフ語でご気嫌いかがですか）と声をかけてくる。野菜を見せながら「ドン・ブリ」（いい値段だよ）と呼びかける。さて、今日はいくらくに値切ろうかしら。

<買物心得>

- (1) 決して物欲しい顔をみせてはいけない
- (2) 相手が納得しない場合には、一度、帰るふりをする
- (3) 顔見知りになること

3. 職場の人々の間で暮らして考えたこと

病院までは自転車で15分～20分かかる。結構長い。朝8時、通学、通勤時間なのでカバンを片手の子供達が学校に向う。時々バンをかじりながら歩いている子供もみる。ティエスに住んでもう1年半になるのに、相変わらず子供達は「シノア・シノア」（中国人）と声をとばす。中国人とたいして顔形や背丈が違わないので無理もないけれど、何となくバカにされたみたいだ。ティエスに来て、間もない頃は「シノア」と言われる毎に「私はジャポネーズ」といい返したけれど、今は通りすがりから言われる時には無視することになっている。日本人がガーナ人とセネガル人の区別がつかず「アフリカ人」と総称するのと同じである。私にとって「シノア」と言われるといい気持ちではない。

病院の近くを歩いていると、時々駆け寄ってくる子供がいて、「10セフ下さい」と言う。自転車に乗っていれば自転車をくれという。この国では子供達に限らず、大人でも物をねだるのは日常茶飯事である。勤務を始めた頃、ネックレスや指輪をしていると、必ず「とてもきれいだ。金、銀？くれ」と言われて、閉口してしまったものだ。「いやだ」と言うと「何故？」と言り返される。何故といわれても、あげたくないからだ。返事に困ってしまう。会う人

毎に同じ事を言われるので、そのうち装飾品はつけていかない事にした。

私も慣れて、断わるのに、もっともらしい言葉を見つけた。指輪は「母がセネガルに来る時、お守りとしてくれたものだから、この国のグリグリと同じものだよ」とか、ネックレスは「友達が私の誕生日祝いに送ってくれたもの」とか、髪も方便である。ちゃんとした理由を言うと彼等は納得する。この物はこの理由で断ると決めて、自分で覚えておかないと後で大変な事になりかねない。記憶力抜群のセネガル人、些細な事も実にしっかりと覚えているから、つじつまが合わないと四苦八苦である。

同僚に、何故この国は「下さい、下さいばかり言うのか」と尋ねると「悪い事ではない。当たり前だ」と言われた。日本人はそんな事は言わない、と言うと「日本人はケチだから」と反対に言われてしまった。イスラム教には喜捨と呼ばれる行為が義務とされている。富める者は、貧しい者、あるいは持たざる者に与える事である。それ自体は良い事だと思うけれど、自分達の価値観、世界観を押しつけられる様で、あまりいい気持ちはしない。だから100セファくれと言われたら、自分も100セファくれと言うことにした。相手はものすごく怪訝な顔をする。

4. セネガルの肢体不自由者達の現状

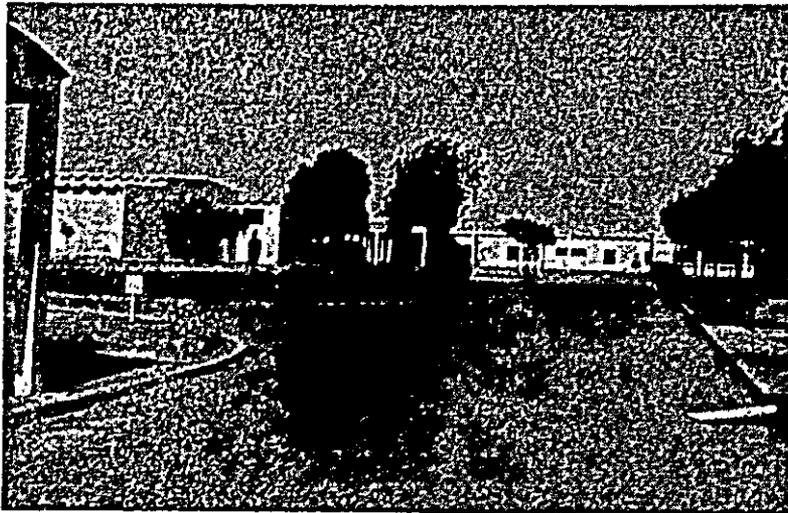
この国には肢体不自由者が相当いる。日本の様に投産所や身障者用の職業訓練センターの施設が絶対的に少いから、とにかく家の外に出る。自分の食い扶持を稼ぐために物乞いをする。ダカールの近代的な建物の中を歩いていると必ずそうした人の姿を見かける。

ライ病で鼻や指のない者、ポリオで脚や腕が使えなくて義足や松葉杖を使っている者、恵まれた方では自動原付三輪車に乗っている者もいるが、人ごみの間を四つんばいではっている者もまれではない。子供が目の見えない母親や父親の手をひいて物乞いする姿、小脇に乳飲み児を2～3人抱き、道端に座りこんでいる母親も多くみられる。

信号のある場所で車をとめた時に、近寄ってお金をねだる。いつも同じ顔ぶれだから縄張りがあるのだろう。小さな空缶や手の中には、5セファ、10セファの小銭が入っている。私は可哀相だという気持ちはあるけれど、お金をやった事はない。あまりにも数が多いので、きりがいいからである。私の友人には、馴染みの乞食を作ってお金をあげている人もいる。小銭のない時には、しっかりおつりをもらう。物乞いの方も慣れたもので、ちゃんとおつりをよこす。

ティニス市を中心とした任国事情

ティニスのスーパー・マーケットや、郵便局の入口にもそういう人がいる。私はしばしば用事をすませる間、自転車の見張り番をしてもらう。そのかわりに、5セファか10セファあげる。その様にして、何かしら仕事をみつけて、わずかな収入を得ている者もあるが、大部分は町中でコーランの文句を唱えながら、手を差し出し物乞いしている。



ティニス州病院全景

5. セネガルの交通あれこれ

ティニスからの一般的な交通手段は、乗り合いタクシー、バス、汽車である。私は首都のダカールには乗り合いタクシーで行く。行く先の地名を書いた札がティニスでは立っていないので、発着場に行くと、呼び屋がいて行き先を尋ねる。誘いの声が八方からかかる。

乗り合いタクシーはブジョ 504 が大半で、運転手も入れて 8 人乗りである。前の席に乗客 2 人、真ん中に 3 人、後ろに 2 人乗り、その後ろが荷物置き場である。私はいつも最後部の席に座ることに決めている。前も真ん中も 3 人乗りだから、もし体重が優に 90 キロはあるセネガル女性の間にはさまれたら、おしつぶされかねない。

後ろは 2 人で十分に余裕がある。もう一つの理由は、荷物置き場においた自分の所持品を確認しやすいためである。他の乗客が降りる毎に、自分の荷物があるかどうか確める。

ダカールまで約1時間、料金は、1年半前に来た当時は475セファだったが、2回値上がりして、現在640セファである（1セファは約1円）。

発車時刻はない。乗客が集まると出発する。2～3人が集まっていないと20～30分も待たなければならない。だいたい正午から2時頃までは乗客が少ない。昼休みのためである。

運転手は100キロ前後のスピードでとばすからとても早い。しかし運転が乱暴で、おまけに日本でいえば廃車に近い車を使っているから、乗る毎に恐怖感に襲われる。一度、砂煙をあげて道路工事をしていたトラックにぶつかりそうになって冷汗をかかされた事がある。街道では、しばしば交通事故が発生する。

荷物を満載したトラックが横転したり、車同士の衝突、羊や牛のひき殺しである。だから無事ダカールの停車場に着くと、ホッと命捨いた気分になる。時々、寄り道をする事がある。街道沿いに、野菜、肉、果物などを売っている村がある。道の両側で女性が一列に座っている。5月から8月はマンゴーでいっぱい。タクシーに限らず、バス、自家用車が止まると一斉に女性10数人が走り寄ってくる。それから、車の外から買ってくれと手を差し出してくる。1人が300セファだというと、他の女性は250セファと、こちらが何もいわないのに値が下がっていく。農家のおばさん達には、貴重な現金収入だ。同じ品物でもダカールに近くなると値段が高くなる。乗客が買うまで他の乗客はおとなしく待っている。

小型バスは30人乗りである。料金は乗り合いタクシーとほとんど変わらない。バスの天井に乗客の荷物が積まれる。マットレス、ベット、トランク、ナベ、ヤカン、野菜など、時には羊が乗っていることもある。バスの高さ、荷物の高さが同じ位で走っている。まるで引越しバス、買出しバスである。しかし、荷物の重味で急ブレーキをかけたとしてもしたら、横転しかねない。

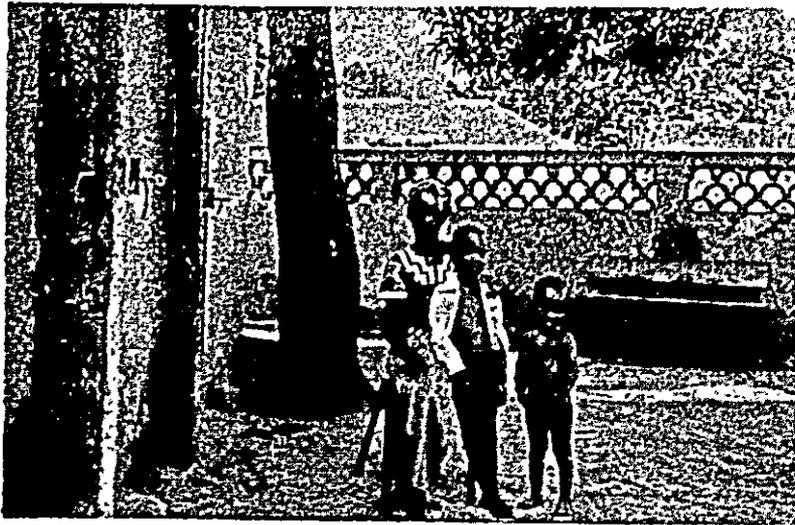
汽車も走っているが、まだ一度も乗っていない。ある隊員がダカールまで乗ったら、車内はとても汚なくて、おまけに南京虫に咬まれて大変だったと言っていた。乗り合いバス、タクシーと同じく、発車時刻が守られていないから、少くとも予定の1時間前には駅に行って待っていなければならないそうだ。

他の地方都市と同じく、ティエスにも市内交通手段としてタクシーと共に馬車がある。朝早くから、ランプをともしながら夜遅くまでバカバカと走っている。タクシーより、かなり値段は安くて半額位だ。御者をいれて3～4人位乗れる。二輪車の馬車をひかせて走る。行く先をいってから座席に飛び乗る。車

高が高いし、屋根もないから太陽に照らされて、とても暑い、でも素朴でいい気分だ。

6. 子供達の表情

以前に住んでいた家のすぐ近くに名前がイディーという3歳の男の子がいた。7人兄妹の下から2番目である。大きな目がとても可愛い。来た当時、見慣れない私をこわがり、母親のかけに隠れ、近寄ったり握手しようとして手を差し出そうものなら、大声で泣くのが常だった。歩きだしたばかりで、素っ裸でうろろろしていた。そのうち、少しずつ慣れてきて握手もするし、遠くから私の姿を見かけると「エーコ、エーコ」と呼ぶ様になった。今は、その家に行くと、恥ずかしそうにして、ニコッと笑い片言のウオロフ語で話しかけてくる。



左からジャイナバ、バンバ、イディー

自転車に乗っていたり、歩いていると3~4歳の子供達が「チュパッ、チュパッ、マダム（ウオロフ語で白人の意）」と呼びながら追いかけてくる。そして、右手を出し握手をしてほしいという。握手してくれるまで、自転車の後を走りながら追いかける。私達外人に対する物珍しさだろう。人なつこいのは、日本の子供以上だ。

ここの子供達は鼻水をたらし、頭の前からつま先まで砂だらけ、素足で遊んでいる。破れた服を着ていても一向に平気である。一家族に10人も子供がいる

のはまれではないし、貧しいから仕方ない。

私はせいぜい小学生に上がる年位の子供が一番可愛いと思う。中には、そうでない子供もいるけれど、小学生になると生意気さが顔に表われて嫌いだ。

ティエスの町の道のそばの木の下で、おじいさんを囲んで15人から20人の子供達がいる。コーラン学校である。おじいさんはマラブー（フランス語でイスラム教の導師をこう呼ぶ）である。手にアラビア文字のコーランの文句が書かれた長方形の板を持ち、おじいさんの言うコーランの文句を、後から大声で何回も繰り返す。板はノートであり黒板でもある。一枚の板に文字を書き、消してはまた書いて使う。意味も判らないままに暗記の勉強である。

イスラム教徒の子供には、コーランを習うことは義務である。小学校に入学前、だいたい4、5歳位から始めて1、2年間コーラン学校に通う。小学校に入学しない者はそのまま続けてもよい。月謝は1カ月に約500セファ、1日に2時間程勉強する。田舎から勉強しに来ている子供達もいる。マラブーの家に下宿し、時には町に喜捨をもらいに行く。洗面器を持って一軒、一軒食べ物をもたらす子供もいれば、街角に立って小銭の喜捨を求める子供達もいる。

7. セネガルの薬草文化

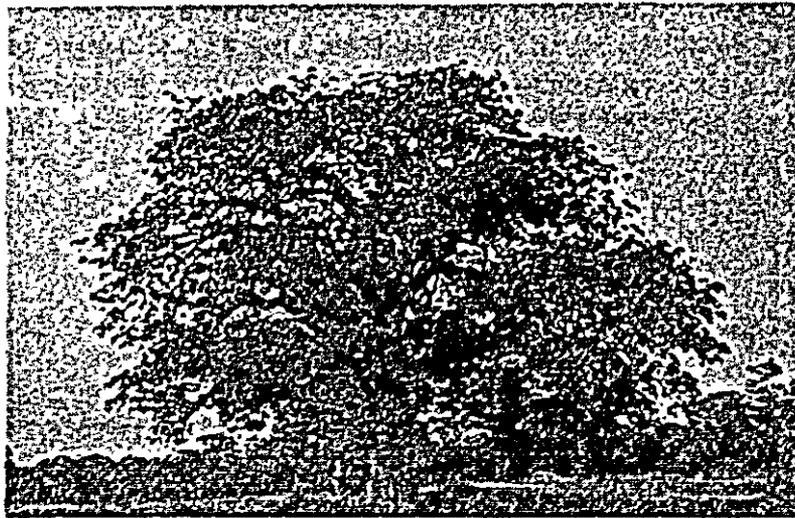
私は子供の頃、熱が出て頭が痛くなると母が梅干の皮をこめかみに貼りつけてくれた。セネガルでも、文明社会から隔てられた農村において、伝統的な家庭医療が盛んである。村には近代医療の恩恵をうける機会が少ないし、市販薬を求めようにも薬局はなく、町で買うにしても高価で手が出ない。セネガル人が病気に罹ったら、まず初めに家庭医療を試みる。手近にある薬草や樹木を用いた伝統的な方法を行なう。

例えば以下の通りである。

- ①マラリア、肝炎、結膜炎にはゲジャの葉を煎じて飲む
- ②頭痛にはニムの葉を頭に巻く
- ③喘息にはバンブー（竹）の葉を煎じて飲む
- ④炎症（よう、せつ、炭疽病）にはパバイアの実を貼布する
- ⑤咳嗽にはゲールの葉を煎じて飲む
- ⑥便秘にはカンシアの葉を煎じて飲む
- ⑦小児の下痢にはパオバブの果汁を飲む
- ⑧消化不良症にはバズィリックの草木を煎じて飲む
- ⑨胆汁分泌促進、利尿にはケンキリバの葉を煮つめて飲む

- ⑩火傷には卵やキャッサバの葉を貼る
- ⑪ガスが腹に溜って苦しい時には、灰をこすりつける
- ⑫黄熱病にはパパイアの実を煮て食べる

特に薬草については、首都のダカールにある E. N. D. A (環境開発研究所) から "plantes médicinales intertropicales" (熱帯地方の薬草) という出版物がある。1979年2月発行のこの本は、日頃から薬草に関心を持っていた私には、非常に興味深い内容であり、その一部を訳してみたので、関心のある方は報告書第5号を読んで欲しい。



バオバブの木

農村社会のみならず、都会の一般的な家庭でも手近にある薬草、樹木を使って治療している。日本には、日本の特有な家庭医療がある様に、セネガルにも(西アフリカ全般かもしれないが) 個有のものが見い出せる。

8. セネガルの代表的料理「チュブゼン」

昼食時に病院から帰宅すると、真向いの家の次女ジャイナバが食事を持ってきてくれる。花模様の小さなホウロウびきの洗面器から、ムっとする独特の臭いが漂ってくる。チュブゼンだ。トマト色のくず米の上に、ぶった切りの魚の切り身とニンジン、キャベツ、ナス、カボチャ、キャッサバが乗っている。初めて出された時には、見ばえは悪いし、魚の生臭さと強烈な臭いが鼻につき、

とても食べる気にならなかった。お付き合いで二度三度と食べているうちに、
どういう訳かすっかり病み付きになってしまった。毎日出されても飽きない
し、いつも食べ過ぎてしまう。旅行に出ればフランス料理を後目に、掘っ立て
小屋の一膳チュブゼン屋に飛び込むほどになった。40度近くになる酷暑の中
では、チュブゼンの辛さが食欲を促す。特異な味付けはチュブゼン中毒にするら
しく、2日欠かすと無精に恋しくなってしまう。

同じチュブゼンといっても家庭によって味が異なる。おかみさんが子供の時
から、母親に仕込まれてきた作り方があり、自分の調理に絶対的な自信を持っ
ている。客人や知人から「お前のかみさんのチュブゼンはうまい」と言われる
のは最高のほめ言葉であるし、子供にとっても「お前のおふくろさんは料理が
うまい」と友達に言われれば鼻が高くなる。チュブゼン料理は、家庭内の食事
ということだけでなく、おかみさんの役割と存在を社会の中で大きく示すもの
だけに、おかみさん達は自分の料理に固執するし、絶対に手を抜かない。

ジャイナバは12歳である。小さな時から母親の手伝いをしながら材料の買い
出しから、料理の仕込み、調理を身につけてきた。最近、9回目の出産を間近
にした母親に代って、時々チュブゼンを作る。くず米はべとつくし、味ももう
ひとつで、まだおふくろの味には致っていない。でも「ジャイナバのチュブゼ
ンは美味しいね」とほめると、彼女はとても嬉しそうな顔をする。「もうお嫁
に行けるね」と、同意語として、セネガルの女の子は解釈するからだ。セネガ
ルでは、男は決して料理には手を出さない。料理はセネガル女性にとって、子
供を産むのと同じ位大切な結婚の条件だ。家庭では女の子が生まれれば、物心
ついた時から、子守りと料理の手伝いをさせて、その2つを徹底的に身につけ
させる。料理でいえば、チュブゼンは花嫁としてのたしなみを集約したものと
言える。

ウオロフ語で、ゼンは米、チュブは魚を意味する。おかみさんや女の子が朝
早くから市場へ買い出しに出かける。バケツを手にかかえ、頭には半分に割っ
たヒョータンやホウロウびきの大きな洗面器を乗せて行く。その日限りの材料
しか買わないから、市場は毎朝、おかみさん達でにぎわう。全部で300セファ
の材料を買うだけなのだが、おかみさん達は朝のその労を惜しまない。

材料がそろると、庭の木蔭で料理に取りかかる。まず、魚のはらわたを取り
出し、骨ごとぶつ切りにする。ピーマンの形をした唐辛子、玉ネギ、パセリ、
ニンニク、塩、コショウ、2〜3種類の香辛料を潰す。この香辛料が味付けの
コツで、おかみさんの秘法がこめられている。魚の切り身に潰した薬味を詰め

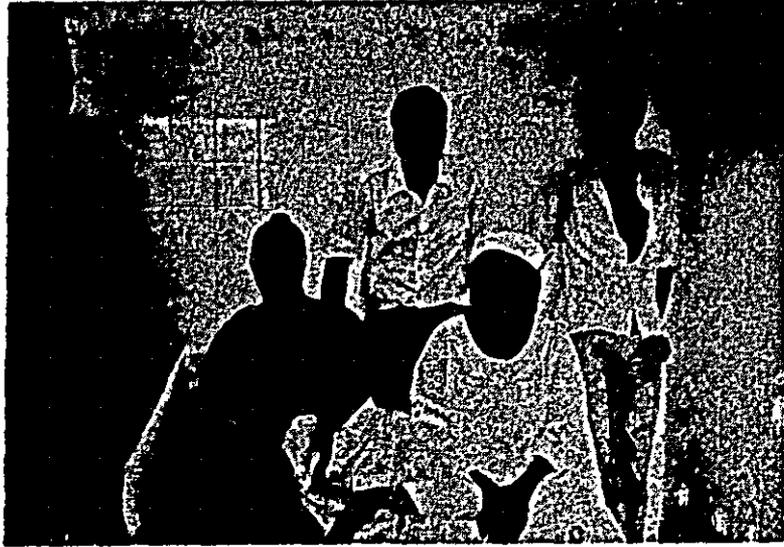
込む。大きな鍋に特産の落花生油をたっぷり入れ、炭火にかけて魚を揚げる。唐揚げした魚を取り出し、鍋の中に一握りの練りトマトと水を加える。そこにぶつ切りのニンジン、キャベツ、ナス、キャッサバ、カボチャなどの野菜、干し魚、ニャツ貝の切り身、木の突を入れ約1時間煮込む。鍋の上に蒸し器を乗せ、くず米を約20分間蒸す。再び鍋から具を取り出し、くず米を入れて炊き込む。くず米はトマト色に染まり、油炒めご飯のようになって炊きあがる。大きなホウロウびきの洗面器にくず米を移し、その上に野菜、干し魚、貝などの具と切り身の魚を形よく盛りつける。

ひとつの食器で家族全員が食べる。庭の木蔭にゴザを敷き、洗面器を囲んで坐る。客人が来たり、多人数の場合には男と女に分かれて食べる。私達外国人には気を遣ってスプーンを出してくれるが、セネガル人は右手で食べる。手で器用にご飯を丸めて口の中にポイと入れる。私も何度か試みたが、うまく握れず指の間からご飯がこぼれてしまう。油を切りながら握るのがコツの様だ。

ひとつ器で一緒に食事することは、セネガルの社会で欠かすことのできない慣習となっている。一度一緒に食事をすれば仲間となり、二度、三度重ねていくうちに兄弟の扱いになる。伝統的な因習を残す農村は勿論のこと、首都ダカールや私の住むティエスの都会でもこの部族社会の習慣が生きている。「アイコ、家に食事においで」「アイコ、いつ食事に招待してくれるか」、毎日の様に声をかけられる。外国人といえども、セネガル人と人間関係を円滑にしようと思えば、ひとつの器の食事が欠かせない。

客人として呼ばれると、礼儀作法がある。食が細ければ「マンジェ、マンジェ（食べなさい、食べなさい）」と執拗に勧められる。肉や魚、野菜の具を、主人がちぎって私の前に投げ出してくれる。右手の指先で器用にちぎり、親指ではね飛ばす。それが客人に対する心遣いなのでいやな顔もできない。爪先を見ると、伸びた爪に黒い垢がついている。肉や貝などちぎりにくいものは、何度も握り直し、親指をねじりこんでちぎる。とても口に入れる気にならない。最初は口に入れたものの、喉元を通らず困った。次第に要領を覚え、汚ない手で投げつけてきたら、私もちぎり、「マンジェ」と言って隣りの人にまわすことにした。多人数で食べるので、嫌いなものは隣りへ隣りへと押しつける。食欲がない時には、最初から断って、自分の食べ分を洗面器の中で示す。食事が終れば「いっぱい食べたわ」「とても美味しかった」のほめ言葉を忘れずに言う。招待してくれた家族、特におかみさんへの礼儀だ。本当に美味しく、沢山食べた時には、おかみさんも笑みをこぼして満足そうな顔をする。「アイ

コ、明日もおいで」と声をかけてくれる。私は、また太っちゃったと悔やみながら、それでも「ウイ」と元気よく答えて、チェブゼンの毎日を過すことになる。



セネガルの女性はおしゃれ



二年間親しく付きあったジャイナバの家族と（後列左から二人目が筆者）

帰国後考えること

徳原 愛子

2年5カ月ぶりに出張に帰って来た。一通りの挨拶回りが終わるとすぐに、古巣の手術室で勤務が待っていた。アフリカ帰りなどという気持ちは捨て置いて、何気なく職場に再復帰するつもりだったが、新しい仕事に取りかかる様な緊張を感じた。予感通り厳しい現実の壁があった。自分でも何より驚いたのは、前の仕事の手順をすっかり忘れていたことである。いちいち同僚に尋ねないと、以前の記憶が戻らない。この手術室の点滴の固定の仕方さえ忘れていたのには、我ながらあきれてしまった。まさにアフリカ惚れ、セネガル慣れしすぎたということであろうか。まるで新人同様の立場から、私の帰国後生活が始まった。

仕事仕事の毎日で、否が応でも国内適応してしまった感じがしないでもないが、8カ月の月日が流れた現在、やっとセネガルの生活を懐しく思い浮かべる余裕がでてきた。

私は、セネガル第1次隊3人の中の1人だった。初めての国ということもあって、予備知識も殆どなく、仕事をはじめ、生活も手探りの毎日だった。言葉のハンディに加えて、病院では医師の技術を要求された。辞書を片手に病院通いをした私であるから、協力活動の上でどれだけ効果があったかわからないが、とにかく無我夢中の生活があった。看護婦（士）の清潔観のなさに憤り、医薬物品の不足に嘆き、同僚と意見の衝突を繰り返す日々だった。半年たち、1年を経るうちに、私はセネガル人の物の考え方の背景を察することが出来るようになった。日本の生活が、仕事に組み込まれて成り立っているとすれば、セネガルでは逆に、生活が仕事に優先するように組み込まれていた。

ラマダン（断食）の最中には、病院は休業同然で、手術室は同僚の昼寝の場所になっていた。比較的しのぎやすい午前中はまだしも、暑い午後になると、患者も看護婦（士）も気力がまるでなくなってしまふ。体力は落ちるし、できるだけ疲労を防ごうとする。日本の病院では考えられない仕事の場があった。朝から夕方まで手術に追われていると、私は3時間の昼休みがあるティエスの病院を懐しく思い出す。分刻みの勤務、規則づくめの息苦しさ、それに従わないと日本では働いていけないし、仮りに反抗しても、自分が疎外感を味わうだ

けなのは充分承知しながら、なぜか、セネガルの病院を心に持ち続けている。私にとって、仕事の場としてどちらがよいのかわからない。ただ、気持ちの上で、ゆとりを少しでも持ちたいという希望が、セネガルを振り返させるのかもしれない。

キリマンジャロ山に登りたいという動機から、アフリカを希望した。意に反して、バオバブと砂地ばかりのセネガルに派遣され、私は山登りと無縁の2年間を過ごした。無我夢中で、しかも気持ちにゆとりを持って山に登るのと同じ楽しさが、セネガルにはあった。

この出張で、私はまた山登りを始めた。

セネガルの水産物加工の現状

第3号, 6号報告書
職 種 水産物加工
氏 名 吉田 和訓
配属先 社会開発省

ティエス水産事務所

吉田隊員の略歴

生年月日 昭和30年4月10日
出身地 静岡県
学 歴 鹿児島大水産学部卒
派遣期間 55年10月～57年10月

1. 水産物の消費

セネガルの人々は魚をよく食べる。以前、家があてがわれる前、ジョアルの所長 (Inspecteur Régional de Thiès) の家で食べた料理は毎回魚であった。昼はチュブゼン、夜は魚の揚げ物であり、魚種が多少変わるのみであった。(ジョアルが水揚、加工地ということも多分に影響していると考えられるが) 誰に聞いても魚をよく食べるという。生鮮魚が買える地方都市では生魚を使い、内陸に入ったオリエンタルの方では干物などを食べるのだという。しかし、農業隊員の前田氏曰く「農民は貧しい。米なんか食べられない……のだから粟やヒエといった物を食べている」。小生はピーナツの次によく食べるのではないかと考えている。

セネガルで最もポピュラーな料理はチュブゼン (仏: Riz au Poisson) である。魚種は Epinephelus 類が最もよく好まれるのでとても高価である。しかし見ていると、自身の魚で魚体の大きなものがやはり人気があり、高価である様だ。頭の周囲の肉も全て食べる (長い時間煮込むと食べられるが) ので骨のみが残るだけである。下記に参考のため記しておく。

| 仏名 | 原地名 | 学名 |
|------------------------------|---------------------|---------------------------|
| ※ Mérou bronzé | Thiof (Séu.L) | Epinephelus aeneus |
| ※ Mérou noir | Roúr (Séu.L) (注) | Epinephelus caninus |
| Mérou commun de Méditerranée | Kotj, Kotyo | Epinephelus gigas |
| Mérou de gorée | Doy, ndoy | Epinephelus goreensis |
| Carpes blanches | Sompatt | Pomadasy jubelini |
| Otolithe du Sénégal | Feute | Pseudolithus Sénégalensis |
| Pageot à tache rouge | Youfouf, Tiki | Pagellus coupei |
| Page | Ouaragne, Kib | Pagrus obrentergi |

(仏名、原地名、学名を転載する 注: セネガルの Le bou というウオロフ族のうちの海洋民族の呼び名
※: ————の呼名は Poisson de Mer de Ibuest africain tropical ORSTOM による)

2. ジョアル (セネガル、一、二の加工地)
における水産物加工法

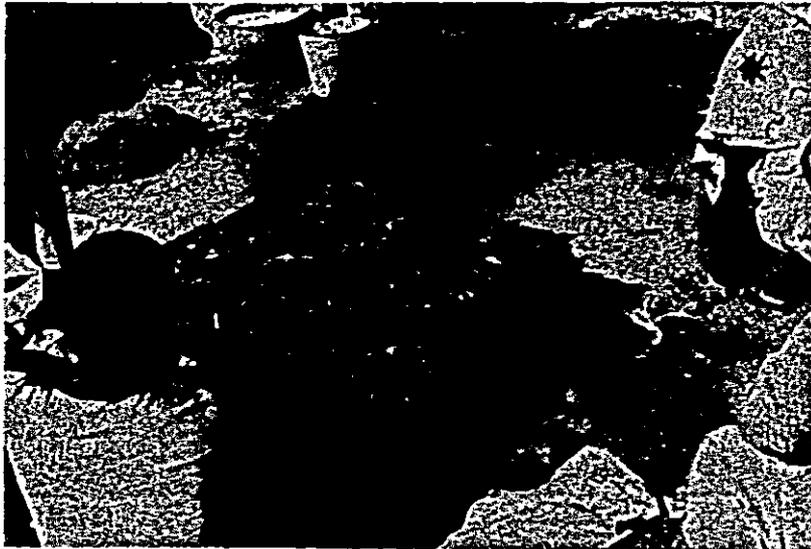
(1). Guedy (ゲジ)

魚を開いて（まず背から庖丁を入れ、次に逆側の腹の方から入れ頭を裂き開き、全体として扇子の様にひらく）、それを海水で洗って干した加工品、一般の魚を対象とする鮫など多い。

(2), Ketiahh (ケチャ、やや大型)

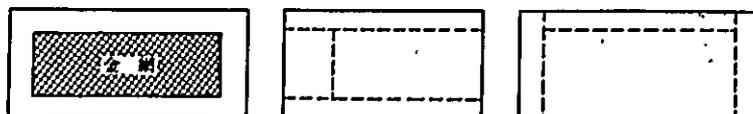


写真上・加工作業中、写真下・製品



セネガルの水産物加工の現状

巻網で捕獲する鯖を大量に消費する。鯖を地面に並べ、枯草をかぶせ、砂や前回除去した頭や皮、尾をまき火をつけ焼く（蒸す）。あるいは燻製用の炉（下図）の金網上に頭を上にして並べ、1夜（4～6時間）いぶす。



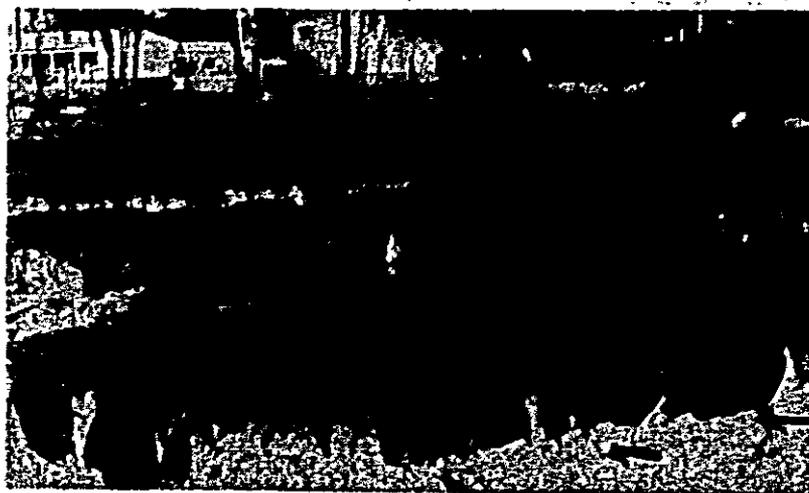
翌日、土の上に並べた方法も含めて、頭、皮、尾を除去して海塩をまぶして2日間天日干しをおこなう。私は自分で食べるラーメンのダシを取るのに用いているが、セネガル人はやはりチュブゼンに用いている。夜間、海岸付近で赤々と燃える火が至る所で起こり美しい眺めである。

(3) Tambadjiang (タンパジャン)

主に大型の鯖を使う。その他の魚を使うこともある。丸のまま海塩をまぶし（ふり塩）2日間位放置し、鱗を取り、よく水洗した後、2～3日間天日干しする。

(4) Mètorah (メトハ)

燻製のことである。Kong（仏名 Silure, 学名 Arius spp.）という魚が対象とされる。当地では乾燥させていることもあるが、開きにして水洗後、炉の網の上に並べ一夜程いぶしをかけて出来上りの模様。



燻製品炉

(5) Yett (イエッツ)

Escargot de Mer (仏名, 学名 *Cymbium* spp.) というサッカー・ボール大の貝を殻割りした後, 内臓を除去し—4つ割りして, 土上あるいは穴に入れ, 上からナイロンや漁網を覆い2日間放置し, その後水洗いする。2日間天日干しして完成。同様に(1夜海水で浸し水洗して2日天日干しのこともある) Touffa (擬サザエ, 仏名 *Murex*) がある。当地は非常に多く, 捕獲, 加工される為一つのカテゴリーを持っている。Yett, Touffa が入るチュブゼンは, より高級とされる。

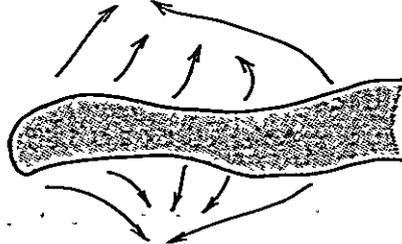


イエッツを加工しているところ

(6) Salé-Séché (塩干し)

鮫・鯨(えい)を使用した加工品を他と区別している。これについては, さらに調査すべき点が残されている。

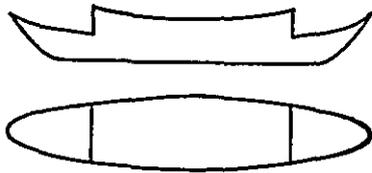
鯨の切り方



部 廃棄部
← 部 包丁を入れる方向

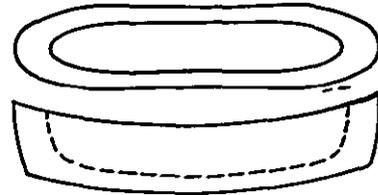
3. 漁業用無動力船（ピローグ）について

前部と後部に長く突出した端先を持ち、中央部に人がのり込んだり、漁具や漁獲物の収納する場所（区画）を有している。船外機を搭載したモーターゼー



ションが進み、その為に後部の突出部に付取用の穴をあけたり、中央部の後部に取付用の穴をもうけている。全てがそうであるのではなく、従来のみ帆を利用し、両方利用している漁船（ピローグ）もある。

これは昔ながらの伝統的漁船であり、カザマンス、カプベール州などのトロール船（鋼船）を駆使した近代漁業で統計上からも区別している。このピローグの造船にあたりひとつの基となる丸太様のくりぬき船（左図参照）をオノで少しずつくり抜いていく。それに側面（弦）と端先の突出部を取りつけていくのである。側面（弦）は2～3枚の厚板を湾曲させて、釘状にした鉄棒を



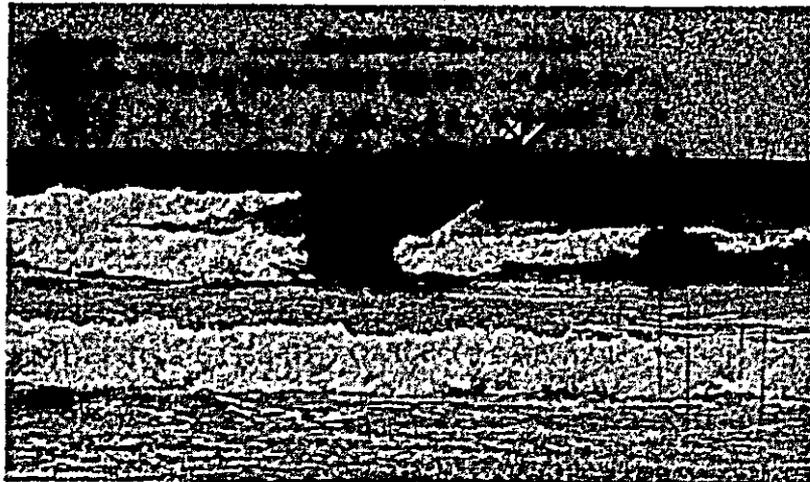
打ち込んでいくのである。そして中央部（船室であり魚倉庫）は2～3の区画に分けたり、金網などを用いることが多い。これは通行が不便なためである。副木をあて、外に壊れない様に補強している。

板と板の間は、山羊の毛をモグサの太い紐状に編んだ綱をくさびを使って埋めて、内側からコールトールらしき物を塗装して、水が浸入してこないように工夫している。

ジョアル、ウンブールは波が静かなので走る姿に感激を感じる人はいないが、カイヤール、ファスボイの遠くから折れてくる波間をぬい、波の間をかって帰還する光景は豪快かつ勇壮であり、見る人の心を感動させカイヤールにおいては、一つの観光コースになっている。広くヨーロッパから観光客をよび集めている。

しかし、帰還してくるピローグをよくみると、砂の一杯入ったズダ袋を積載しているのに気がつく。これは吃水が上がると船外機に負荷が加わり、効率が悪いので吃水を下げたために行なう。目測と経験による造船であるから真つすぐに浮くこと自体が不思議なのかもしれない。水が浸入してくるので走行中アカ出し（水のかき出し）に忙しい人もいる。

ジョアル、ウンブールの海は静かなので、海上にアンカーをうって停泊させ



試運転に沖に出るピローグ

ている舟が多い。翌日には、水が没入してきて僅かに海面に上端だけを浮かばせている惨めな姿を発見することができる。砂浜への引き上げは人力により、ヤシの枕木をあてがったり、左右に振り子のように操り出し、奥深く運ぶ。

4. 漁法について

それぞれの魚の種類に特定の網を使った漁法はないと思われるが、ジョアルの漁法について述べてみたい。ジョアル、ウンブール、カイヤールが最も中心的な町であり、いずれも似たものである。

①釣漁業 (Ligne)

ピローグも小さく、船外機もヤマハ25,8型で、定員は3～4名と5～6名が中心である。釣糸と釣針を使用する。Thiof 類を目的とする。

②刺網 (Filet dormant)

釣りの場合よりやや大きなピローグとなり、5～6名、7～8名が中心。ヤマハ25型がほとんどである。ジョアルにおいては Langouste, Escargot de Mer などを捕獲している。

③巻網 (Filet Maillant)

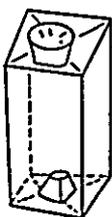
これは後述する Filet tournant と区別しているが網目がそれより大きく8～10cmあり、網の長さも100～120mで規模は小さい。ピローグにおいても中型から大型、船外機もヤマハ25型が最近40型に変わった。魚種は

Ethmalose (鰐) などを捕獲している。

④巻網 (Filet tournant, Senne tournante)

Filet Maillant に比べ、長さも長く網目も小さく素材はナイロンが多い。網の長さは 300m 以下である。大型のピローグで 10人以上乗り込んでいる。2 艘 1 組で 16~20人以上でおこなうチームもあり、ヤマハ 40型船外機が導入されている (ヤマハ 25型が以前使用されていた)。

⑤Casier (仕切り箱)



図のように鉄棒の枠組に網を取りつけた (張った) 仕切り箱で、主にイカ「紋甲イカ」を捕獲している。SENEPESCA (大洋漁業合弁), SOPAO (極洋合弁) が参加して買付けをしている。

⑥Senne de Plage (地曳網)

ジョアルでは通年、カイヤール、ファスボイ地方では雨期に使用されるという。網の形が最後部で袋になっていないようである。

5. 漁業資材の購入

漁民は各人漁業者である身分証明書と水産局発行のガソリン購入許可証を持っている。

①ガソリン

ティエスでは各漁村に漁業用ガソリン・スタンドが整備され 1/83CFA で売られている (当時)。今、普通に購入すると Super210CFA, Original 195CFA であるから、その優遇されぶりがわかる。

これは税関の管理下で免税で売られているからであり、許可証を持って出先の支所 (Poste de Contrôle) に行って 10l, 20l のチケットを買う。支所の職員が登録カードに日付と数量を記入し、月末にスタンドごとに (例 B.P-1, Mobil-1) と集計して報告する。漁民はチケットと交換にガソリンを購入する。ジョアルには 8~10カ所のスタンドがファスボイの小規模な所でも 1カ所スタンドが設置されている。そのチケットは州本部より担当のサインと印が押され各支所に配布されている。

②漁網、糸、船外機の部品

ジョアルではやはり同様に (免税ではないが) 許可証を提示して購入している。ここでは *CAPAS (ダカール) の職員が商品管理をしているが、

- ・ カイヤール、ウンブールは CAMP (モータリゼーション推進機関) の各
- ・ サテライトで購入できる。

*CAPAS (Centre d'Assistance à la Pêche Artisanale sénégalaise)

6. ジョアルの水産業の規模 (漁船について)

昭和56年4月30日の調べによると、当地においては約350艘もの船がひしめきあい伝統的な漁業が行なわれている。ヤマハの船外機が漁業において重要な地位を占めており、日本の援助が成功した例であると思われる。ピローグが大きくなれば当然のこととして、人数も増え、船外機も大きくなり漁法も釣りから巻網等に移行するであろうが、小型のピローグはヤマハ8、25型の船外機をつけ、5～6人で釣りから刺網へ中型ピローグはヤマハ25型(5～6名)あるいは(7～8名)の乗組員で刺網から巻網へ、そして大型ピローグではヤマハ25、40型を積み、より大きな巻網へということがわかる。

表. ジョアルに於ける漁業規模

| 出身州 | 登録数 | 主エンジン | 定員 | 4月末 現存数 | JOAL (中心月) | 実践漁法 |
|--------|-----|---------|------------|------------|----------------------|------|
| フルーブ | 128 | ヤマハ25 | 5～6名 | 83 | '80 12月 | 釣 |
| カップベール | 16 | 25 | 5～6 7～8 | 16 | '80 12月 | 釣 |
| ティエス | 141 | 8 25 | 3～4 5～6 | 137 | '80 10月12月 '81 1月 | 刺, 巻 |
| シンサルム | 53 | 25 | 7～8 | 53 | '81 1月 | 巻 |

(注) これはジョアルの支所のものであり、カップベールからの移動が少ないのは、ウンブールという一大漁業地が30キロカップベール寄りにあるためであろう。漁民が季節的に移動していることも理解できよう。また、以下に各州籍について述べる。

①フルーブ所属

漁船数128、母港サンルイ。船外機はヤマハ25型が77台と圧倒的に多く、同社製8CV型42台とつく。定員は3～4名が40艘、5～6名が80艘、7～8名が8艘で、定員5～6名が圧倒的である。漁業形態からみると巻網 (Filet tournant) 1、刺網12、刺網・釣り4を除いてはすべて「釣り」である。ジョアルへ移動してきたのは9月と12月がピークであり(8月-7、9月-28、10月-1、11月-7、12月-62、1月-7、2月-2、3月-4)、すでに戻っていた件数は45艘(1月-7、2月-10、3月-16、4月-4)であり、アクシデント等で年始めに戻る場合が多い。移動はだ

セネガルの水産物加工の現状

いたい陸上夜トラックに載せ、網や家財道具などを積み込んでおこなわれる。小型のものでも（大型はだいたいそうであるが）海上を流して移るものもある。

②カップベール所属

漁船数16, 母港リュフィスク, バルギィ

船外機, ヤマハ25型(16), ヤマハ8型(3)他

大型ピローグにはヤマハ40型も使用されている。定員は3~4名(3), 5~6名(6), 7~8名(4), 9~10名(2), 16名(1)。漁業形態は釣り(10), 刺網(3), 巻網(Filet tournant)3で, 12月に9艘, 1月に3艘, 2月に2艘活動中(注. 昭和56年4月現在)。

③ティエス所属

漁船数141, 母港ジョアル及びその近辺。カイヤール他も当然存在する。船外機はヤマハ8型(58), 同25型(59), 同40型(10), 他。大型ピローグに40型は積まれている。定員は3~4名(10), 17~18名(10, 但し2艘1組で登録済のもの1), 19~20名(7, 登録済のもの3), 21~22名(4, 登録済のもの4)。

漁業形態は釣り15, 刺網54, 巻網33(Filet Tournant, 以下FTとする), 巻網(Filet Maillant, 以後FMとする)であり, 定員9~10名にFMが多く, より多くなるとFTになる。ジョアルへは8月から3月までの間に移って来ており9月34艘, 10月16艘, 12月45艘, 1月15艘, 2月22艘となっている。

④シンサルム所属

漁船数53, 母港はボソウル, ティアロンスが多い。シンサルムから来ている舟は湿地帯内に存在する島からである。船外機はヤマハ25型49, 定員は5~6名(12), 7~8名(31), 9~10名(5), 16名(1), 23名(1)である。漁業形態は巻網, FT 3の他はすべてFMである。8月頃より移動がみられるが1月に30, 2月は10と年始めに集中している。

<出典>Carnet de Recensement des Pirogues 80-81 (Poste de contrôle à JOAL)

7. ジョアルにおける水産業の規模

(水揚げ, 及び加工品の流通から——1980, 1—6月期)

①水産に占める3ème Régionの位置

Atlas du Sénégal (1976年, editions j. a.) 誌によれば, 一般的には魚は生で消費され, 一部が加工にまわされる。セネガル人1人当り年間35kgを消費する。ピローグを使う Pêche Artisanale は80% (全生産量) を占めティエス州はそのうち56%を生産する。

Pêche Industrielle は, カップベール州のみである。Pêcheur Artisanal en Mer の半分以上がティエス州に泊まるのである。漁師は移動し11月—6月の乾期には北へ底魚を追ってカイヤール, ファスボイが中心となり, 4月—11月の雨期にはジョアル, ウンブールを中心として浮魚(表層魚)を追ってくるのである。しかし雨期にはシンサルムの島に住む人々は村へ帰っていくのである。そして農業(稲作, 落花生栽培)を行うのである。

②ジョアルの水揚げ加工

1980年1—6月期の Poste de Contrôle の水揚げについて table 2, その生鮮流通先(州ごと)を table 3, 水産物加工量を table 4, その消費先を table 5に掲載する(単位: トン)。

セネガルの水産物加工の現状

| table 2 Mise a terre (1980, 1-6月) | | | | | | | |
|-----------------------------------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|----------|
| (単位: t) | | | | | | | |
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | |
| Total | 6,296 | 6,481.9 | 5,779.6 | 5,129.5 | 4,395.2 | 7,282.7 | 35,364.9 |
| Total Poisson | 5,537.3 | 5,632.1 | 4,705.8 | 4,093.7 | 3,509.5 | 5,991.2 | 29,469.6 |
| Total Crustacé | 6.7 | 6.5 | 1.6 | 0.8 | 0.8 | 1.5 | 17.8 |
| (Langouste) | 5.4 | 6.5 | 1.6 | 0.8 | 0.8 | 1.5 | 16.5 |
| Total Mollusque | 752 | 843.4 | 1,072.3 | 1,035 | 885 | 1,290 | 5,877.6 |
| (Seiche) | 2 | 14.4 | 106.3 | 90 | 75 | 60 | 347.6 |
| (Escargot de Mer) | 720 | 790 | 870 | 900 | 750 | 1,200 | 5,230 |

| table 3 Mareyage (1980, 1-6月) 単位: t | | | | | | | |
|-------------------------------------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | (TOTAL) |
| CAP-VERT | 1,463.9 | 1,574.7 | 1,957.8 | 842.5 | 775.8 | 1,031.5 | 7,646.1 |
| THIES | 500.3 | 475.9 | 325 | 550 | 375.5 | 481.2 | 2,707.8 |
| CASAMANCE | — | — | — | — | 15 | 35 | 50 |
| DIORBEL | 150.3 | 180 | 186.2 | 225 | 225 | 250 | 1,216.5 |
| FLEUVE | 130 | 136 | 145.8 | 350 | 350 | 240 | 1,351.8 |
| LOUGA | 70 | 40 | 25 | 72 | 175 | 180 | 562 |
| ORIENTAL | 5 | — | — | — | — | — | 5 |
| SINE-SALOUM | 790.5 | 794 | 968 | 345 | 375 | 475 | 3,747.5 |
| (TOTAL) | 2,980 | 3,200.6 | 3,707.8 | 2,384.5 | 2,291.3 | 2,692.5 | |

| table 4 Transformation (Production) (1980, 1-6月) 単位: t | | | | | | | |
|--|-------|---------|-------|-----|-------|-------|---------|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | (TOTAL) |
| Guedy | 70 | 88.8 | 60 | 40 | 62 | 120 | 440.8 |
| Ketiakh | 397 | 430 | 318 | 485 | 324 | 830 | 2,784 |
| Méthorah | 15 | 10 | 7 | 15 | 15.3 | 45 | 107.3 |
| Yett, touffa pa'gne | 250 | 263 | 322 | 315 | 27 | 410 | 1,830.3 |
| Tambadiang | 280 | 300 | 48.6 | 50 | 30 | 125 | 833.6 |
| Saly | 50 | — | — | 10 | — | — | 60 |
| (TOTAL) | 1,012 | 1,091.8 | 755.6 | 915 | 701.3 | 1,530 | |

出荷に際しては Poste de contrôle の出荷証明書を必要とする。業者が 100CFA と引換えに出荷量、出荷先、種類(品名)、業者名、車番や荷姿などを口述して作成される。それに基づき集計される。

| table 5 Transport de produit transformé (1980, 1-6月期 単位: t) | | | | | | | |
|--|----------------|----------|---------|--------------|------------|-------|--------|
| | Guedy | Ketiokah | Metorah | Yett, touffa | Tambadiang | Saly- | |
| Cap-Vert | 120.5 | 496.3 | 96.6 | 735.7 | 69 | 22.5 | 1540.5 |
| Thies | 78.7 | 995 | 2.8 | 222.4 | 149.9 | | 1448.7 |
| Casamance | 12 | 15 | — | 37 | 43 | | 107 |
| Diourbel | 23.9 | 293.9 | — | 135.9 | 140.8 | | 594.5 |
| Fleuve | 70.7 | 49.4 | — | 331 | 215.8 | | 666.9 |
| Louga | 28.4 | 168.9 | — | 72.6 | 57.8 | | 327.7 |
| Oriental | 7 | 208.4 | — | 41 | 62 | | 321.4 |
| Sine-Saloum | 66.2 | 438.2 | — | 215.6 | 94.3 | 13.2 | 827.5 |
| Exportation | 33.7 | 119 | 8 | 36.1 | 1 | 24.3 | 222.1 |
| | Mali | Gambie | Mali | C.L | Nigeria | Ghana | |
| | C.I. Guinée | Nigeria | Guinée | Mali | | | |

資材の乏しい中で非常に莫大な量の加工をしていると思う。製品の良し悪しはとにかく、これから何に手をつけていくか模索する日々が続いている。食事に魚をよく食べる民族だけに、何か新しいものを作れば受け入れられる策地は充分あるのだから。辛い煙製品の製造量が少ないから、それに手をつけようかと考えている。しかし、現地人はそうやって手をかけても食べ方は相かわらずだし、第一酒を飲まないから日本人的感覚(煙製品、即、酒のつまみ)からすると……。行動する前に早くも種々の壁が考えられる。‘犬も歩かなければ棒にあたらぬ’のだけど……。

模索する日々である。

8. カイヤール (table 6) とファスボイ (table 7) の漁業規模について

| table 6 Poste de contrôle à KAYAR (1981-5-4調) | | | | |
|---|-----|----------|-------|-------|
| 出身州 | 漁船数 | 船外機 | 主定員 | 主たる形態 |
| KAYAR(THIES) | 103 | Yamaha 8 | (3-4) | 釣 |
| CAP-VERT | 9 | — | — | — |
| FLEUVE | 276 | Yamaha 8 | 3-4 | 釣 |

—: 記載なし

セネガルの水産物加工の現状

| table 7 Poste de contrôle à Fas-boye (1981-5-6調) | | | | |
|--|-----|-----|-----|-------|
| 出身州 | 漁船数 | 船外機 | 主定員 | 主たる形態 |
| Fas-boye | 46 | — | 3-4 | 釣・刺網 |
| Fleuve | 1 | — | — | — |

—:記載なし

〔i〕カイヤールの場合

①カイヤール船籍

漁船数103, 使用船外機はヤマハ8型34艘, 同25型16艘その他5艘。当 Contrôle では未記載の部分が多い。漁法は釣り及び巻網 (S. T.) である。

②カップベール籍 (含むモーリタニア籍1艘)

9艘のうちパルギー1, ジョアル2, ヨッフ2, ダカール1, ヤマハ25型6, 同8型3, ヨッフの舟は2艘で38人乗組み巻網 (S. T.) をしている。11月に1艘, 12月に8艘到着して操業している。

③フループ船籍 (ほとんどサンレイ)

276艘ヤマハ40型2, 同25型55, 同8型202と圧倒的にヤマハの製品が目立つ。定員は3~4名が104艘と最も多い (記載数130)。漁法は釣り120件, 巻網 (S. T.) 24件 (記載数144件), 巻網 (S. T.) を使用しているピロークにおいては漁法及び人数 (定員) を2艘1組で登録している。13~14人乗組み (片方に限れば6~7人) から30人 (片方に限れば5人) の登録まで16件ある。

カイヤールには11月より訪れ, 11月 (14), 12月 (136), 1月 (38), 2月~4月 (88) まで続き, 4月に2艘それまでに3艘アクシデントにより去っている。ちなみにカイヤールでは17人の漁師が死亡している。

〔ii〕ファスボイの場合

ファスボイは後背地に窪地で農業に適した場所を有しているため, 農業と兼業している様である。都市部からも遠くパツとしない漁村である。

定員は1艘に3~4人が最も多く, 乾期には Thiof, Ngot, Doi, Dai 釣り漁業が主であり, 雨期には刺網 (F. D.) 及び地曳網を行う。ほとんどが定住しており, 2~3艘のピローク関係者がジョアルに移動するという。

<6, 7, 8の補充>

ジョアルでは5月中に約60艘が移動して行った。船籍フループ25, カップベール7, ティニス21, シンサルム10である。それに伴い船外機の修理工もカ

イヤール、ファスボイあるいはウンボロへ出稼ぎに出かける者もいる。ウンボロは5-7月に最も漁師が集中するところで、閑散としていた Mboro Sur La Mer も活気づいているという。

3月から5月にかけて著者の活動状況は以下の通りである。

3月に入り冷凍庫が購入できたため、浜で購入した物をストックして、試みに干物などをつくることを始めた。

〔活動状況〕

Activité

| | | |
|-------|---|---------------------------------|
| 3月25日 | Congélation | [Seiche] |
| 27日 | Photograhier des Poissons | |
| 30日 | Congélation | [*Touffa] |
| 31日 | Transformation de Mollusque salé-séché | [*Touffa] |
| 4月1日 | Transformation de Poisson salé-séché | [Chinchard jaune] |
| 2日 | " | [Barracauda] |
| 7日 | " | [Sardinelle] |
| 8日 | Transformation de Mollusque séché | [Coque] |
| 8日 | Congélation | [*Touffa] |
| 8日 | Transformation de Poisson salé-séché | [Chinchard jaune] |
| 9日 | Congélation | [*Touffa] |
| 15日 | " | [Légyme] |
| 16日 | Transformation de Mollusque salé-séché | [*Touffa] |
| 17日 | Congélation | [Seiche] |
| 23日 | Transformation de Poisson salé-séché | [Chinchard jaune et Sardinelle] |
| 28日 | Transformation de Poisson salé-séché et Mollusque | [Sardinelle et *Touffa] |
| | Photograhier des Poissons | |
| 29日 | Congélation | [*Touffa] |
| | Transformation de Mollusque salé-séché | [Escargot de Mer] |
| 30日 | Transformation de Poisson salé-séché | [Chinchard jaune] |
| | Photograhier des Poissons | |
| 5月11日 | Transformation de Poisson "Fushi" | [Thonine] |

12日 Transformation de Poisson salé-séché

[Chinchard jaune et Barracauda]

*nom vernaculaire

製品はセネガル人、日本人の胃袋で消費された。セネガル人において、これといった反応はない。セネガル人もまだ水産局の人間、及び隊員の近所の人間に限られている現状である。セネガル人は日本式の干物を見てきれいだと言ふ。ウジ虫がはい回っている物よりは、それはきれいだらうと思う。

9. 水産業に影響を与える因子について

(1) 大陸棚

セネガル及びガンビアに接する大陸棚については、特に水深 100m についてみると、295,000m²にも及ぶ。セネガル北部に位置するサンルイ、ここは昔の首都でもあるが、現在も続く伝統的漁業形態を有する漁師町でもあるのだが、沖合へ幅 50km にも達し、南下するに従ってカイヤール海溝の位置するカップベール半島近くで狭まってしまうのだが、さらに半島を越え南下するに従い広がっていくのである。

特に、セネガル南部カザマンス地方の100m 以下は、沖合100km に達する程広がっている。全体的に海底は変化に乏しく、河川より流出した堆積泥はセネガル川、カザマンス川の河口付近に北南方向に伸びて、沿岸海流に引きずられた格好で横たわっている。

(2) 海流とその塩濃度

海流は夏と冬（乾季と雨季といった方が適切かもしれない）では異なり、1月より4月にかけてはカナリア海流（寒流）の一分流がセネガル沿岸に沿って流れる。その上、表層海水は貿易風により沿岸から遠ざけられ、冷海水が海底より湧き上がってくる。この栄養塩にとんだ海水は、植物プランクトンの急速な成長、発育に有意である。

そのことは様々な魚種の強い集中、すなわち、好漁場の形成をもたらす。表層に近い海水温は異常に低く、サンルイの北西域やカップベール半島の南側沿岸で16℃以下となる。夏期カナリア海流は暖かい反赤道海流により、西東の方向から北方に押しやられてしまう。その頃のカナリア海流の塩濃度は35‰以上に達する。

9～10月にかけては暖かく塩類に乏しく、海水が沿岸域の北部にまで張り出してくる。それはモンスーンによる雨と河川からの流出物により、塩類を供給

される。塩類はセネガル川、カザマンス川、ガンビア川の河口付近において莫大であり塩濃度30%以下である。

(3)気候

サンルイからダカール（カプベール半島）にかけてのセネガル北側沿岸地方は、グランド・コートと呼ばれ他地方に比べ、日較差も小さく雨季の8月、9月にも100mmを越えないという。雨量が少なく、そして雨季も短い快適な地方といわれている。

ダカール—カイヤールウンボロにかけては、一大野菜生産地となっている。それらはアソレス諸島の高気圧に派生する海洋貿易風によるところが大きい。北から、北西から、この海洋貿易風は絶えず吹き湿度を含んで冷涼であり、特に冬は冷たい。さらに僅かな日較差により特徴づけられる。領域はハルマタンや南からの季節風との関係、特に季節風との力加減により変化するが、南方（カプベール）で弱くなるが年間を通じてカプベールの北方グランド・コートに持続している。内陸部ではハルマタンの特質である形質を容し、急速に乾燥していく。降水が少ないのはハルマタン風が関与していく。ハルマタンは優勢でサハラ砂漠大陸季節風の終焉の一派をセネガルではそう呼んでいたが、その長い道程に由来する過度の乾燥と際立った日較差が一特徴で、もちろんのこと降水能力はなく、その過度の乾燥状態が稀代のたいへん強力な能力となっている。沿岸地方グランド・コートに近づくにつれハルマタンは海洋貿易風の湿気をおび、気層のさらに上層に吹き上り、海洋貿易風の降水になりうる。そのため、降水が少なくなることになる。グランド・コートの気候は海洋の貿易風との影響により決定される。

水産加工について気候だけ考えてみれば、冷涼な気温と、湿度を移動させる風が絶えず吹いているという条件は適しているであろう。

帰国して想うこと

吉田 和訓

もう帰国して、11カ月余が経ってしまった。1月より駒ヶ根訓練所で、国内協力員として働かせていただいているが、そこで、帰国された多くのOBのすばらしい協力活動を聞くにつけ、何もできなかった自分の2年間は、恥ずかしく思われる。たまに帰省すると、田舎のオバサン達が、「たいへんだったねー」と化物をみるかのように言われると、私自身、閉口してしまう。2年間の生活は、楽しく思い出される。食べたい物を食べ、飲みたい時に好きな物を飲んだ。鰯の一塩干や鱈の開きの焼物が毎日の副食であっても、ビールと卵（ゆでた）が夕食であっても、自分の能力とあきらめ、材料（紋甲イカや擬サザエ）を持って料理してもらいに、隊員を訪れたこと。いつも落花生をポリポリ食べていたこと。田舎のサッカーチームで興じたこと（スターにはなれなかったけれど）。毎日よくあきもせず、ポリバケツを持って浜へ買い出しに通ったこと。Bar Terrasse（バー・テラス）とは名ばかりの酒屋で、毎晩ガゼール（最も国民的なビールの名称）を飲みつつ、夕涼みをしていたこと。乾季の大西洋に沈む夕陽の美しかったこと……そんな事々が鮮明に、やはり思い出される。

仕事はどうだったんだろうか？ 着いて、ウンブールに行って現場をみて受けたショックから、立ち上がれず2年を終えてしまった。実際、本当に技術的にも、考えさせられることが多く、たいへん貴重な時間であったと思う。また、私自身の性格的弱さにも、原因があったと思う。既存の技術のなかに、或は駭人達のなかに入っていくことを躊躇し、踏み込めなかった。

そんな私の報告書が、このような目の目を見ることになってしまった。こんなものでも、これから赴く方々のお役にたてば幸いだと思う。このような機会を与えて下さった関係者の方々に感謝したい。

また、余談ながら、これから赴く方のなかで、魚醤油のような魚を原料としたソースで、飯にかけて食べられる商品を作れたら、おもしろいのではないかと、付け加えたい。

吉田隊員の報告書を読んで

鈴木 たね子

吉田隊員の報告書「セネガルの水産物加工の現状」を読むと、セネガルの漁業、水産物加工、魚料理に至るまで、大変良く調査されている。統計資料も乏しいと思うが、足で調べられた努力は大きい。今後セネガルに行かれる隊員にとっては、この報告書は役に立つことと思う。

吉田隊員の報告書は、淡々としており、隊員自身の感情の吐露や、感想に乏しいが、ただ一つ「これから何に手をつけていくか模索する日々が続いて」というくたりに読んで沈鬱な気分になってしまった。

与えられたスケジュールに従って、わき目も振らず忙しくこなして行くのは、さぞ大変なことと思われがちであるが、その様な生活は、むしろ精神衛生も良く、達成感に溢れて、派遣期間は夢の間に過ぎて行くものである。

それに引き替えて、何をしたら良いかと模索の日々を過ごすのは苦しい。大げさにいえば、芸術家が創作活動を始める時の苦しみ、研究者が研究課題を決める時の苦しみにも似ている。そういう静的な思考と計画は、やみくもに動き回るよりも大切なことであるが、その苦しみは、それを経験した者のみを知る孤独なものである。

隊員のその苦しみを皆でもっと分担し、励ますことが、また適切なサジェスチョンを与えることが必要であったと思う。出発前に現地の状況や、どんな点にポイントを絞ったら良いかなど、セネガルの水産事情に詳しい専門家との交流も充分にあったらよかったが、勿論そうした準備をされたのかもしれない。引き続きセネガルに派遣される隊員は、吉田隊員の経験が充分生かせると思う。

筆者は、全くセネガルの水産物加工の事情には無知であるが、思いついたまま述べてみるが、ピンとはずれかもしれない。

かつて南イニメソの FAO から、魚の干物を数種送って来て、どれが品質が良いかコメントを求められた。しかし包みを開けてみてびっくり。5種類あった塩干魚は、日本の食べ物の常識からは考えられない物であった。

干物の魚油は完全に過酸化物を形成し、褐色のドロドロした油が魚の回りに付いていた。そして、原料魚の鮮度は余程悪いとみえて、酪酸に似た臭気を発

生していた。実験室の片隅に置いておくと、臭いと皆に嫌がられた。

私は、どの塩干魚もヒトの食べ物としては不適で、優劣をつけるまでもないと書いて送った。しかし後で考えると、開発途上国の事情を知らない傲慢な返事をしたのではないかと反省している。

報告書の中にもあるが、ウジ虫が這い回っている干物よりも、日本式の干物の方が美しいに違いない。ただ、鮮度低下した魚の臭いや、油焼け臭が、彼等にとって非常に好ましいものであったりするところが難しい問題である。

しかし、基本的にいえることは、魚油の酸化は有毒であるばかりでなく、せっかくのタンパク質の栄養価が低下する。油焼け防止と鮮度保持は大切なことで、徐々に「きれいな干物」の普及を図ることは、栄養と衛生の面からも必要と思う。

報告書にあるように、イワシの塩干品を作る際に、丸のままに塩を振って2日間放置しているが、せめて内臓を除いてから、腹の中にも塩を振って放置したら、かなり鮮度は保てるのではないかと思ったりした。

何れにしても、現地を知らない者の提案なので、そのつもりで笑い流して頂いてよいが、もし何かのヒントになれば幸いである。

セネガルという遠い国で、これからも水産物加工に取り組む隊員の方々の御健闘を祈って止まない。
(協力隊技術専門委員)

セネガルの農業と協力活動

中間報告書
職 種 野菜
氏 名 前田 尚志
配属先 社会開発省農村近代化センター
 ティエス州事務所

前田隊員の略歴

生年月日 昭和29年8月2日
出身地 三重県
学 歴 東京農大農業拓殖学科卒
派遣期間 55年10月～58年9月

1. 一般的特質

セネガルの農業は、本質的には雨季における栽培が定着している。乾季はほとんどの地域が農閑期といえる。栽培植物と収穫高は、雨量の密接な従属下であり、近年は平均的に雨が不十分で、耕地の減少化が見られる。特に国土の北と南部に顕著であり、また国土の北半分のサヘロ・スーダニアン地域は特に旱魃の危険にさらされている。

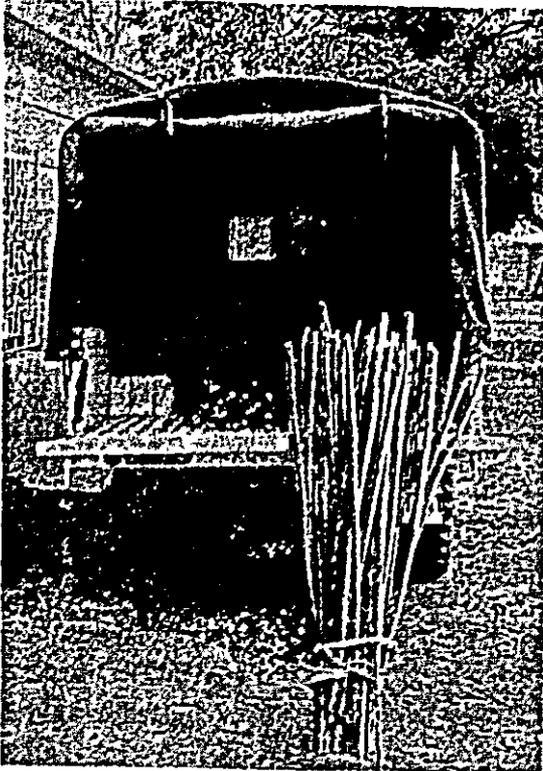
慣行農業は旱魃の危険にもかかわらず、灌漑施設をほとんど設けていない。しかし慣行農業は異った二つのよい水の利用法をわきまえている。一つはカザマンス地方において、稲作に応用されている雨水の貯水による栽培で、他の一つはカップベールの北部の海辺近くの低地やセネガル河岸沿いにおいて行なわれている乾季における減水農業である。これは乾季のために水位が下がった部分を耕地として利用するものである。

農業は国の総体を支配する経済として、またセネガル人の日常生活において非常に重要な役目を担っている。セネガル人の大多数は古い農民文化の後継者達で、その中の四分の三は小規模な家族経営で、彼らの作り出す土地からの生産物とその現金収入で生活する農村の人々である。国家経済は、海外貿易と工業部門が大きな部分を占めており、その中でも重要な土台を担っているのが農産物である。食糧と国家経済、この二つの任務に応えるために農民のほとんどが穀物と野菜に耕地を利用しており、特に落花生は国家経済及び国民の食糧として大きな位置を占めている。

2. 食物栽培

(i). ミル 食糧供給における栽培体系としては、穀類は絶対的な地位を占めている。雨量の変化、土壌の適応性、土地の傾斜、人間の嗜好等が穀物を栽培するために用いられる技術のように、穀物栽培の分布において地域差を生じさせている。砂土や砂壤土は国土の大部分を占め、セネガル・デルタとガンビア国境の間の地域は特に顕著で、とりわけここはミル (Mil, 粟に似た穀物) の領域である。この穀物は特有な2種類を持っており、ひとつはスナ (Souna) と言われ、栽培しやすくその生育期間が90~100日と短く、そしてやせた土地でもよく育つが、少々味が劣る。もう一つはサニオ (Sanio) と言って生育期間が120日前後と長く、また有機質に富んだ土壌を好むが味はよい。この二つのミルは特に落花生盆地 (セネガル・デルタとガンビア国境との間の落花生栽培

培地帯をいう)における食物栽培の中で一番適しているといえ、穀物の基礎としてそれは十分な歴史を持っている。現在の生産量の発達は、森林における土地利用の増大と、新品種スナの開発によるところが多い。



主食のミル

に土壤に蓄積された水資源によるところが大きいといえる。

(3). 米 セネガル農業で3番目の穀物生産は米で、その伝統的な栽培地帯はカザマンス (Casamance) 地方である。また、今日はセネガル河のデルタ地帯においても生産されている。カザマンス地方における米の中心地は西部地域の東と考えられ、そこにおいてはミル栽培の減少をきたしている。カザマンス川上流、中流地域における稲作は、一時的に氾濫した雨水の浅瀬や、小さな谷に作られている。それは、婦人達が成長初期の森林を伐採して設置したもので、それに対して男達は台地におけるミル栽培に従事している。この上、中流地域に対してカザマンス川下流は、常設の網目状の畦を持つほど水田は整理され、

(2). ソルゴー セネガル河流域は主としてソルゴー (Sorgho) の領域である。セネガル河中流に沿って段々に並んでいるトゥクルール族 (Toucouleur) の部落は、セネガル河の氾濫平原で構成されている。7月から10月まで、フッタ地域 (Fouta) の多量の雨でもたらされるセネガル河の増水は、著しい広い河床を覆い、11月よりの水の退却は水分を含んだ粘土質の土地を生みだし、そこにソルゴーの種が播かれる。特にウロ地域 (Walo) はソルゴー専属の領域である。つまりソルゴー栽培は、増水期間

ミルと共に日常の食糧を供給しているといえる。近頃は落花生の栽培されている土地の耕作にも、稲作が入りこみつつある。これは米の価格の上升による収入の増加及びセネガル人の食事におけるミルから米への嗜好の変化が原因と思われる。カザマンズの稲作は非常に古く、ヨーロッパ人のアフリカ大陸侵入以前に丹念に作られていた。それは、耕作・土壌の脱塩・移植栽培・水田整理等の原住民の伝統的技術に示されている。品種としては、以前はアフリカ原産種を栽培していたが、今日ではアジア種を採用している。

(4). トウモロコシ カザマンズ地方においては減少しつつある。長年食糧の補助を担ってきた4番目の穀物トウモロコシは、数年前から著しい増産がおこなわれており、特にサルム地方 (Saloum) の南部地域が顕著である。菓子類に乏しいこの国においては、落花生と並んで重要なおやつ役目を担っている。

(5). その他 その他の穀物の中で重要なものとしてはニエベ (Niébé) とキャッサバがあげられる。ニエベは豆科の植物で、副食用作物として用いられ、その栽培はミル栽培と協力関係にある。また、キャッサバは落花生栽培地域において特に専門化された地域で、第二次世界大戦以後広がったもので、穀物総生産量の減少を緩和させている。

ようやく最近になって、乾季における野菜栽培がニアイ地方 (Niayes) の低地と首都近郊において行なわれる様になった。また、北部のリシャー・トール (Richard-Toll) では、オランダの技術による加工用トマト栽培も行なわれている。そして、これらの地域で栽培された野菜を、ヨーロッパとの季節の差を利用して輸出する事も考慮されており、現にメロン、インゲン豆は少量であるが輸出されている。この事は、商業栽培の一分野としての果樹栽培を喚起することにつながるといえる。

3. 商業栽培

(i). 落花生 セネガルの長期間おこなわれている中心的な商業栽培は落花生である。生産量は年間、普通の雨量で、平均して100万トンに達する。しかし、この生産量は気候の変化、特に雨量によって50%の減収をもたらすほど不安定である。セネガルの落花生栽培は、最初落花生盆地の北部に始まり、シン (Sine) 地方やサルム (Saloum) 地方、そしてカザマンズ地方を含むすべての地域に広まった。

最初に植民政府によって試みられたこの落花生の開発は、商業網の設置、輸送力の整備、周辺地域からの季節労働力の確保、気候、土壌に適合させたパン



落花生の山

ベイ (Banbey) 農業試験所の努力等の援助を得て発展していった。それはセネガルにおける最初の工業化といえるもので、第2次世界大戦より大製油所を始動させており、セネガルの地理の変化に大きな影響を与えた。つまりそれは、東部地域の新耕地開発を促し、半世紀のあいだに耕地面積の倍増をもたらした。この東部地域への進展は、本質的には、歴史上に現われるウオロフ国（カヨール地方とバオル地方）出身の人達の移民による所業といえる。この移民の管理の大部分は、19世紀の終わりに設立されたイスラム教団の幹部によった。農業生産地への移民分配業は、イスラム教団の最高幹部アマドゥ・バンバ (Amadou Bamba) の資金力を確定するのに十分であった。そして宗教の首都トゥバ (Touba) はフェーロ (Ferlo) 地方の森の中に設置され、また信者の町、すなわち移民事業の最前線を担う人達の町ムバケ (Mbacké) は、プール族 (Peul) の放羊地との境界上の町であった。そして南部地方への移民は、タンバクンダ (Tambacounda) の方向にむけて伸びた鉄道の発展にそって進んだ。各駅は農業移民の分配拠点と共に、落花生取引の拠点となった。

落花生栽培の成功は、慣行農法でも栽培できる簡易性と、農民にもたらす現金収入の影響によると思われる。落花生は生育期間3～4カ月（熱帯地方）で、高温を要し、最適25～27℃、積算3,600℃で、低温は生育を阻み、含油率を低下させる。雨量は少くとも250～300mmを必要とし、500mmを最適とし、また土壌は砂質表土を有する事で、つまりセネガルの国土にはもってこいの植物といえる。不都合といえば、主食であるミルと栽培時期が重なるので、ミル用の耕地面積を減少させることである。しかし1年間に3～5カ月しか雨の降

らないこの国では、何ともしがたい問題である。落花生栽培の生産量の増大は新耕地の開発の結果であり、また最近10年くらいは、品種の改良と集約的技術の導入といえる。

(2). 綿 落花生の単品栽培が含む経済的リスクを避けるため、セネガル政府は独立以降、農業商品作物の多様化を進めてきた。その結果、1965年より綿の栽培面積が、綿実1ha当り平均収量1トンを越す耕地が4～5万haに及ぶようになった。綿は雨の必要量が落花生より高く、その範囲は年間雨量900mmで、特に1000～1200mmの雨量のある地域に広がっている。サルム地方の南部、カオラック(Kaolack)ークングール(Koungheul)軸の南部、セネガル・オリエンタル州(Sénégal Oriental)のタンバクンダ(Tambacounda)と、特に好条件地の上カザマンス(Haute-Casamance)地方に畑が開発され、また中カザマンス地方(Moyenne-Casamance)のいくつかの飛び地にも及んでいる。綿栽培は限られた地域であるがすばやく発展し、カオス(Kahone)、タンバクンダ、ベリンガラ(Vélingara)等の生産中心域に、製綿工場の設立を生じさせた。しかしながら、技術と人手と手入れの多く必要とする綿栽培の発展はゆるやかに進んでいる。それは特に落花生栽培よりも少い利益しか得られないという事が大きな原因である。

(3). サトウキビ 工業生産用作物として、セネガル政府はリシャー・トール(Richard Toll)に、砂糖の国家保有を目的に、灌漑栽培によるサトウキビの生産を行なっている。これは国家の作物多様化政策の結果であり、また安定的に食糧を国民に供給する、国家による市場開発ともいえる。そしてセネガル政府は、国民の食糧を確保すると、食糧自給率を高めるために今後も、この地域の開発に力を入れるであろう。

4. 最近の変化

独立以来のセネガル農業の発展は、技術の改良と組織の大きな改革によるといえる。それは綿の成功の他に、サルム地方南部を中心としたトウモロコシの普及、セネガル・デルタにおける稲作の開発、そして落花生産地のほとんどの部分でサニオにとってかわった改良品種スナの成功をよびおこした。農業技術の改良は、畜力特に牛類の牽引技術の導入が大きい要素をしめている。これによりセネガルにおける本格的な農器具の使用(鋤、鋤、播種器、荷車等)が始まり、生産性を非常に高めながら、農民の負担を減らし、耕地面積の拡大を促した。それは単に動力源としただけでなく、高額の現金収入をもたらす優良牧

場を誕生させた。

組織の改革は、第一に組合運動の発達と流通経路の改革を目的としていた。商品栽培の旗頭である落花生は、今や国家機関である ONCAD（開発協力援助国家事務所）の指導のもとに、耕作組合に依存している。これは以前のレバノン商人達の手形取引の消滅をおこし、農民自身による落花生の販売管理を導入するに到る。改革の二番目は、農村地域の開発のための組織の設置である。例えば SAED（デルタ研究・整備協会）はデルタ地域だけでなく、セネガル河流域にも灌漑施設を広めた。同様に SODEVA（農村開発普及協会）は落花生盆地地域に対する農業開発の任務を帯び、SODEFITEX（繊維繊維開発協会）は綿栽培の発展をになっている。各々の組織はその地域に対する適確な技術（種子・農機具・肥料農薬等に関する）を拡散し、組合と協力して生産者の保護・育成に努めている。そして地域住民の育成・活気・教育を促すこの活動は、直接開発に結びついているといえる。

※ONCAD は解散

5. 業務活動の推移

前回報告時に調査員より助言があり、遠隔地にあるパイロット・ファームは当面諦めて、単車で通える農家五軒を選び、そこに集中的に調査・試験・助言・指導等の活動を行ってきた。それで現在ようやく、この地域における野菜栽培の現状が理解できたところで、これから本格的な普及活動を始めようという段階である。しかしながら残りの任期の半年は、野菜栽培の農閑期にあたり現場での活動ができないため、任期の延長をもってこれに対処しようと考えていた。仮りに延長が可能となれば、これまでに得た資料をもとに普及活動に入りたいと考えていた。

(1). 調査内容

(ア). 調査用紙によるパイロット・ファームの総合的調査（経営規模・労働力構成・栽培作物・年間収入等。尚、調査用紙は現地政府に提出した81年総合報告書に添付）

(イ). 各パイロット・ファームの土壌調査（15項目）

(ロ). ティエス州内に流通する月別野菜価格調査

(ハ). 病虫害及び鳥獣害調査

(2). 試験内容

(ア). 日本種の栽培試験（トマト、ナス、ダイコン、スイカ、山東菜、ピーマ

ン等)

- (イ). ポットを利用した移植栽培 (ナス, スイカ, ビーマン)
- (ロ). 採種試験 (ダイコン, パクチョイ, トマト)
- (ハ). メロン, スイカ (ニュージーランドより取り寄せる) の支立て栽培
- (ニ). 防鳥テープ・パネルによる防鳥試験
- (ホ). 防鳥網による防鳥試験
- (ヘ). 液肥の効果試験
- (ロ). アリに対する農薬効果試験
- (3). 助言, 指導内容
- (ウ). 大根栽培における適正な畝間・株間及び間引き土寄せの仕方
- (イ). トマト栽培における支柱支立て栽培の方法
- (ロ). 播種時における灌水の仕方
- (ハ). 適正な育苗の仕方
- (ニ). 堆肥の作り方
- (ホ). 播種及び育苗用土の作り方
- (ヘ). 播種箱による播種の仕方
- (ロ). 追肥の仕方
- (ウ). 移植の仕方
- (エ). 病虫害の説明

6. 担当パイロット・ファーム概要 (各論)

(i). 適地性

夏季平均気温が30℃以上続き、年間雨量 500~700mm (7~9月) しか降らないティエス州においては、年間を通して野菜栽培を行なっているのは、非常に限られた地域で地下水の比較的豊富で且つ涼しい西部沿岸地域に集中している。

内陸部にあるパイロット・ファームでは、気候の涼しくなる11月より5月までが野菜栽培期間で、それ以外は特殊な施設でも作っていない限り栽培は難しいといえる。それでも現在わずかに雨季 (7~8月) の間に、オクラ、ピサップ (葉・茎・萼を食用とする野菜) が栽培されている。

11月より平均気温は25~26℃に下がり、1~2月には20℃位まで下がるので、けっこう温帯で見られる大部分の野菜は栽培可能となる。ただし低温の必要な物は難しい。例えば、白菜はほとんど巻かず、日本で播種の遅れた巻かな

い状態とよく似ている。

栽培品目は、タマネギ、キャベツ、ナス、ピーマン（鷹の爪）、メロン、ダイコン、スイカ、オクラ、カボチャ、ニンジン、ビサップ、トマト、サラダ菜、パセリ、インゲン、ペパーミントとけっこう多く、ほとんど肥料もやっていないがダイコンとタマネギ、キャベツは日本風にいえば格外がほとんどであるがセネガル・レベルで見れば、まあまあよくできる作物といえる。

土壌は砂質土が表土を覆っており、水分を含むと固くしまり、そのため少し覆土を厚くすると発芽率が落ちると言った具合である。また、乾季には非常に風が強く、その影響で土が流動的となり、作物を覆ってしまう程なので、風よけは必要不可欠といえる。

(2). 対地力性

土壌は弱アルカリ性より強酸性まで様々であり、主要三要素をはじめ、かなりの要素が欠乏しており、堆肥（たいきゅうひ）はもちろん微量要素の施肥効果も大きいと思われる。農家は年に1、2度、堆肥（馬・山羊・牛）らしきものを入れているのだが、あまりよい物とはいいがたい。またその施し方も土壌の表面におくだけなので、風が吹くと消えて無くなる事が多い様である。雑草は問題になるほど繁殖せず除草するには楽であるが、言いかえれば草も生えない土壌といえる。表層の乾燥している部分の土壌は柔らかいが、水分を多く含んだ地中は非常に固くしまっており、作物の根の伸張を阻止している。

(3). 対肥料性

基肥・追肥といった観念はなく、ただ単に堆肥を畑に撒くといった感じで、それほど重視していない。それよりはむしろ作物の不出来を水によるものとする観念が非常に強い。堆肥の材料としては、使役用に使っている牛や馬の糞尿と食用の山羊の糞尿があるが、出来れば養鶏農家より取り寄せて、鶏糞とこれに落花生のカラが大量にあるのでこれを合わせて野菜用堆肥を作りたいが、採算が取れるかどうか問題である。また、化学肥料も大きな効果が期待できると思うが、これも同様に採算性が問題といえる。

(4). 対水分性

担当パイロット・ファームは全戸井戸水を利用した野菜栽培で、井戸の直径は約2mで、その水位は10~50mとまちまちである。動力ポンプはもちろん手動ポンプさえも備えておらず、静滑車を利用して、ひもの先にゴム袋をつけて、人力または馬力で引き揚げる方法をとっている。そして一旦汲みあげた水は、2~3m³の貯水槽に溜められ、直接そこから如露で畑に運ぶか、貯水槽

より出ているホース（落差利用）で少し離れた所（20～40m）まで運ばれて、その地点より如露に移して灌水するといった方法で、ほとんど人力といえる。灌水は夕方少し日射しが弱くなってから家族総出（男のみ）で始められる。とにかく貴重な水で如何に多くの収量をあげるかという観点からみれば、日本の集約度の高い技術が生かせる事が多いと思われる。ティエス州内15のパイロット・ファームの井戸水中、4軒は塩分を含み（野菜に影響を及ぼす数値）、その内2軒は野菜栽培が不可能に近い含有率を持っている。そのため、この農家に対しては、他の場所での野菜栽培をおこなうよう助言した。



如露による灌水

(5). 季節性

6月から10月までは、ミルと落花生の栽培による労力の不足と、高温による栽培の困難さにより、内陸部にあるパイロット・ファームにおける野菜栽培は11月より5月までがその季節といえる。年内にほとんどの野菜が播種され、タマネギ、ダイコンが少し遅れて1月頃播かれる。収穫は2月より始まり、3～4月が最盛期といえる。栽培期間中の主な作業といえば、タマネギ、トマト、ナス、ピーマン等の移植と灌水がほとんどで、他に間引き、中耕、除草、追肥、農薬散布等の肥培管理は全く行なわれていない（尚、毎年播く種は常に同じと言うわけではなく、播いたり播かなかったりと不安定である）。

(6). 被災害性

(7). 病害——疫病、萎ちょう病、青枯病、モザイク病、ネマトーグ、べト病、根朽病等と思われるものが顕著であるが、基本的には、病気に強い健全な作物を作れない土壌による原因が大きいと思われる。故にこれらの病害に対して農薬で対処するよりも、健全な植物体を作る事が先決であるといえる。それで農家に対しては、正しい堆肥の作り方と施肥の方法を指導する必要がある。

(4). 虫害——主なものとしてアオムシと数種類の蛾の幼虫が葉菜に、地中海ミバエが果菜にそれぞれ大きな被害を与える。特にミバエは収穫が零というほどの被害を与えるだけの力を持っている。また、蛾は播種直後の種を食べたり果に運んだり、発芽直後の幼苗を食害したりして、けっこう大きな被害を与える(大小様々な種類の蛾がいる)。これらの虫害に対して、現状では農家は何の対処もせず、なすがままに放置している。日本と違ってあまり外観にとらわれていない価格システムとはいえ、やはり美しい方がどちらかという高く取り引きされるので、防除する意味も大きい。農薬の取扱いや残留問題が少々気になるので(あまり野菜を洗わないので)、日本的にすぐに農薬を使うべきか、いささか疑問が残る。これは熟考の必要があり先の問題とする。以前にどこかの援助で農薬散布器が各センターに置かれたが、ほとんど利用されていない。これは野菜栽培に対する農薬の使用法の知識を持っている人間がいないためといえる。

(5). 獣害——ウサギとネズミがこの地域の二大獣害である。ほとんどの植物が枯死か休眠状態の乾季に、みずみずしい野菜の育つ畑を集中的に目にかけて、これら二大小獣は連日襲って来るため、被害はかなり大きく、苗床の幼苗が全滅するといった事もしばしばある。農民はこれらに対して、ネズミ用の毒薬をとこところに設置したり、地中より侵入を防ぐため、風よけに取りつけてある垣を地中30~40cmまで埋め込んだりしているがあまり効果はあがっていない。一番よいのは地中1m位にコンクリートかブロックで垣を作るのが効果が大いだが、費用がかかるのでこれは無理である。これ等獣害に対しては効果は大いと言えないが、日本でおこなわれているいくつかのネズミ、ウサギ取りの方法を導入する予定である。

(6). 鳥害——数種の鳥が乾季の中、青物を求めて畑に飛来してくるが、中でもスズメの類とハトの類が一番多くの被害を与える。対策として現在ガソリンで作動する“大砲”とよばれる、音で鳥類を威嚇する器具が使われているが、最初のうちは効果もあったらしいが、回数を重ねるうちに鳥も慣れて効果が著

セネガルの農業と協力活動

しく落ちたようである。また、燃料に必要なガソリン代も農家にとって負担なので、今はあまり使われていない。そこでこれら鳥害に対して、日本より取り寄せた防鳥網で畑を囲ったところ90%以上の割合で鳥の侵入を防ぐ事ができた（垣が完全でないので、少しはそのすき間から入る鳥がいる故）。効果は非常によい網であるが、農民にとって決して安い物とはいえないので、普及するまでいくかどうか疑問だ。州内にあるパイロット・ファーム位は何とか協力隊の機材で普及させたいと考えているが、その後はどうするか現在名案はない。



スズメやハトなどの鳥害が多い

(6). 風害——日本ではあまり大きな問題といえないが、セネガルでは非常に大きな問題となっている。乾季に吹くサハラ大陸貿易風の影響で、常時強風が畑に吹き、幼苗や支柱の必要な野菜を脅かして、また風と共に砂を移動させるので、いつの間にかやら苗が埋まってしまう様な事がある。故に、ここセネガルでは野菜栽培には垣根が必要不可欠といえる。農民はミルの茎葉を使って器用に垣を作ってこれに対処しており生活の知恵だと思った。

(7). 技能性

パイロット・ファームの農民が行なっている野菜栽培で、最大の間違いは、野菜を落花生やミルと同じ様に考えて栽培している点にある。つまり種を播いて実がなるまで、ほとんど手をかけず単に灌水のみ行なうだけで、落花生栽培



風よけの垣根

やミル栽培に比べて手のかかる野菜栽培に特別な配慮を行っていないということである。この事は、農民が基本的な野菜栽培の技術を理解していない事であり、この現状では満足のゆく収量が得られることがないので、野菜作りの基礎から教える必要がある。その内容は次に記す。

(ウ) 播種時における灌水——現在では、播種して灌水する時に大きな目の如露を使用するため、ポタポタと水が流れ落ちるので、せっかくていねいに覆土しても種が浮き出て、それを繰り返すうちに種子が乾燥して枯死したり、風で飛ばされてしまう事がある。これに対処するため、目の細かい如露の購入を指示し、播種時に新聞紙やミルの茎で被覆して灌水する事も指導する。

(イ) ダイコン・ニンジン等の間引き——ティニスでもダイコン、ニンジンは比較的よく出来る作物であるが、これを栽培するにあたって農民はパイロット・ファームの小さな場所に多量の種を播き、そのまま収穫まで待つといった具合で、日本ではとても見られない畑を作っている。これに対処するため適正な畝間、株間を教え1カ所に日本なら4～5粒播くところを、種代もバカにならないので、ここでは3粒に節約して播種させて形のよいものを残して、残りを間引くことを指導する。最初、芽の出ているものを引き抜く事に抵抗があった様であるが、成長を見るにつれてその意義を理解したわけである。

(ウ) トマトの栽培——日本で加工用トマトを栽培する様に、何も支柱らしき

ものは立てず、芽かき、摘心等の整枝支柱栽培は全く行なわれていない。故に茎は分枝しほうだい、実も着きほうだいで果実も小さく、病気も多く、早く株がダメになるものが多い。これに対処するため、次のシーズンには支柱を立て整枝法による栽培を指導して行きたいと考えている。その時に、ここは風の強い地域なので、また支柱に向く様な細長い木も少ないので、あまり長い支柱がいらず比較的風に強いと思われる一段摘心栽培、または二段摘心栽培で行なってみようとして計画している。

(4). 無駄の多い株間・畝間——農家平均 300~500m² のわずかな畑なのに、株間・畝間を必要以上にとって栽培しているので非常に効率が悪い経営といえる。限られた面積で最大の収穫をあげるためには、こういう無駄をなくす必要がある。

(8). 再生産性

セネガルでは野菜の種子はほとんど海外（アメリカ、ヨーロッパ）から輸入しているものが多く、国家機関・農家等で自家採種しているものは少ない。パイロット・ファームで自家採種している野菜は、ピーマン、オクラ、カボチャ、ネギ、メロン位で他の物は購入している。故にF₁種子は全て輸入で、そのため高価で相当の技術を持っている農家でないと採算を得ることは難しく、よってパイロット・ファームに対してはまだまだF₁を使って採算をとれるところまで行っていないので導入はしていない。日本より取りよせる場合でも、固定種を選んで導入している。もう少し国家レベルで野菜の育種に力をいれると、当分はセネガルの野菜種子自給事情はよくなると思える。

(9). 産地性

パイロット・ファームは内陸部にある各部落に1つ、篤農（ミル・落花生栽培に関して）を選んで設置されたもので、産地形成とか、市場性云々というにはほとんど遠く、野菜作りを始めたという状態である。生産物のほとんどは近くの町か、近所の住民に売っている。時たま、沢山とれる様な時は、大きな町やホテルに売りにいくこともある。また、仲買い人もいて販売することも出来るが、それほど出来ないのであまり使われていない。産地形成までいくには問題が多く、長い年月が必要であるし、農民自身の力だけではとても不可能といえそうである。

(10). 土地利用性

平均的に6~10haの土地を持ち、そのうち9割は穀物栽培用で、残りの土地に住宅・家畜小屋（山羊・馬・牛等）、農具小屋、養鶏小屋（成功していな

い)が井戸を囲むようにして配置されている。そして、これらの施設を囲む柵がぐるりと設置され、結構機能的である。野菜用の畑はこの中にあり、それほど広くない(前述)。周囲には防風用の植林(ユーカリが多い)がなされ、所どころにマンゴー、パパイヤ、オレンジ等の果樹も植えられている。改良したいと思う点は、野菜畑が常に同じ位置なので落花生と輪作する様に、別に畑を設ける必要がある点と、もう少し植林の数を増やす事である。

①. 経営手段利用性

野菜栽培に関していえば、原始的自給農法の域を少し出たところといえる。主食のミル、落花生栽培に関しては、家畜(牛・馬)による耕作(播種・中耕除草・収穫等)が行なわれて、かなり集約性を示しているが、野菜に関しては播いて収穫を待つといった感覚がまだまだ強い。使用農機具といえば、鉄にも鋤にもなるイレールとよばれる農具の1つで、その他には灌水用の如露があるのみである。しかし、ぼちぼちとレーキや除草鋤、簡易散布器等を備える農家も出て来たが(パイロット・ファーム以外も含めて)、全体的にはまだまだで、集約性云々というにはまだほど遠い段階である。

②. 収益性

収益性といっても経費は種子代・労働費・農具原価償却費ぐらいで微々たるものといえる。ただし、労働費といっても子供の労働をどのように評価するか、また1日当たりの日当を何をもって基準とするか難しく、収入の方も毎年まちまちでそのデータも無い為、現状では数値を出すのが不可能といえる。また、例えば仮りに10アール当たりの収量を推測してみたところで、規模拡大の難しい(水の為)現状ではあまり意味を持たないと思える。正確なデータを出すには、2~3年の調査が必要と思われる。ちなみにアンケート用紙に書かれていた80年度の売り上げは0~50,000 CFA とまちまちであった。

③. 用途性

野菜は主にセネガルの日常料理に利用されている。特にトマト、タマネギ、ナス、ニンジン、ダイコン、オクラ、ビサップ、カボチャ等がよく食べられている。また、最近ではサラダ菜が普及しだしている。加工品としては、国家事業でトマトのペーストと落花生の味噌が缶詰にされているが、一般的に農民が行なっている加工といえば、ピーマン(鷹の爪)、ビサップ、オクラの自然乾燥がわずかな加工品といえる。そして貯蔵となると唯一タマネギが、長いもので1~2カ月保存されているが、これは乾燥が激しく、そして収穫後にくる雨期がその長期保存を妨げている。セネガルではこの貯蔵の問題で頭を悩まして

いるが、これといった解決案はでていない。一番有力な冷凍庫を使っただけの貯蔵も、経費のかかる割には価格が安い現状では、輸入品に頼った方が安い様である。

新しい野菜を導入する時に考えねばならないのは、その野菜がセネガル料理に使えるかどうかで、使える様なら以外と早く普及する可能性があるといえる。この点を考慮して次期シーズンは、試験栽培をおこなう予定である。

④. 価格性

去年(1981年)の5月より主な野菜について価格調査を行なっているので、5月になれば正確なデータが判明するが、一般的にセネガルでは雨季に野菜は高く、乾季は安いといえる。雨季の高い原因はその高温のために栽培が難しく、そのため外国よりの輸入に頼らざるを得ない故である。乾季はいたる所で野菜が栽培される様になった現在では、非常に物が豊富に出まわるため(特に3~5月)物によっては雨季の時の値の $\frac{1}{2}$ ~ $\frac{1}{3}$ といった価格になる。高地のないセネガル(特にティエス州)では、土地の高低差を利用した栽培は無理で比較的涼しい首都近郊や北部のセネガル河周辺地域で少し手を加えた栽培により、雨季の栽培量を伸ばして行くしか方法はない様に思われる。それに対して内陸部にある担当パイロット・ファームにおいては、高温でも栽培可能な品種か、高温に強い新しい野菜を導入する以外、雨季における野菜栽培の発展を促すことは難しいといえる。例外的に高価格になる野菜ならかなり手を加えて(施設・農薬を使って)栽培する事も考えられるので、その実験的栽培をする価値はあると思われる。

(注、これまでの記述はティエス州内にあるパイロット・ファームに関するもので、他の地域には近代的農法によるものや、産地形成を成している所もある)

7. 日常業務の見直しとまとめ

(1). 任期延長

活動期間が残り半年余りとなったが、現在までの業務状況を考えると、やっと調査段階、試験段階を終え、これから本格的な普及活動段階に入るところである。しかし残念ながら残りの半年は野菜栽培の農閑期に当たり、この活動を遂行する事は難しく、ついでには任期を1年延長してこれに当たりたいと考えています。確かに仮りに1年延長してどれだけの活動が出来るか疑問も残るが、点の協力では効果の少ない野菜栽培の技術指導は、地味な活動を

継続して行なう必要があり、それがいつかは評価が得られると確信して、ここに延長を決めました。

(2). 任期延長にともなう業務計画

これまでの調査・試験結果を基にして、奥地にあるパイロット・ファームや、州内にあるいくつかのプロジェクトに赴いて、下記の野菜栽培に関する技術を集中的に行なう予定である。また、スライド・写真・16ミリ映写機等の視聴覚機器を使って、多数の農民を対象とした普及活動も計画しています。

- (ア). トマトの支柱摘心栽培
- (イ). 適正な技術（正しい畝間・株間・土寄せ・間引き）によるダイコン栽培
- (ウ). ポットを使用した移植栽培
- (エ). 適正な播種の仕方
- (オ). メロン、スイカの支立て栽培
- (カ). 灌水の仕方
- (キ). 堆肥の作り方
- (ク). 元肥、追肥の仕方
- (ケ). 新しい野菜の導入



ポットによる育苗

8. 協力手法十箇条（1年半をふり返って）

- (1). 接榫をする

上は所長から下は掃除夫まで朝夕と挨拶を交す。ここセネガルでは日本以上に挨拶を大切にしている国で、日本人の目から見れば煩わしい程の事を行なっているが、これは仕事をする上で非常に大切な事で、楽しく挨拶が出来ればその日の半分の仕事は終わったようなものである。

(2). 何でも書類にする

何をするにしても忘れられてしまうので、ちょっとした事でも書類にして出す。その時にコピーをとっておき、後で何か問題が起こった時には、それをもとに解決が出来る様にしておく。これを怠ると色々と問題が多い。

(3). 報告書は定期的に提出する

現場でどんなに一生懸命働いたところで、その評価は零である。すなわち報告書にして始めて評価の対象となるため、必ず仕事した内容を報告書にして伝える様にする。フランス人の様に1の事をして10と書くとまではいかなくとも、1をして3~4位は書く必要がある。書類を書くことは最初は大変であるが慣れると、そう苦にもならない。そして報告書は用途別に定期的に出し、時々写真をつけると効果が大いといえる。

(4). スタッフは無視しない

所属先のスタッフや傘下の地方事務所のスタッフは、無気力・無関心・無責任・無能力の人間（日本人からはそう思える）が多いが、だからといって仕事上絶対無視はしない。何か仕事をする場合は必ず関係するスタッフに常に連絡をとって仕事の状況を説明しておく。そうしないと、口から先に生まれてきたような人があるので、後でヤル気もないのに「仕事の説明をしてくれ」といわれるので注意が必要である。日本の明治の様な、国造りに情熱をかけるといった様なイメージを与えてくれる人間は少く、どこの国でも公務員というのは無気力な存在になってしまうらしい。

(5). 約束をあてにしない

セネガル人は約束をしたその時点では、それを履行する気があるらしいが、時を過ぎるとそれを忘れるのが常である。暑い地域に暮らしていると、記憶の細胞が少なくなるのかもしれないが、とにかく約束はアテにせず、大切な事はすべて自分でとりはからう様にして、「まあ出来ればやってもらいたいなあ」という事に関しては約束してもよいが、履行してもらわないと非常に困る様な事は絶対約束しない。これはセネガル人が嫌いにならない為の良策といえる。

(6). 現地語を話す

セネガルは公用語がフランス語であるが、日常はウオロフ語や他の部族語の

方がよく話されているので、やはりフランス語の出来ない農民はもちろん、フランス語で用の足るスタッフとの間でもウオロフ語や他の部族語を話す事が必要といえる。それによって現地の人々と親密感が持て、より良い人間関係が生まれる。よって基本的会話位はマスターする必要があるといえる。

(7). 公私両面で付き合いおう

スタッフとは仕事の上ではもちろん付き合い合うが、私生活においてもなるべく交流するように心がける。セネガル人は酒を飲まない人が多く「まあいっばい」とはいかないし、スポーツもサッカー位しかやらないので、機会が少ないが祝祭日とか誕生日等と一緒に家族と食事をしたり、自宅に呼んだりして交流の機会を作る様心がける。また、子供がいれば、クリスマスやタバスキにお菓子をあげたりする事も、さわやかな人間関係を作り仕事上にもプラスになると言える。

(8). 明日はないと思え

地方に仕事で出張した時などに、仕事上必要なもので少し待てば手に入る様な状態の時には、必ず待ってその物を手に入れるよう心がける。明日とか次回などと考えると2度と手に入らない事が多いため。

(9). 技術はポイントを定める

とかくあれもこれも教えたいと思うが、日本人に教えるのと違い、なかなか思う様にはいかない。そこでぐっと目をつぶって2~3のポイントを決めて、それに全力をかけるようにする。例えば野菜の場合でいえば、トマトの支柱栽培を普及させるのを目的にするといった風にやる。仕事の量が少ない様に思えるが、技術は奥の深いものなので、やっているうちに手いっぱいになるものである。

(10). 生きている事のすばらしさを認識する

遠く日本より離れたアフリカの地で、健康で経済的心配も無く、自ら選んだ仕事を行なえる幸せを謙虚な気持で認識する事は、もっとも大切な事といえる。この気持を忘れなければ、自然と仕事も良い方向にいくものである。この気持が持てなければ2年の月日はエネルギーの浪費としかいえまい。

9. 所属先に対するさまざまな業務

所属先に対する提出書類は、当配属先においては非常に重要な事で、業務をスムーズに遂行する為に、また関係スタッフとの協力関係を作る上でも必要不可欠といえる。口述による報告は簡単でよいが、ちょっと複雑な内容になると

スタッフの方も理解出来ない事も多く、また見解の相違が生じやすいので、この為世類にする事によってこれらの弊害をなくす事ができる。また、所属先の所長も本省に対して、協力隊員の活動状況を随時報告する義務があるので、この意味でも書類を提出する事は大切な業務の一つといえる。

さて書類を作成する事は日本語で書く場合でも難しく、それをフランス語を使って書くと非常に難しいと思われるが、最初は大変だが、慣れてくるとそう苦にもならなくなる。作成する要点としては、内容は簡潔にして、提出期日を決めて出す。部数は提出用に3部、自分用に1部とし、何か問題の起こった時にはそれを参考にする。また、直接関係する地域だけでなく他の地域にも有効と思われる様な内容の物は、抜粋して適宜配布する様にする。そして郡事務所に配布する時は、必ず所長と農業担当官の両者に渡す様にする。どういう訳か所長だけに渡すと、農業担当官まで行かないことを考慮してである。

提出書類の種類としては次のようなものがある。

- (ア). 週報——1週間の活動内容をまとめたもので、月報を書く時役にたつ
- (イ). 月報——1カ月間の活動内容をまとめたもので、次の月の活動を考えるのに参考となる。また年報の資料として役立つ
- (ウ). 年報——1カ年の活動内容・研究結果・助言及び次年度の計画等を盛り込んだもので、一番重要なものである
- (エ). 月間予定表——毎月の活動予定を記述したもので、予め活動予定を報告する事によってスケジュールを調整する
- (オ). その他——郡事務所用予定表(3カ月毎)、休暇申請、病気療養申請、出張申請等がある

前田隊員の報告書を読んで

齊藤 朝雄

セネガルは、アフリカ北西部の北大西洋に面した熱帯サバンナの地にある。年間降雨量は578mmであるが、雨期の7～9月に集中する。野菜の栽培は、他作物との競合と高温（月平均気温が27℃を越す）とから、11～5月の間に行なわれる。その7カ月間の雨量は僅かに14mmである。

灌漑施設は皆無に近く、サハラ大陸貿易風により常時強風が吹き、野菜の苗は砂に埋まる。病虫害、鳥獣害の多発、加えて農家の野菜栽培についての技術、意識は、「原始的自給農法の域を少し出たところ」と低い。

野菜栽培にとってあらゆる条件が、日本の感覚からすれば最悪といえる。その中であって、セネガルの農業発展のため、ひとつひとつの障害を乗り越え、青年海外協力隊の使命に燃え、努力と忍耐とそして創造力を発揮し、ひたすら精進している前田隊員にまず敬意を表したい。

前田隊員の報告から窺うに、これら障害を克服しようにもあらゆる条件が厳しい、加えて、現地人の意欲不足、営農意識の低さ、言語の違いなど二重三重の障害が立ちはだかっている。そのような状況の中で、前田隊員は、数々の問題に挫折することなく、前向きな姿勢で取り組んでいる。

派遣されて1年半の間に、現地の状況を適確に把握し、慣れない現地語も積極的に習得し、現地人との親睦を深めながら指導を行なっている。また、野菜については、生産から流通、消費に至るまでいろいろな面からの分析を試み、今後の対応を考えている。

野菜の生産については、現地人の栽培は「種を播いて収穫を待つ」というような、穀物と同じ意識で行なわれているので、まず意識の改革を図ることに着目し、「野菜作りの基礎」からの指導を行なうこととしている。播種後の適正な灌水（種子の覆土を流さない）、ダイコン、ニンジン等の間引きなど我々にとってはごく当たり前の基本的技術を、ひとつひとつ現地の人に教え込むことを通して、彼らの野菜作りに対する正しい理解を得ている。

前田隊員の努力が実を結ぶには、まだまだ多くの年月を要することであろうが、このような努力の積み重ねが、やがてセネガルの農業が開花していく上で確かな基盤となるであろう。

また、野菜の流通については、まだ組織だった生産ができない現状においては、取り立ててなすすべもないわけであるが、野菜生産を發展させていくためには、流通面にも普段から目を向けておくことが大事である。流通経路の確立、貯蔵技術の開発、価格変動に対する対応など、将来、産地が形成される際には必ず考えていかなければならないことである。現状では、「産地形成までいくには農民自身の力だけではとても不可能」ということではあるが、セネガルの野菜生産の将来の發展を目指して、流通面における前田隊員の調査・指導が期待される場所である。

更に野菜の消費については、前田隊員の調査では、果菜類、根菜類を中心に主にセネガルの日常料理に利用されているという。しかし、種類、量、品質等満足すべきものに程遠いのであろう。彼は、「新しい野菜を導入する際には、その野菜がセネガルの料理に使えるかどうか考慮する必要がある」として、次期シーズンの試験を計画しており、勿論正しいとは思いますが、更に進めて、健康面、良い栽培環境、現金収入の途等から、消費の開發をも含めて考える必要があるのではあるまいか。

前田隊員の業務については、2年間という短い期間において多くのメニューをこなさなければならぬ状況となったことは、ある程度の成果が上がったためだと思う。その結果、更に任期を1年間延長することとしたことは、年月を要する農業指導には必然的なことであらうが、通算して3年間の現地活動を行なうことは、多大な労苦を要することであり、十分評価されてしかるべきであらう。

1年半を経過して、これからも技術的な面では指導すべきことはいくらかもあるであらうが、現地に根付くような指導を心がけ、現地の人達が自主的な生産活動を行なうことができるようになることを期待する。今後の前田隊員の業務計画においては、野菜作りの基本技術となる果菜類の支柱摘心栽培、ポットによる移植栽培、間引き・土寄せ等の管理、適正な播種、灌水、施肥など、いづれも必要不可欠な技術の指導を実施することとしているが、これら技術を現地の人にいかにか理解させ、浸透させるかが問題となるであらう。

終わりに、野菜農業はセネガルにおいてはまだ未開拓の分野であり、セネガルの農業を振興させる上で大きな力となるものであることや、野菜の普及がセネガル国民の食生活を飛躍的に向上させることとなることを考慮すると、野菜生産の重要性が強く認識される場所であり、隊員の積極的な活動をますます期待するものである。

(協力隊技術専門委員)

フループ州病院での医療活動

第2号, 第5号報告書

職 種 臨床検査技師

氏 名 中川 里子

配属先 保健省

フループ州病院

中川隊員の略歴

生年月日 昭和30年6月4日

出身地 新潟県

学 歴 金沢大医療技術短大部卒

派遣期間 56年10月～58年10月

1. 業務活動について

朝8時30分出勤、混雑する病院の入口を自転車を押してやっと入り込むと、病院スタッフの迎発する朝のあいさつに見舞われる。事務長、食堂長、掃除係のおじさん、誰それの弟と、フランス語、ウオロフ語、ツクルール語と忙しい。中庭を通りぬけ……と思うと、今度は遠くから誰やらがあいさつしてくる。「やあやあ、元気？」とこちらも手を振って、やっと検査室にたどりつく。あいさつが重要な習慣のこの国、けっしておろそかに出来ないと思うが、毎日のこと……「こんにちは」だけならまだしも、「よく眠れたか?」、「家族は元気か?」、「寂しくないかい?」、そして、その上に「何かちょうだい」、「お菓子ちょうだい」、「今日の洋服すてきネ、ちょうだい」、うーん、めんどくさいな。しかし、やっぱり、いちいち答えている。検査室にはいると、何かホッとする。検査技師仲間、今や家族みたいなものである。皆気心が知れて、お互いの家庭事情など全てわかり合っている。

さあ、今日の検査が始まる。細菌検査がスムーズにいつている時は、やはり楽しい。数少ない培地を駆使しながらも、けっして一定でない操作に頭を使う事が心地好い。以下に、赴任時からの細菌検査実施の内容を報告しよう。多くの困難の中、実施した検査である。けっして数多くはないが、その辺を考慮して理解していただきたい。

1981年11月25日～12月31日間の細菌検査実施内容。

① 検体名及び件数

| | |
|------------------|------|
| 尿 (中間尿、及びカテーテル尿) | 19 件 |
| 喀 痰 | 9 |
| 膿 | 2 |
| 穿 刺 液 | 1 |
| 便 | 14 |
| 計 | 45 |

② 菌名

E. coli

Proteus vulgaris

Enterobacter
 Proteus morganii
 Klebsielle pneumoniae
 Proteus mirabilis
 Citrobacter
 Proteus rettgeri
 Klebsielle oxytoca
 Candida
 Staphylococcus aureus
 同定不可グラム陰性桿菌（鏡頭及び感受性のみ報告）
 嫌気性菌

1982年1月1日～5月31日

① 検体名及び件数

| | |
|------|-----|
| 尿 | 26件 |
| 喀痰 | 4 |
| 膿 | 4 |
| 穿刺液 | 2 |
| 便 | 19 |
| 陰分泌物 | 2 |
| 計 | 57件 |

② 検出菌名

Klebsielle pneumoniae, klebsielle oxytoca
 E. coli (Lac⁺, Lac⁻)
 Proteus mirabilis
 Staphylococcus epidermidis, Staph. aureus
 Enterobacter coloaecae
 Morganii
 Gonocoques
 Candida
 micrococcus
 Shigella flexneri Shigella boydii

Salmonella typhi

Salmonella sp (抗血清不足のため、同定不可)

グラム陰性桿菌, グラム陽性桿菌

以上のようなものであるが、培地不足にて、本来なら検出されていい菌が抑えられている感がある。例えば、嫌気性菌はもとより、コレラ・ビブリオ属菌、喀痰よりの溶連菌、ヘモフィルス属菌など薬剤感受性試験をするのが、精一杯である。それとても一濃度法で、有効期限の問題、力価低下の問題等考えると、必ずしも正確でない様に思われる。ある日など、州立の検査センターに薬剤感受性試験を依頼したところ、当検査室のデータと異なった値になり、力価低下も疑ってみた。原因は必ずしも一つに限らないが……。また、下痢便患者が多い故、Salmonella, Shigella などの菌が、その他、病原大腸菌、小児のキャンピロバクターなども、もっともっと検出されるべきである。

培地及び器材が完備されてスムーズに運営されれば、データが揃う。器材不足がなんととっても大きい。現状では、検査すべき件数の10%~20%位しか、いやもっと低いかもしれないが、実際検査出来ない状態である。ちなみに、現在ある細菌検査についての器材、及び試薬を紹介しよう。

<器材>

①白金耳, 白金線, 各1本

これは細菌の釣菌 fishing や植え継ぎ transplantation に使われるもので、食事でたとえるなら箸の様なもの。これなくしては食べられないといった感じで、本来ならば、白金やニクロム線を用いるが、当検査室では鉄線を利用している。故に2~3回ですぐだめになって取り換えねばならない。

②ピンセット, 2本。うち1本は自前

③小試験管, 大試験管, 各20本

尿採取や咽頭分泌物, 膈分泌物採取のための滅菌試験管。

④ガラス管, 18本前後。滅菌ビベット作製のため

⑤ガラス棒, 便塗抹用

⑥試験管台, 4個。うち2個は木製で古い

⑦シャーレ, 日本より

⑧スライドガラス, 日本より

⑨染色用器, 5本

⑩乾熱滅菌器, 1台

小型で200ml メスシリンダーがやっと入る程度。主にメランジュールを乾か

している。

⑩解卵器, 1台。

・現在細菌検査が多くないので, ガラス器具保管棚として使用…(?)。

＜試薬類, 培地類など＞

①SS培地450g (日本製)

②EMB培地, 少々

③同定用培地……アピ20E (3パック), クリグラール, シモンズのクエン酸, マ
ンニット, ウレアーゼ, インドール (パスツール製)

④同定補助試薬……コバック, KOH, ONPG, OX, アルファーナフトル

⑤抗血清・サルモネラ用……抗V₁血清, 抗パラチフスC, 抗チフス

・シゲラ用……A₁, A₂, C₁, C₂, C₃

・黄色ブドウ球菌用……コアグラージェテスト用ウサギ血しょう

(以上全て, パスツール製)

以上試薬類は, パスツール研究所を訪れた際調達してきたもので, 病院側と
しては検査室への試薬, 器材は一切買おうとしない。これには, 諸々の原因が
考えられる。

⑥病院長が外科医であり, 検査への興味が薄い。日本においてもこれは言え
ることだが, 外科医というのは (と断定してはいけないのだろうが) その目で
見, 手でさわ, 開いてみればわかるということからか, 内科的なことを後ま
わしにする傾向が強い。もし必要でも, 病理学的な事, 例えば, 腫瘍部分が悪
性か良性かとか……そういったことを重要視するあまり, どうしても生化学的
なことや生理的なことを後まわしにする。多くの検査室で内科のドクターが指
導して下さるのも, そういった事情からである。

⑦技師長が女性であり, またドクターでもなく看護婦あがりの, 日本でいう
ならば見習い技師といった立場であること。彼女は9年間当検査室で働き, 責
任感や技師としての心得など熟知しているものの, 女性という立場から上層部
への発言が通りにくい。抗血清 (血液型検査用) を切らして依頼したものの,
院長は自分にとって重要な検査であるにもかかわらず無視。その数日間, 血液
銀行へ行くやら, 色々と苦勞していた。

⑧実際, 金銭的に苦しい。汚職という問題も少なからず関係している様に思
われるが, 詳しいことはわからない。

⑨検査についての認識が薄い。これは日本でもある傾向であるが, スタッフ

間でもどうかすると検査を重要視せず、病気の即薬というルートに結びつけたがる。当病院では、院長は話のわからない人ではないが、経理を全て事務長に任せていることから、事務長の考え一つで何事も進んでしまうところがある。勢い事務長は他の課に力を入れてしまい、検査室に理解を示さない。全くの素人である。ある日など、日本の協力隊から、何がしかの器材援助があると言うと、顕微鏡が10台届くかと真面目な顔で尋ねた。いつもの冗談にしてはあまり真剣なのであきれてしまった。

原因はこれだけにとどまらないのであろうが、以上が目立つ点である、今後細菌検査を押し進めていく上で、器材不足、試薬不足は大きく足をひっぱるが、その辺については後述したい。

さて、次に他の検査について少し余談を。細菌検査が何と言っても本業であるが、培地不足（検査センターの培地が切れると、こちらにまわって来なくなる）等で仕事が出来ない時、他の検査にチョッカイを出す。一応細菌検査だけでなく全域に渡って指導・監督する立場であるので、チョコチョコとあちらこちらをのぞいてまわる。そして、楽しみは検便検査である。やはり職業柄なんだろう。素人の人は最も嫌がる便だが、その中に何が潜んでいるかと思うと、スライドガラスになすりつけて顕微鏡をのぞくまで、期待と楽しみを感じてしまう。何もない便は、患者にとっては非常に良いことなのだが、当方にとっては何かつまらない。新しい寄生虫が出現すると、まず皆を集めて慣れないフランス語で興奮まじりに説明し、一人一人に顕微鏡をのぞかせ、次にすることは標本作り。やはり楽しい。患者にとっては重要なことなんだが……。標本もホルマリン固定で、まだまだ数は少ないがたくさん作ろうと考えている。先のレポートとだぶるかもしれないが、以来新しいものも出現しているので、以下に現在まで検出された寄生虫を紹介しよう。

○蛔虫卵（受精卵、受精卵）

○鞭虫卵

○鉤虫卵

（※汚紙培養を試みたが、フィラリア型での鑑別難しく、しかし分布からたぶんズビニ鉤虫であろう）

○無鈎条虫卵

○裂頭条虫卵

○ビルハルツ住血吸虫卵

○ランブル鞭毛虫シスト

-
- 赤痢アメーバシスト
 - 熱帯熱マラリア原虫
 - ラブジチス型糞線虫
 - 回帰熱ボレリア原虫
 - 腸トリコモナス原虫
 - 膈トリコモナス原虫

以上のようなものであるが、最近特に目新しかったのは、糞線虫のラブジチス型幼虫 (Rhabditis de Strongyloides) である。例によって期待と共にレンズをのぞけばいるわいるわ。ウナギの様なヘビの様なとても旨おうか、幼虫がウヨウヨ皆元気に活発に動いている。オヘ……気持ち悪さもあるが、やはりおもしろい。それから回虫卵と鞭虫卵、それにランブル鞭毛虫シスト、おまけに広節裂頭条虫卵の合併。合併はけっしてめずらしくはないが、それにしても……。これだけ豪華に出現してくれると、嬉しさを通り越して恐しくなってしまう。共に標本に収めて、学生のための教材として役立っている。

2. 言葉について

セネガルの公用語は仏語で、田舎へ行けば全然話せない人も結構いるが、街に住んでいる限り子供達でも通じる。ただし、そういう子は教育を受けている。管理職的地位の人間は、皆仏語で話す。病院では、依頼伝票全て仏語使用である。が、やはりセネガル人にしたら、母国語がいいらしい。検査室内では、ほとんど現地語のウオロフ語で皆話す。スタッフは、ウオロフ族2人、ツクルール族1人、バンバラ族1人でバラエティーに富んでいるのだが、やはり多数を占めるウオロフ語が幅をきかせている。ウオロフ語でべらべら話されると、さすがにわからない。未だかつてわからない。簡単なものしかわからない。そのかわり、バンバラ語やツクルール語を少しずつ話す。結局のところ、言葉なんて意志伝達の一方法だと感じてしまう。不思議なもので、人間仲良くなると少しぐらい発音がおかしくたって通じて、どんどん会話ができるものだ。わずかの仏語、ウオロフ語を駆使していろんな話をする。産科で起きた赤ん坊殺人事件の事、日常生活の事、セネガルの事、昨日の事、親兄弟の事、日本の事、etc. は、無論の事、こちらが外国人で気安いせいか、個人的な問題まで打ち明けられて、反対にこちらがなぐさめてやったりする。たとえば、別地域から来ている同僚が、家族が恋しくて寂しいとか、誰それが自分の事を嫌っていて、そのために仕事が手につかないとか、人生とは何か自分にはまだつか

めないとかいった問題、皆、それぞれに問題を抱えている。こちらだって、カウンセラーしてやれるほど人間出来ているわけではないし、本人自身問題はいっぱい持っている。しかし、だからこそだろうか、ふんふん、なるほど、いや私もね……と、その辺から話が始まって、たしかに第三者が聞けばヘタな発音、会話とおかしくなるだろうが、当事者は真剣だから、そういうことは問題にならない。要は内容ということになる。

しかし、かといって通じればいいというものでもないし、それで安心していては進歩がないので、セネガル人スタッフの冷たい視線をあびつつも、フランス人シスターの学校へ通って、仏語を教えていただいている。こちらでは、やはりフランス人とセネガル人とは仲が悪い。セネガル人は、フランス人のましてカトリックの学校へなんか行ってほしくないのだ。4回教えていただいて、1000円払っていると話すと、それは高い、私達と話してれば覚えるよと言う。しかし、やはりフランス人とセネガル人とは、発音からして違うのだ。

仕事上での言葉の不自由さを、今はそれほど感じないが、初めの頃は確かに困った。検査方法が全く違う上に、日本ではやっていない事がかなりあったから。こちらに来て辞書と勘で覚えるしかなかった。しかし、興味さえあれば、けっして難しくない。ただ残念だったのは、ダカール大学を中心に開かれた医学学会で、言葉がわからないのでほとんど理解できなかったことである。テープに収めてきたが、やはり聞き取りにくい。

仕事上での困難を列記しよう。今は、ほとんど問題ないが……。

(1)検査依頼書がめちゃくちゃ。ミミズのはった様な字で書かれてくる事。ドクターという職業病だろうか？ こちらは読むのがやっとなのに、めちゃくちゃ達筆(?)で書いてよこすから、初めの頃は、ほんとに困った。いい加減なことも出来ないの、その都度フェツウや他のスタッフに聞いていたが、彼等でさえ首をひねることがよくあった。特に細菌検査の場合、患者の状態とか投薬状況を確認しなければならないので、これは非常に困った。

(2)学生がやって来て彼等に説明する時、一連の操作は理解してくれるが、操作の微妙な点、何故そうするかといったこと、基礎になることを教えこむ時に、一番手こずった。本当に理解しただろうか、こちらの言葉が足りなくて理解してないのでは……と、個人的な問題よりも言葉による障害の方を先に考えてしまう。日本でも研修生が来た時、教えても理解出来る人、出来ないで忘れてしまう人、色々いたものだ。日本語でさえも……。まして仏語は、どうしても言葉少なになってしまう。それに相手は、わずかの知識しか持ち合わせてい

ない。この辺で妥協すべきか……。しかし、やはりプロ根性が少しでもあるの
だろうか、お節介なんだろうか、日本の技術はここが違うんだと強調し、とこ
とん教え込んでやりたくなるのだ。たとえば、血液標本一つ作製するにしま
も、現状のやり方ではただ一連の操作をマネしているにすぎない。その拗句出
来た標本はひどいものだ。これでは良い検査が出来るはずがない。固定にし
ろ、染色時間にしろ……。染まったものは、固定メチャクチャ、時間は適当。
本当の奇形赤血球なのか、固定によるものか、鑑別ができなくなる。ジョリー
小体なのか染色顆粒なのか。多染性があるのかないのか。中毒顆粒なのか染ま
り具合なのか。全くひどいやり方。そこを一つ一つ指導してゆき、美しい染ま
り具合を見せ、ホラネ、これがまず第一にすべき事と、手とり足とり……。し
かし、正直言ってもどかしい。もっともっと説明してやりたい。ジレンマがあ
る。自分をセーブし、セーブし、少しずつ、少しずつ。日本の話など時々し
つつ。学生さんとは1カ月間ずつのお付き合い。少しでも何かをつかんでくれ
ればいいと自分に言いかけせ、ジレンマと戦う。もっと話せたらと、いつもそ
んな時、感じてしまう。

(3)試薬の名称の問題。例えば、何か新しい事を始めようとする時、試薬が必要
となる。それを薬局で探し出してくる時、その仏名がわからない。辞書を引
いても出てない、うーん困った。簡単なものなら化学記号を示せば、あちらも
薬局の名著にかけて探し出してくれる。NaCl, C₆H₅OH, HCl, H₂SO₄, etc.
しかし、窒化ナトリウム、チオ硫酸ナトリウム、パラジメチルアミノ、ペンツ
アルデヒド、tween 80などは、英語名でも通じないし、薬局でも聞いたことが
ないなどで断念せざるを得なかったり、医学用語辞典になかったりで困ること
が多い。専門用語をしっかりと調べておけばよかったと後悔。しかし、名前がわ
かってもはたして……(?)。

以上、仕事上の問題点をあげたが、それ以外にも問題がないわけではない。
しかし、それほど不自由さも感じない。日本語を教えてくれとよく言われる。
アイウエオや名前を書いてやると喜んでいるが、やはりむずかしいらしい。片
言のかんたんな言葉は覚えるが、深入りしてこない。それよりも、セネガル人
はウオロフ語を私に覚えてもらいたいらしい。ウオロフ語を話すものすごく
喜ぶ。そして、次から次へと、これは何々と言う、これはこうと教えてくれ
る。雨が降れば降ったで、雷が鳴ったらそれと、生活にかかわること全てウオ
ロフ語にして教えてくれる。一つ、また一つと私が新しい言葉を話すと、手を
たたいて喜ぶ。日本人とかわりない。

フルーブ州病院での医療活動

仕事をしていく上で、仏語は不可欠と思われる。しかし、セネガルを知っていく上では、ウオロフ語、部族語もやはり必要である。仏語よりずっと重要な気がする。フランス人のように上層社会できれいごとにごすには必要でないかもしれないが、それではセネガルへ来た意味がない。やはり母国語はその民族を理解する上で重要であり、必要である。少しずつ覚えていこうと思う。

3. セネガルにおける疾病の統計資料

少し年代はさかのぼるが、セネガルにおける疾病の統計資料が手に入ったので、ここに紹介します。

①人口統計

<1976年度の州別人口数分布>

| | | |
|--------------------------------|---------------|---------------|
| セネガル 全土 | | 5,085,388 (人) |
| シンサルム州 | (Sine-Saloum) | 1,007,736 " |
| カプベール州 | (Cap-Vert) | 984,660 " |
| カザマンス州 | (Casamance) | 736,527 " |
| ティエス州 | (Thiès) | 698,994 " |
| フルーブ州 | (Fleuve) | 528,473 " |
| ジュールベル州 | (Diourbel) | 425,113 " |
| ルガ州 | (Louga) | 417,737 " |
| セネガルオリエンタル州 (Sénégal oriental) | | 286,148 " |

都市別にみると、

首都ダカール……80万人以上

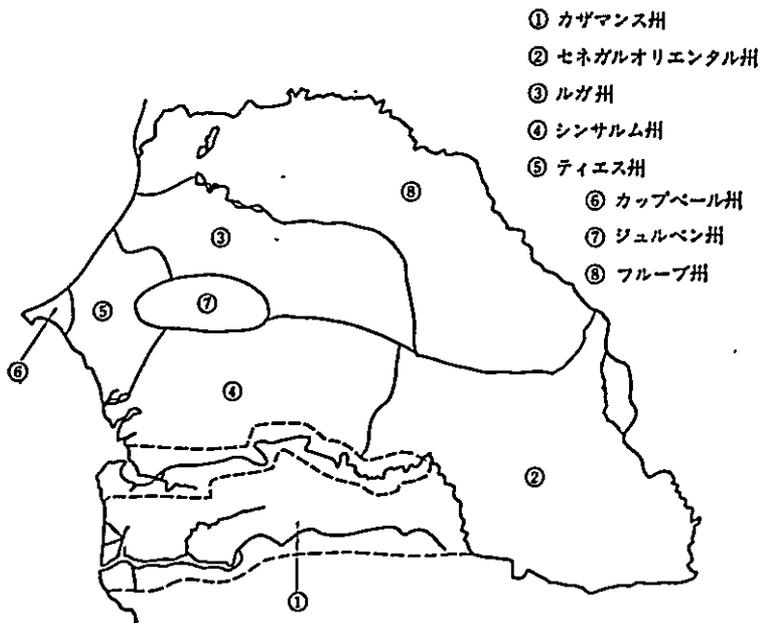
ティエス市、サンルイ市、カオラック市……8万～12万人

ジガンショール市、タンバクンダ、ルガー、ジュールベル、ウンブール、^シパッケ……2万5千～8万人

ビニョナ、コルダ、カフリン、マタム、バケル、ケベメール、ツバオンス、ジョアル、ファテック……5千～2万5千人

などである。首都近郊に人口が密集している。

② 医療施設分布 1976年度



<セネガル全土>

総病院数 (国立病院) 11
 医療センター 34 (個人病院も含む)
 地域医療センター (保健所) 7
 診療所 347

<州別>

| 州名 | 国立病院数 | 医療センター数 | 保健所数 | 診療所数 |
|------------|-------|---------|------|------|
| カザマンス | 1 | 6 | 2 | 67 |
| セネガルオリエンタル | 0 | 3 | 1 | 31 |
| ルガ | 0 | 3 | 0 | 23 |
| シンサルム | 1 | 9 | 0 | 68 |
| ティエス | 1 | 6 | 1 | 35 |
| カップベール | 4 | 1 | 1 | 42 |
| ジュルベール | 1 | 3 | 1 | 22 |
| フループ | 3 | 5 | 1 | 59 |

フループ州病院での医療活動

③医者、看護婦(夫)及び病床の濃度分布

<セネガル全土>

- a. 医者1人につきの患者人口数 16,351人
- b. 看護婦(夫)1人当たりの人口数 2,157人
- c. 産科を含む病院1ベッドに対する人口数 844人

<州別>

| 州名 | a. (人) | b. (人) | c. (人) |
|------------|---------|--------|--------|
| カザマンス | 49,101 | 2,375 | 1,518 |
| セネガルオリエンタル | 57,229 | 2,466 | 2,532 |
| ルガ | 139,245 | 5,287 | 2,784 |
| シンサルム | 83,976 | 3,586 | 1,522 |
| ティニス | 41,117 | 2,678 | 1,493 |
| カップベール | 4,102 | 1,118 | 322 |
| ジュルベル | 60,730 | 3,014 | 1,312 |
| フループ | 44,039 | 1,816 | 685 |

以上から病院、医者、看護婦(夫)とも首都に集中していることがよくわかる。

④産科からみた分布 1975年度

<セネガル全土>

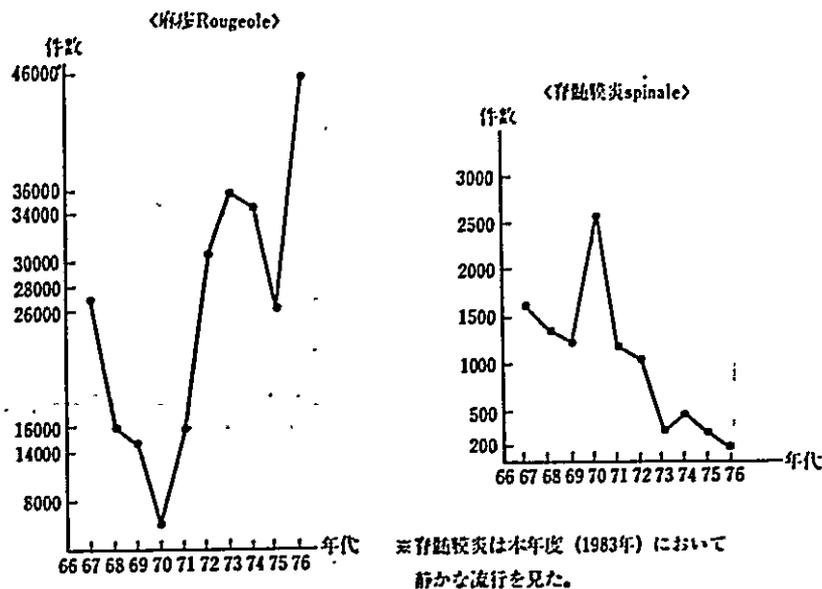
- a. 15歳~49歳までの女性の患者数、助産婦1人につき 3,243人
- b. " 年輩介助者1人につき 12,473人
- c. " 分娩数(助産婦及びに年輩介助者1人当たりにつき) 2,573人

<州別>

| 州名 | a. (人) | b. (人) | c. (人) |
|------------|--------|---------|--------|
| カザマンス | 11,555 | 8,404 | 4,865 |
| セネガルオリエンタル | 12,703 | 10,880 | 5,863 |
| ルガ | 10,457 | 8,963 | 4,826 |
| シンサルム | 8,025 | 8,917 | 4,223 |
| ティニス | 4,713 | 22,894 | 3,908 |
| カップベール | 890 | 100,570 | 882 |
| ジュルベル | 5,388 | 21,552 | 4,310 |
| フループ | | | |

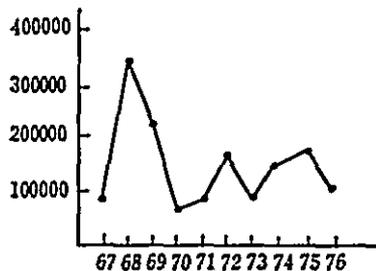
ちなみにサンルイ病院では、産科に7人の助産婦がいて、毎日交代している。1人の助産婦は日中と夜中の24時間働いて、あとの6日間はお休みである。働くといっても分娩数も少なく、日に4～5件あれば多い方であり、彼女等はずっと座って編物などをしている。分娩時が来ても、見習看護婦にお産をさせ、自分では直接手を下さない。子宮外妊娠だとか逆子、あるいは双子などの難しいお産になると出かけてゆく。全く働かない。自分の職場意識がないので、産科はいつもきたない。しかし、村の診療所よりはましなので、患者はやって来る。

⑤症例別に見た1966年～1976年間の申告数の推移

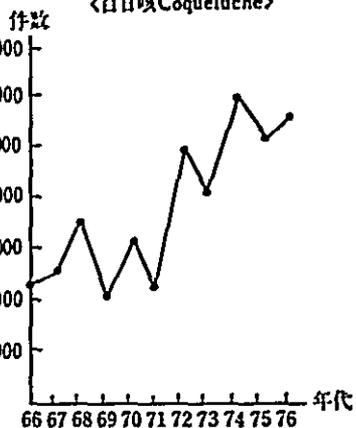


フループ州病院での医療活動

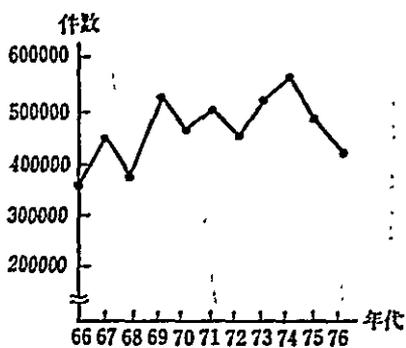
〈麻疹に対する予防接種数の移り変わり〉

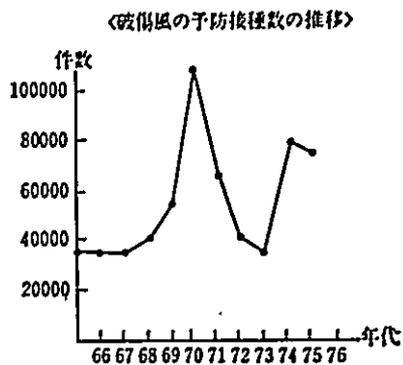
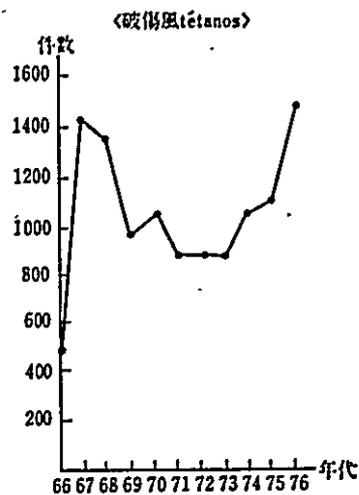


〈百日咳Coqueluche〉

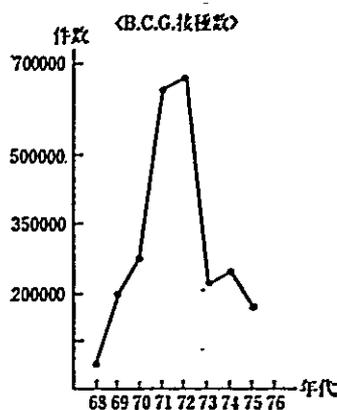
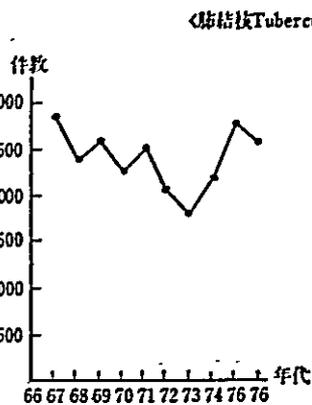


〈マラリアPaludisme〉





破傷風に対する人々の意識、医学的認識は比較的高く、どこからともなく抗血清アンプルを手に入れてきて、注射している。が、些細な切り傷でも注射したがる。それだけ悲惨な状態をよく知っているせいだとも言えるが、破傷風菌が嫌気性菌であり、酸素に触れるとすぐ死ぬことを教え、まず傷口の開放、消毒を教えている。

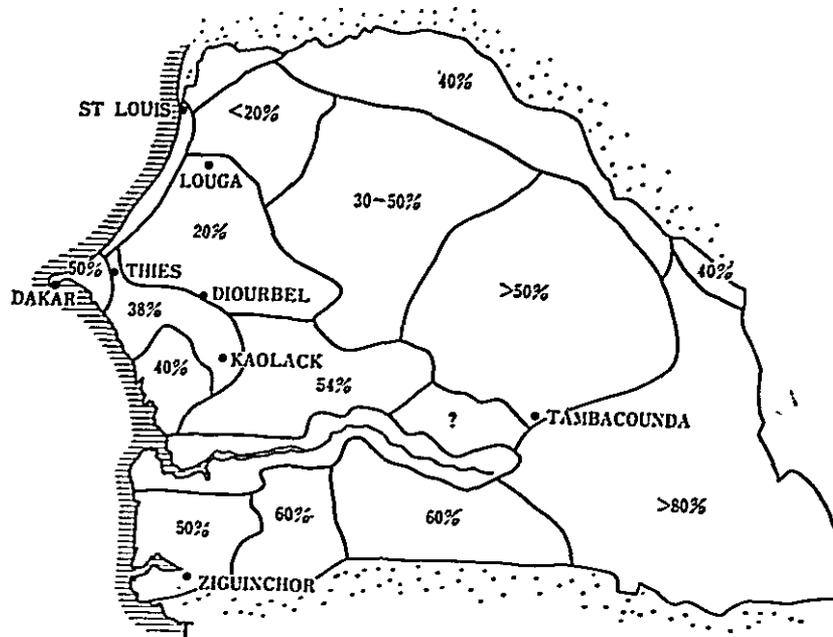


肺結核患者は非常に多く、非隔離患者による感染も多い。症状がひどくなると、ほとんど末期状態で、やせ細り、ガフキーも7

フループ州病院での医療活動

号～10号といった重症例が多い。近年では、B.C.G. の接種により、若年層には患者は多くないが、体力、栄養不良などから、中老年層にはかなり多い。また患者で目立つのは、セネガル人もさながら、モーリタニアからの移入者であり、彼等はやせこけて汚れた布をまとい、陽あたりの悪いプティックで商いをしつつ、地べたに寝ころんで一日を過ごす。こういうモーリタニア人に結核が多い。余談になるが、サンルイ病院の結核病棟は20人あまりの結核患者がいて、看護婦（夫）は常勤者2名のみである。感染を恐れて看護夫が行きたがらないのだ。そして、病院の一番端にあり、壁もぼろぼろに崩れ落ちて、陽当りも悪く暗くて汚れて蠅がうようよたかっている。日に1度の検査でも殆どが陽性、

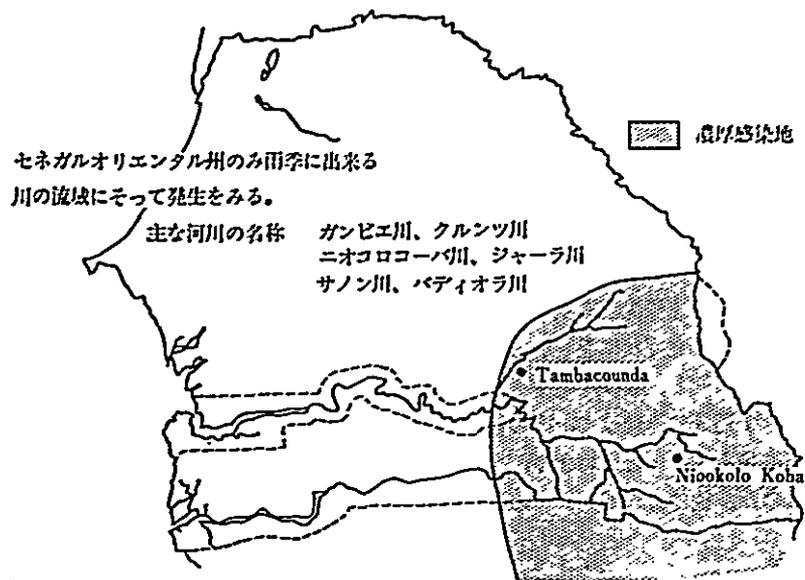
⑥セネガル全域におけるマラリアの分布 1968年度
0～14歳の子どもに対するパーセント（熱帯熱マラリア及び三日熱マラリア）



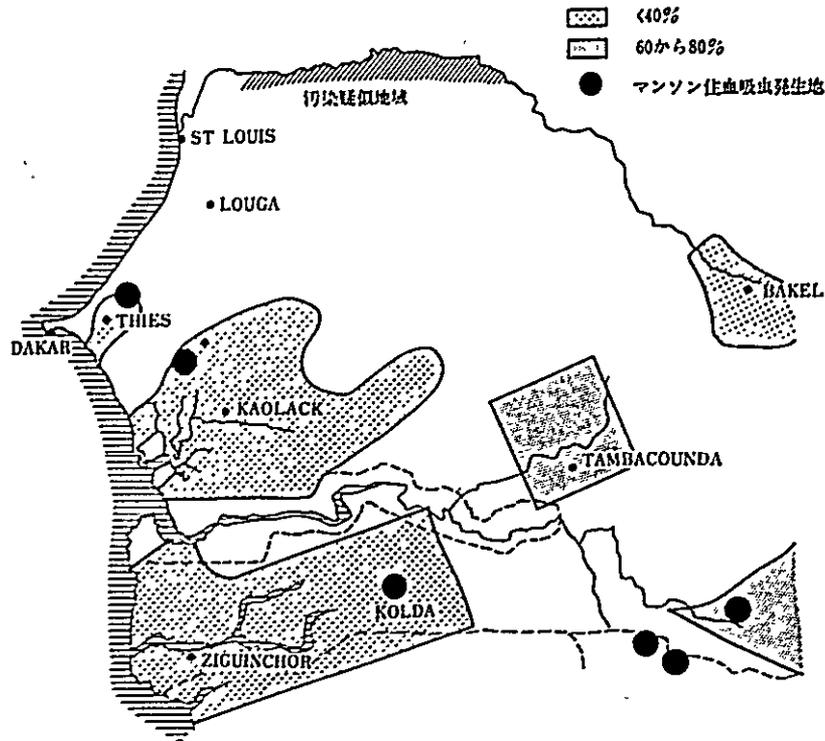
投薬後のコントロール検査でも、4回目にしても陽性のことは稀ではない。患者は殆ど助からず、死を待っているばかりである。

マラリアの分布を見ると、北部より南部、海岸部より内陸部の方が感染率が高くなる。それは、気温と湿度の差を物語っている。学生で東部のタンバクンダから来た男の子は、あの辺は雨がどんどん降って、そのたびに蚊が多量発生し熱帯マラリアが多かった、と話してくれる。彼は、毎週ネバキンを飲んでいたのである。雨季になるとそのあたりは川が出来、子供達が水遊びをする。そのため、彼は小さい時ビルハルツ住血吸虫症にかかり、尿が血尿になり苦しんだそうだ。彼を助けたのは白人（フランス人）の医者で、そのこともあって、彼は看護夫を志したそうだ。とにかく、セネガルオリエンタル州には、マラリアも含めて多くの熱帯病が存在する。そして、そういう所に限って病院がなく、村の診療所が活躍するのである。このあたりから来る学生は、将来地元のために働くという意欲があるせいだろうか、教えていても他の学生と違って、学ぼうという姿勢が強い。

⑦オンコセルカ症分布 1976年度



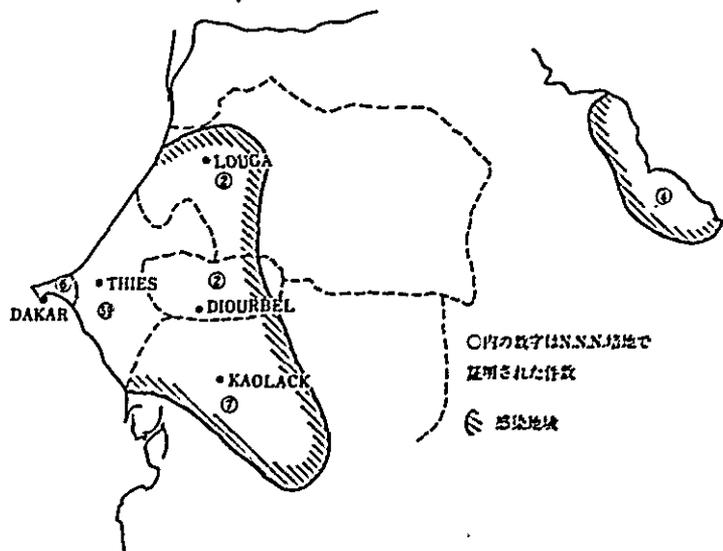
③ビルハルツ住血吸虫症 1969年度



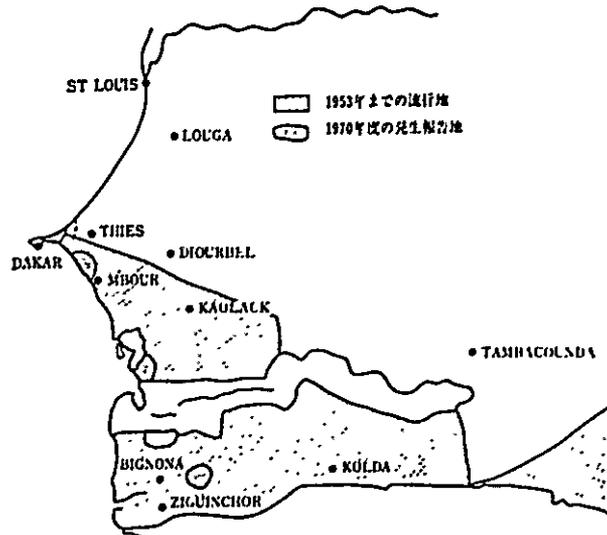
やはりこれも学生で、南のカザマンスから来た男の子が、寄生虫の検査をして欲しいと言って便を持って来たので見ていたら、便内にビルハルツ吸虫卵があつて、早速尿沈渣も検査したら、やはり見つかった。本人に聞いたら、血尿はないし自覚症状に乏しいという。が、放って置くと大変なことになると言って説明し、彼は、ドクターにアンビルハール (ambilhar) を処方してもらい、1週間飲み続けて、その後コントロール検査に来た。ここで虫はすっかり死に絶えて……と思いきや、あれ、まだいるではないか。薬が効いていなかったのだ。彼はまたドクターの所に行つて、アンチモン剤をねだっていた。

ビルハルツ感染地は、河川流域に限られる。特に、カザマンス地方やシンサルム州の水田地帯。タンバクンダは濃厚感染地である。たまり水や小川で体を洗い、泳ぎ遊ぶからであろう。現地訓練をしたセネガル川流域の水田地帯にも、患者を多くみかけた。白い、蓮に似た花が咲く、のどかな田園風景が広々と広がっているところだった。

⑥ リーシュマニア症 LEISHMANIOSE (1976年10月～1978年4月)

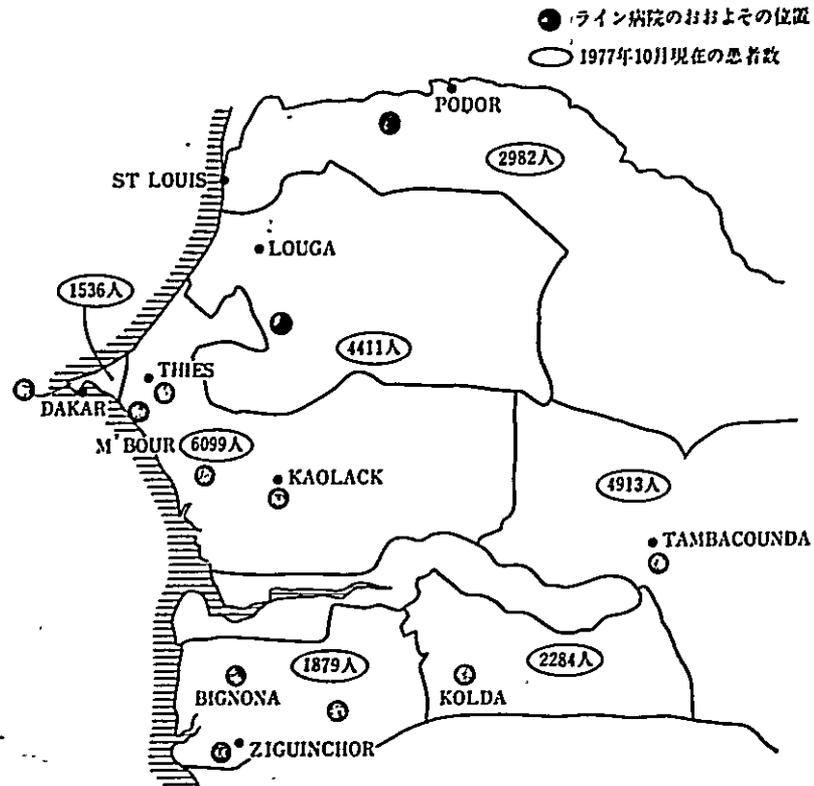


⑩トリパノゾーマ症 TRYPANOSOMIASE



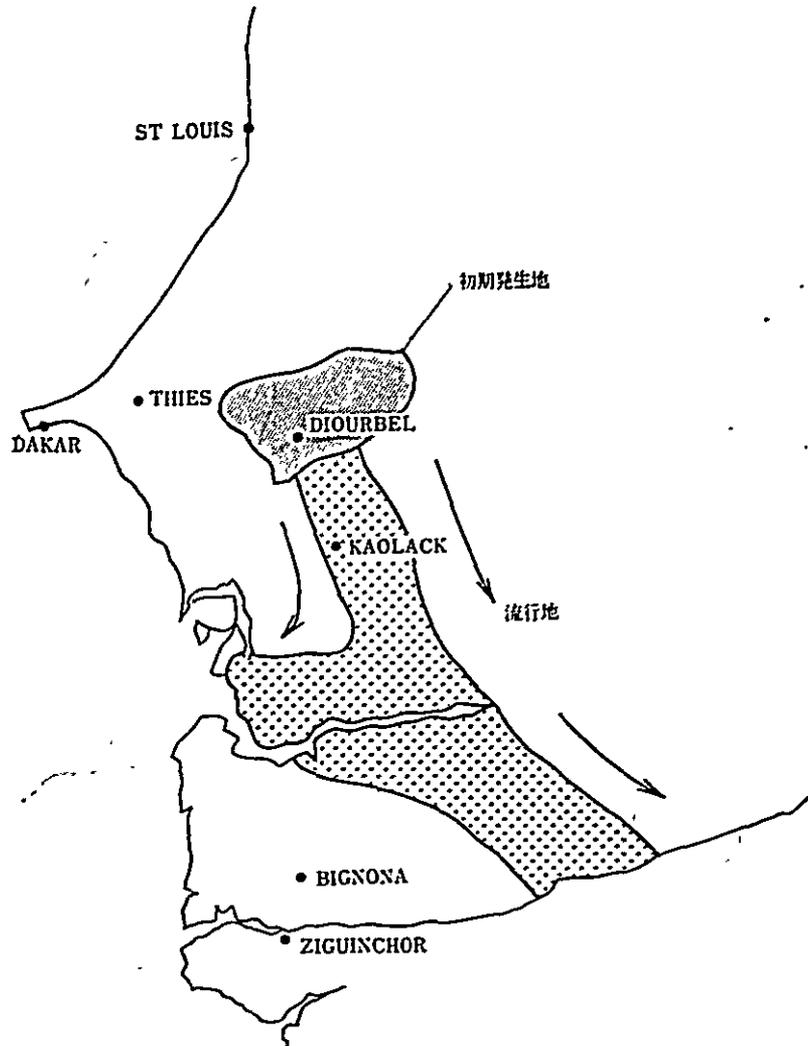
トリパノゾーマ症は、北部では見当らない。カザマンス地方において、よくすな縄が足に卵を産みつけたとか聞くが、実際見たことがない。また、当検査室においても、ずっと過去にさかのぼってもトリパノゾーマを検出したことはないと言う。西アフリカに多いのは、*Trypanosoma gambiense* であるが、一度、是非検出してみたいものである。

①ライ病分布 LEPRE 1977年度



ライ患者は、ダカール市内などでよく見かける。上に示した数字の他に、隔離されていない患者がかなりいるように思う。彼等は、指のない手を出してお金をねだっている。2~3人が、ポストの前や銀行の前にゴザを持ってきて座っている。ライの場合は潜伏期間がかなり長いので、幼児の時に感染してもわからない。長期間の対策が必要となってくる。

◎黄熱病 FIEVRE JAUNE 1965年度の流行地域



黄熱病の場合は、2～3年おきに流行を繰り返している。サンルイ近辺では見かけないが、1982年度に内陸で流行した。

以上見てみると、熱帯病の多くは南部、東部、内陸部、河川流域部に集中し

ていて、北部や首都近郊は少ない。特にサンルイは少ない。年平均気温24.5℃という低温、そして海岸、バックにサハラ砂漠を控えて乾燥していることなどの原因があげられる。

さて、最後に少し余談を……。学生の話をしてみようかと思えます。検査室には1カ月の期間で、2～4人あるいは多い時で6人くらいの学生が実習にやってきます。看護学校は高卒で入学することが出来、クラスは1学年と2学年の2クラスしかありませんが、生徒数は200人を越えます。彼等は、国から1カ月1万5千円の給費と服2着、クツ2足を与えられますが、経済的にはかなり苦しいらしく、本も満足に買えません。だから、実習で覚えた知識が即、実地現場に通ずることになります。ノートを持っていない学生もいます。学生だからといって、若いとは限りません。すでに3児の母であるとか、2児の父親であるとか、26歳～30歳などはざらです。彼等は、子供を親や親戚に預けて勉強に来ています。サンルイ生れの学生は半分くらい、あとは遠くタンパングやカザマンスからも来ています。検査室に来る学生に、「あなたはどこから来たの」と聞くのが楽しみです。彼等から色々な話が聞けます。色々な学生がいました。1カ月のうち、私のへたくそな仏語で説明を聞き、日本の話を聞き、自分達の故郷の話をする、どんな人でも友達になってしまい、検査室の実習を終えて他の科へ移っても、私に会いに検査室に来てくれます。それぞれに個性があり、忘れられません。覚えの速い学生、何度言っても分からない学生、頭で分かっているもいざやるとぶきちゅで失敗ばかりする学生、ある時などは二日酔いでやって来て、検査室の床にゲロを吐いた学生がいました。この学生は、トゥンカラといって26歳の男性でしたが、全く落ち着きがなく、白衣に血をこぼして真赤に染めたこともありました。皆注目していた学生でしたが、二日酔いの日のことはさすがに呆れかえって、学長の耳にも入ってしまい、1日の謹慎処分となりました。しかし、手のかかる子ほど可愛いというのか、忘れられない学生です。また、ある日産科に遊びに行っていると、お産をしたばかりのお母さんが私の名を呼ぶので、行ってよく見ると、検査室に来ていた学生で、無事女の子を生んだことを手を取りあって喜んだこともありました。彼女は庭に人参をたくさん作っているの、持って来てくれるなどとも言っていました。なんとも素朴な人情味があります。

中川隊員の報告書を読んで

赤尾 信吉

小生と中川隊員との出会いは、広尾における技術面接に始まる。純日本的な愛くるしい瞳の小柄な女性であった。彼女がセネガル派遣に決ったのは、彼女の豊富な経験と知識も勿論であるが、もうひとつは未知への情熱を感じたからだと記憶している。その後、派遣前の技術研修で小生の研究室で寄生虫の勉強を行なったが、当時バンダラデシュより研修に来ていた青年と友達になり、互いに仲良く学んでいたことが懐しい。里子をもじってシュガー（砂糖っ子）とニックネームも決まり、アフリカへ出発していった。

海外派遣前の短期訓練ではフランス語を十分に学び得なかった彼女が、現地で仲間に溶けこみながら医療協力を遂行することは、極めて困難なことであつたろう。日本では耳にしたこともないウオロフ語、ツクルール語、バンバラ語とくると、誰でも、日本人得意の微笑さえ忘れて顔がひきつったことであろう。このような環境の中で、中川隊員が現地の仲間との日常生活において、如何に自己を克服し、しかも優しく接したかが報告書の随所にみられる。このような心暖まる中川隊員の医療協力と友好的な生活は、今後の派遣隊員の心構えとしても大切なことである。

さて、現地では当然のことながら、器具、試薬、設備等の乏しい中で、数多くの細菌検査を要求され、それを順次現地向きに改善し実行した苦勞は、日本で働く技師には想像もつかないことと思う。報告書によると、細菌検査の分野では薬剤耐性検査を含めて疾病の原因菌である赤痢菌、病原性大腸菌、小児下痢に多いキャンピロバクターなどについて十分な固定や分離検査ができず残念である、と訴えている。経験豊かな中川隊員にとっては口惜しいことであろう。さらに現地医師の検査に対する考え方についても、かなりの見解の相違があるようだ。根本的な解決策としては、将来の医療協力の在り方として、日本人による医師、看護婦、臨床検査技師等の医療チームとしての参加も必要であることを指摘していると思う。

熱帯病を含む寄生虫病分野では線虫類として蛔虫、鞭虫、鉤虫、糞線虫、桿線虫など、条虫類では無鉤条虫、広節裂頭条虫など、吸虫類では重篤な泌尿器系疾患を起こすビルハルト住血吸虫、さらに原虫類では赤痢アメーバ、マラリ

ア原虫、ランブル鞭毛虫、膾トリコモナスなどが報告されている。これら寄生虫病のうち経口感染する寄生虫の多いことは、糞便処理が衛生的でないことを示唆している。一方経皮感染するビルハルツ住血吸虫症、蕪線虫症、マラリア症、オンコセルカ症などは、風土病としての広範囲な対策が必要であろう。

中川隊員は、これらの日本でもほとんどみられない数多い寄生虫を前にして驚きながらも、喜んで自分のものになっている様子がみられ、誠に頼もしい。彼女は早速これら豊富な材料を、各州から来ている学生実習の教材として用いたとのことで、素晴らしいことである。近い将来、同隊員に指導された学生達が、広大なアフリカ大陸各地で活躍することが大いに期待される。

臨床化学検査の分野では、特に試薬類の調達に大変苦勞した様子が報告されている。試薬の有無はもとより、その種類の少なさは日本では考えられないことである。しかし、単純な必須試薬品名などについては派遣前教育期間中に再考する必要があると考える。

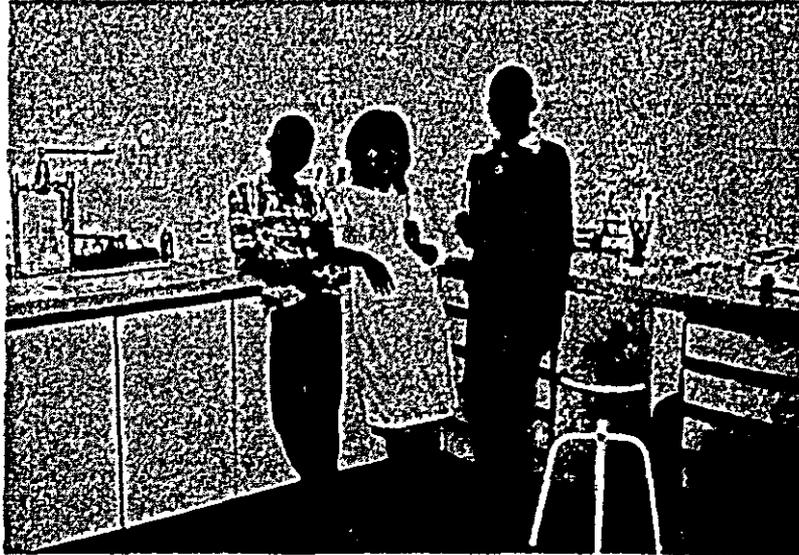
セネガルの医療事情についての詳細は、報告書にみられるように、首都以外では極めて良くないようである。首都以外の各地では病床数も少なく、看護人の質も悪く、多くの医療改善を必要とすることが指摘されている。中川隊員がオリエンタル州より学びに来た学生に、熱意をもって教育指導した成果が実ることを、心より期待したいものである。

その他の問題になる疾病としてライ病、結核が報告されている。破傷風など急死する疾病に対しては、人々の関心もあるように思われるが、結核等の慢性経過を辿る疾病に対しては、全く放置されているようである。いずれも国家的な対策を必要とする重要な問題である。今後一層先進国からの物質のみならず人心の医療援助が必要とされるものと、報告書は結んでいる。

これからも数多くの青年海外協力隊々員が各国に派遣されると思われるが、先輩隊員の開拓した道を更に大きくし、その国の人々より心から信頼される人物になって欲しいと思う。中川隊員の報告書は、今後同地域に派遣される隊員にとっては、衛生問題上の1つの聖書として読んでいただきたい。

様々な苦勞をした隊員の多くが、帰国後、再度の派遣を希望し燃えているときく昨今である。新任地に出発する隊員、無事帰国された隊員諸兄姉の御健勝を心より御祈りします。

(協力隊技術専門委員)



職場での筆者



セネガルの子供たちと

水泳指導において考えること

第1号, 2号, 3号報告書

職 種 水泳

氏 名 米崎 英朗

配属先 青年スポーツ省

体育指導者研修所

米崎隊員の略歴

生年月日 昭和33年8月13日

出身地 福岡県

学 歴 筑波大体育専門学群卒

派遣期間 56年10月～58年10月

1. セネガル赴任時点での現地訓練について

セネガルに到着して早や10日、いよいよ今日から現地訓練が始まる。期待とも不安ともつかぬものが私の体中を駆け巡る。日本で、広尾・駒ヶ根と我が任国については、充分過ぎる程の知識をつめ込んできた筈なのに、何が起こっても動揺せぬ覚悟を決めて来たつもりであるのに——ここまで考えて、私は頭をふって気弱になった自分をかき消した。今更そんな事を言ってみたって、どうなる訳じゃなし。気楽に行こうよ、気楽に。

車の窓からは限りなく広がる草原と、無数のバオバブの木々に「アフリカだなァ！ 本当に」と福山隊員が思わず口走る。同感だ。

私は、今、かつての暗黒大陸は西の果て、このブラック・アフリカの国セネガルの大地にしっかり乗っかっているのだ。近代化の進んだダカールでは起こり得なかった感情が、ここではセキを切ったように溢れだした。「しっかりやらなくては」。私は車に揺られながら、いつのまにか眠り込んでしまった。

観光と漁業の町 M'BOUR (ウンブール) はダカールの南約82km の所にある。私はこの町で、地域住民の社会教育にたずさわり、文化交流・広報活動・スポーツ教室などを行っている CDEPS (Centre départemental d'éducation Populaire Sportive) に配属され、水泳教官として一応競技水泳を主眼とした活動を行うことに決まっていた。

ダカールを出て1時間半、私達をのせた車はウンブール市内に入った。これが私が3カ月お世話になる所である。私の正式の配属先ティエスの青少年スポーツ省は、来年からスタートするので、この様な変則的な現地訓練の日程となった。どうもまだピンとこない。車は市内の中央道路をつつきってウンブール郊外へ出る。そして私達は12月までの仮り住いとなるジュステン・ビル氏宅に到着した。ビル氏はスイスの海外農業援助団体である CARITAS の普及委員として勤務している。いわばセネガルではエリート・クラスに属する人物であった。良家の出らしく品のいいのがよく分かる。昼食後、車は福山隊員をカザマンズまで送るため早々に出発した。

「しっかりやろうなッ」互いに固い固い握手をかわし、彼は旅立っていった。後にも先にも、これ程心細さを考えたことはなかった。いよいよ日本語の通じない世界への第一歩を踏みだしたのである。もう引き返すことはできない。真に天涯孤独の身(?)となったのだ。

進むことも、引くこともまかりならぬ断崖絶壁に立たされた感じ。きっと彼

も同じ気持だったのだろう。

ビル氏は大変ジェントルマンだった。私はこの3週間、衣、食、住、日常生活に困ったことは一度もなかった。言葉の問題も思ったよりは少なく、私のたどたどしいフランス語でも十分に意志疎通の役割を果たしてくれた。彼との3週間の生活は本当に楽しいものであった。11月上旬に、彼は研修のためフランスへ行ってしまったが、彼との友情はこれからも絶える事なく続くであろうと思っている。感謝の気持でいっぱい。元気で頑張って欲しい。

仕事の話に話を移そうと思う——と言っても、全く何も無かったのである。CEDEPSの勤務は21日から始ったが、初めて事務所を持たされたのに、仕事は皆無。仮りにも地域の社会教育を担当しているというのに、センターの午前(9:00~12:00)、午後(4:00~6:00)の勤務時間をしっかり守っている者は1人もいない。私自身は遅刻、欠勤だけは絶対にしなかったが、所長からして1時間も2時間も遅れてくるのだ。職員が遅刻した位でビックリしてはられない。そしてやっと来たかと思えば、仕事もせずにおしゃべりばかり。よくまあ、あんなに話すことがあるものだと思った。

私といえば、明日また明日と延び延びにされている水泳学校の公開を待ち望みながら、一日中暗い事務所の中でフランス語の勉強に励んでいた。いかに国民性とは言え、私にはこのダルな組織が許せなかった。仮りにも、地域住民の社会教育という大きな目標をかかげていながら、全く何も行っていない。彼らには意欲があるのか。プロフェッショナルとして誇りがあるのか。憤りを感じながら、私は悪夢の様な日々を送った。私は彼らに決して妥協すまいと、心に誓っていた。

ある日、秘書の1人が私の事務所にやってきた。曰く「エイロウ、お前はどのようにして彼らと話そうとしないのか。お前は内気な人間なんだろう。日本というのはそういう国か」。私はこみあげてくる怒りを、やっとの事で押えると「それは違う。私は与えられたポストで、それ相応の働きをしているつもりだ。勤務時間中に話をするなど、日本では考えられないことだ。しかし皆がそういうのであれば、一度話し合ってみようじゃないか」私はそう言って席を立つと、彼らがいつも遊んでいる(仕事をしている)部屋へ彼女と一緒に入り行き訳を説明した。彼らは初め、キョトンとしていたが、しだいに私の話に興味を覚えてきたらしく、しきりに質問をあげせかけてくる。辞書を片手の苦しい会話だったが、何とか自分の意志は伝えたつもりであった。

おかしなもので、私達はそれ以来すっかり仲良しになってしまった。私は心

水泳指導において考えること

の中では、彼らに妥協してしまう事は危険であると思っていた。しかし、反面、彼らに妥協しつつ職務を全うするという方法との葛藤も存在した。結果的に私は、後者に落ち着いてしまった。今でもどちらが正しいのか、私には分からない。だが実際、実に仕事がやり易くなった。やはり技術協力の眼から見れば、私は初めから後者をとるべきであったろう。理想にばかり走っていても、らちがあかない。彼らをうまく（友情をもって）利用する事、この事は身を持って納得することができた。私にはこれが、この3週間における最も大きな収穫だったように思う。現在は、彼らと日に何時間かは辞書を片手におしゃべりをし、後はフランス語の勉強という日々を過して（相変わらず、仕事はないのです）、それなりに満足している。

私の振り返りの周辺に、小さな子供達がたくさん住んでいた。仕事がなく、家でボーッとしている時ふと考えた。仕事がなければ、こちらから作ってやれ。この子供達に水泳を教えよう、幸い海も近いことだし。私はさっそく、その辺でウロウロしている子供達をつかまえて、水泳を教わる気はないか、もちろんお金なんかは取らない、毎週1回その海岸で授業をするから、と持ちかけた。子供達も、私が日本人だという珍しさもあってか、非常に乗り気であった。私はさっそく、所長に計画書を提出し（下のスケジュール参照）、授業の場となる海岸を視察してもらった後、正式に水泳教室を持つことを許された。

<子供のための水泳教室計画書>

時間：毎週土曜午後3：00～5：00

場所：近くの海岸

時期：11月7日～12月19日

プログラム

- ① 11/7 水慣れ…水遊び
- ② 11/14 } クロール1, 2
11/21 } (救助法1)
- ③ 11/28 クロール3, 平泳ぎ1
12/5 } 平泳ぎ2, 3
12/12 } (救助法2)
- ④ 12/19 小水泳大会

さて、今度は生徒だ。今のところは3人、しかしこれではどうしようもな

い。そこでその3人を使って、友人に連絡を取ってもらい、何とか教室を開けるだけの生徒を集めることができた。尚、生徒には全員健康状態の調査を行なったのち、入学を許可した（実際には、医師の健康診断を受ける事が望ましかったのであるが、ここではできない相談である。しかし、今後その件については検討したい）。

自己紹介カード

（上から順に）名、氏、年齢、住所、学校へ行ってますか？

病気の有無

- 心臓病
- 結核
- 胃炎
- 皮膚炎（部位）
- 眼病
- 耳炎
- 鼻炎
- その他

名簿

| | | | |
|----------------------|-------|----|------|
| 1. Albert Sidy N'Gom | (17歳) | 男子 | 健康 |
| 2. Simon Dione | (12") | " | " |
| 3. Noussa Keita | (15") | " | " |
| 4. Paul Dione | (14") | " | 軽い胃炎 |
| 5. Andre Faye | (13") | " | 健康 |
| 6. Ibrahima Sarr | (11") | " | " |
| 7. Eloi Sarr | (14") | ♂ | " |
| 8. Sambakane Kane | (8") | " | " |
| 9. Andre Diam | (13") | " | " |
| 10. View Sine | (13") | " | " |

※全員就学中（小学校）

尚、1. Albert は脱腸、2. Simon はアレルギー性鼻炎であり、計3名が異常のある者であったが、いずれも水泳に支障をきたす程のものではなかった

水泳指導において考えること

ので、参加させることに決定した。

最初の授業は、11月7日午後1時（この日は、シカップ事務所に集合しなければならなかったので、時間帯をずらした）に開始した。参加者は6名（4名欠席）、ややがっかりしたが授業を始めた。危険防止の為、30mのロープと3つのポールで区画を作ろうとしたが、この日は波が荒く、ことごとく流されてしまい、失敗に終わった。結局、区画なしで授業を行なうことになった。教案は以下の通り。

＜子供のための水泳教室 第1回授業計画書＞

期日：11月7日（土） PM1：00～2：30

人員：6名

場所：自宅近くの海岸

状況：波が荒く、引き潮のため水深がかなりあった。天候は良く、気温、水温共に問題なし。

授業計画

- ①準備：ロープを張り区画を作る（15分）
- ②準備体操：関節を重点的に（5分）
- ③点呼：点呼の方法、目的についての説明の後、点呼を何度か行なわせる（5分）
- ④自己紹介：教官、生徒共に簡単な自己紹介（5分）
- ⑤第1教程：水慣れと呼吸法（15分）
 - ・サークル遊び（丸くなって手をつないだまま、色々な遊戯を行なう）
 - ・風車（左右に回る）
 - ・鳥かご遊び（1人が、潜ったり跳んだりして中に入る）
 - ・呼吸法（水から口が出た際のタイミングを掴ませる）
 - ・ポビング（呼吸、潜水の繰り返し。最高10回まで）
 - ・股くぐり（各自の股を潜水してくぐらせる）
- ⑥休憩（15分）
 - ・相撲の紹介（トーナメントで全員に行なわせる）
- ⑦第2教程：目からの水泳指導（10分）
 - ・1人ずつ自分の好きな泳ぎで10m程泳がせる
 - ・教官の模範泳法（近代4泳法）

⑥整理体操 (5分)

⑦点呼, 解散 (5分)



相撲で子供達と遊ぶ

さて、授業の結果は、まず成功とみてよいだろうと自負している。何にしても「すもう」が効いたようだ。セネガル人は日本の武道に対し、異常なまでの関心を示す。これから生徒数を増していくには、何かで彼らをひきつけなくてはならない。残念ながら、セネガルの水泳に対する関心はまだまだ低い。少々ずるい方法かもしれないが、柔道、空手、剣道などを取り入れ、どんどん彼らをひきつけていくつもりである。むろん、主眼は水泳にあるのだから、いずれは彼らの興味を、武道から水泳に昇華させなくてはならない。まあ、とにかく授業は、計画通りに行なうことができた。また彼らの泳力も、思ったよりも高等であった。今回は、泳法までは手をのばさず、水慣れ程度に終わったが、次回は計画通り、クロールの指導に入りたい。しかし、プールがあれば……。

3週間、実に数多くの思い出をつくり、ひとまずシカッパへ引き上げた。訓練中、福山隊員がマラリアにかかったが、大事なく元気であった。本当によかった。他の3名の女子も元気であった。さてこれからは、全員が各地に別れいよいよ協力活動が始まる。我が任地は色々と問題も多く、前途は多難であるが、私はなんとかこの3週間で足がかりを掴めたような気がする。頑張らなく

水泳指導において考えること

ては。ウンブールには新居が待っている。新たな気持ちで焦らず、じっくりと腰を落ちつけ、水泳の種を揃えて来よう。明日出発を控え、そう心に誓う私であった。

2. 到着して3カ月たって考えること

3週間の現地訓練を終え、久しぶりに見た同胞の顔は確かに懐しいものであった。夜を徹しても飽きる事のない土産話に花が咲き、互いの労をねぎらい、新たなエネルギーを蓄積して、またそれぞれ北へ南へ、今度は2年間その地に根ざしてボランティア活動に汗を流さねばならない任地へと赴いて行った。私の場合は、正式の配属先CNEPSが移転したばかりで、施設使用の問題が保留となっており、まだ開校まで間があったので、再びウンブールへ戻り、前回と同様CDEPSの水泳部門を担当する事となった。

1カ月近くもウンブールに住んだおかげでどうやら土地勘らしきものが出てきたようだ。今では友人も数多く、町を歩けば「ボンジュール」の声がとんでくる。一々応待していたらきりが無い。煩しさの中にも、自分の現地への適応を確認し満足感にひたる。

そんな日々の続くなか、私の錯覚を大きくクローズ・アップする様な大事件が起こった。3カ月分の生活費として持参していた大枚50万CFA（日本円で約40数万円）をそっくり盗まれてしまったのである。おそらくは家に鍵をかけず近くのブティックに買物に出たほんの5分程の間に賊にやられたものと思われる。私の不注意がまき起こした結果とはいえ、この事件は私の生活のベースを根本から崩し、絶望のどん底へつき落とすには充分すぎる程のアクシデントだった。

そして最も恐るべき事は、それまで私がセネガル人に抱いていた親近感は全く失ってしまった事であった。ごく親しい友人でさえも敵に見え、毎日、掃除と食事をつくりに来てくれる女中も信じられず、「教育は死なず」という教育書に「教師は生徒をどこまでも信じることである。馬鹿の様に信じる事によって、やがて相互の理解が生まれる」という一節があるが、さらに悪い事に、私は自分の水泳教室の生徒さえ信じられなくなってしまっていた。胸のつかえるいやな日々が続いた。

この事件については、これで記述をやめようと思う。やがて誤解もとけて、セネガル人に新たな希望をいだき、活動を続けていく私の姿を想像されるかもしれないが、そんな生やさしいものではない。食い物ではないが金のうらみも

恐しい。

前回と同様 CDEPSには、私の為に用意された仕事は全く無く、私は自分で作った水泳教室をさらに発展させ持続する以外に手段はなかった。残るウンブールの滞在期間は2カ月弱、また気候を念頭に入れても、そう長い期間は教室を続ける事はできない。ウンブール沿岸の海流は寒流のため、気温からは想像もつかない程の冷たさである。水温計はないので水温は正確には判らないが、長くつかっていても10数分が限度、それ以上続ける事は逆効果である。これは恐らく、水温が20℃弱位のためだと思われる。

また彼も、水泳教室をおこなうには少し高く、条件は悪い事だけである。やはりプールが欲しいところだが、それはできない相談。とにかく以上の事を前提条件に、私は水泳教室生徒募集のポスターを製作し、ウンブール市内の公私小中学校と人目につきやすい映画館、ガレージに配布した。

1週間程で40人余りの生徒が集まり、私はこれを無作為に10人単位の4グループに分け、水・土曜日の午後2時から6時までを利用して各グループごとに1時間の授業を行なうことにした。場所の設定に関しては都合よくウンブール郊外の海岸にレバノン人の建てた Centre Touristique というリゾート・ホテルがあり、その一角を借用して水泳教室を行なう事に決定。以下、指導計画の概要とその感想を記す。

＜ウンブール市子供のための水泳教室＞

①期間：1981年12月9日～12月23日

②期日：上記の毎水、土、日曜日

③対象：ウンブール市、公私小・中・高校生（男子のみ）

（本来は年齢・性別を問うていなかったのだが、結果的にこのような構成となった）

④グループ構成：上記の40名を4グループA～Dまでランダムに分けた
（10名単位のグループ）

⑤カリキュラム

水泳指導において考えること

(i) 時間帯

| 期間 時間 | 12/9 (水) | 12/12(土) | 12/19(土) | 12/20(日) | 12/23(水) |
|----------------|----------|----------|----------|----------|----------|
| p. m 2:00~3:00 | A | A | C | B | 全 |
| p. m 3:00~4:00 | B | B | A | C | |
| p. m 4:00~5:00 | C | D | D | D | 員 |

(ii) 指導内容

ポスター配本の際には

- クロール
- 平泳ぎ
- 水中遊戯
- 救急看護法
- 日本の伝統スポーツ

以上の5点を明記していたが、募集に時間がかかりすぎたため、時間数が大幅に減り、したがって平泳ぎと救急看護法は今回は見合わせることにした。各グループ4時間の授業数(4単位時間)で、各回ごとの学習内容を簡単に記す。(教室は省略)

(1) 第1回

- 水慣れ
- 呼吸法
- 浮き身
- 水中遊戯(上記の3項目と関連させている)
- 相撲の紹介

(2) 第2回

- 水中遊戯
- バタ足
- 伏し浮きバタ足
- 陸上でのクロール腕の動作
- 面かぶりクロール
- 相撲のトーナメント試合

(3) 第3回

-
- 呼吸法・浮き身・バタ足の総復習
 - 面かぶりクロール
 - クロールの呼吸法（水中と陸上で）
 - 呼吸をしながらのクロール

(4)第4回

- グループごとの対抗戦
 - ・相撲
 - ・騎馬戦
 - ・水泳のリレー
 - ・バタ足リレー
 - ・クロールのリレー

(5)結果と反省

◦教案

4回の授業ごとに作成した。場所が環境の変わりやすい海である事と、生徒の出席状況を考慮に入れ、ある程度時間的な余裕を持たせた（具体的には60分の指導を45分として計画した）。学習内容については前述した。

◦出席状況

最悪。生徒40名中、4回全部出席したもの僅か1名、全体の出席率は30%弱、それも時間通りに来ず、早く来すぎたり、遅刻したり、ひどいものになると日を間違えるのがある。これには先生もびっくり。しまいにはガッカリ。教室なぞは何の役にも立たず、人数が集まるのを待って授業を行なうという日々が続く。

◦環境

海の冷たさといったらなかった。おまけに波が高く、あまりよい条件とはいえない。耐水時間1回につき5分、授業1時間で3回が限度。従って水泳に使える時間は限られる。水温計が無いので正確な所はわからないが、優に20℃は割っているだろう。

◦生徒

私が東洋人であることから、皆興味を示していたようだ。自己主張のはっきりした子が多く、嫌なものは嫌という。考えようによってはやり易いが、当初は多少の抵抗があった。

◦先生

自己採点60点ぐらいかな？ 重なる悪条件に意欲をそがれた分だけ。

水泳指導において考えること

・授業

当初の予定を変更したものをさらに臨機応変にアレンジしていった。悪くいえば、いいかげんに思いつくままにやった。授業に際しては原則として、単位時間毎に学習目標をおき、導入、展開、整理の3段階を厳守した。例えば学習目標―「面かぶりクロール」、導入―陸上でのクロールの腕の動作及び波際でのバタ足、展開―水中練習、整理―模範泳法とフィードバック練習、といった具合である。

・学習効果

生徒の出席率により個人差があり、授業数も極端に少なかった事から学習効果は低く、まちまちであると言えない。しかし動機づけとしては、まずまず成功したようだ。私が見た限りでは泳力的にずば抜けて上達したものはいなかった。

・反省

- ・水泳場の調査不足（他に場所もないが）
- ・セネガル人の子供達の気質を十分に理解していない
- ・教案の柔軟性不足

・今後の展望

時期的に、今は水泳に適さない。とにかく現在の生徒数を確保し、水温の上昇を待つ以外に手は無さそうである。



今日は12月25日クリスマス、昨日のCDEPS職員とのドンチャン騒ぎが悪かったのか、体調が思わしくない。感冒にでもなった様だ。まあいいや、水泳教室も終わった事だし、2~3日寝てようっと。思えば本当に色々な事があった。それは見知らぬ国のまだ見知らぬ町で3カ月も生活していれば、あたり前なんだが、それにしても見るもの聞くもの温室育ちの、学卒のペーパーの私にとっては、どれも心臓の止まる様な出来事だった。ドロボウに遭遇して以来、あの忌まわしい家を引き払い、もう1カ月も

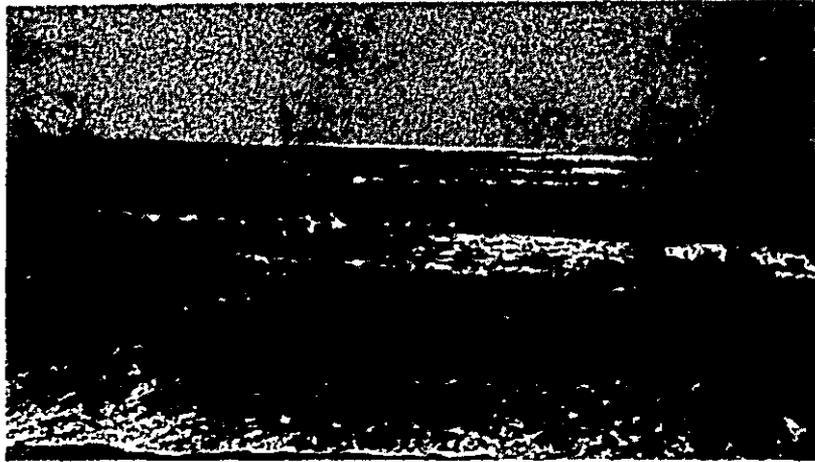
このCDEPSの局長の家にやっかいになっている。2畳ほどの狭い部屋の中に、マットレスが1つ、それだけでもキュウクツなのに、とどめに10人の子供と5人の居候のカバンやら洋服やら靴やら、所狭しと積み重ねてある。まさに鳥小屋に入れられたようであったが、これでもセネガル人にしてみれば最高のもてなしなのであろう。住めば都とはよく言ったもので、仕事から帰ればホッと一息つける。今は小さな我家である。

両親と子供達と居候と女中20数名が入れかわり立ちかわり「エイロウ大丈夫か」「治ったか」と見舞いにやって来てくれる。ありがたいが迷惑な話したが、やはり嬉しい。外国で病気になるとその望郷の情著しいと聞いたが、不思議とそんな気持にもならない。どうかすると、初めからここで生活している様な錯覚にとられる。

3カ月間の悪戦苦闘も今となっては懐しい。この町ともあと数日でおさらば

水泳指導において考えること

だ。やはり病気なのか、いつになく感傷に没りながら、心はすでに新しい任地ティエスへ飛んでいた。



広大な大西洋

3. 配属先（CNEPS）での活動

セネガル生活も3カ月を過ぎ、無事年も明け、私は長かった現地訓練にピリオドを打ち、同州ティエス市にあるCNEPSに、水泳教官として配属された。

このCNEPSは、1982年にその全施設を軍が接収、移転を余儀なくされ、現在は仮事務所での業務を行なっているという状態であった。むろんプールも軍の所有物となったので、自動的に私は仕事が無くなっていた。覚悟はしていたものの、仕事もないのにどうやって配属されるのだろうと思ったが、とにかく私は住宅、家具、電気、水道とそれぞれ手続きをすませ、ティエス市はほぼ中心に近いアシュレム町に居を構えた。

1月7日に出勤してこいと言われていたので、朝の10時頃学校へ行くと、何人かの職員がいて仕事をしていた。さっそく挨拶。3カ月経った今でもフランス語は余りよく分からないが、皆が「何の御用ですか」といった風な感じを受けた。とにかく校長に会おうと思い、部屋を尋ねる。私の今日の目的は、この1月～5月の授業で何を受け持たせてもらえるかということであった。水泳がダメでも、何か他のスポーツならできない事はない。

しかし、校長の返事は、「カリキュラムは全て決定した」というもの、私は完全に無視されたようだ。ならばどうして呼んだのか、いくらなんでも失礼で

はないか——口にはしないが、私のそんな感情に気がついたのか、校長は「アシスタントをやってみてはどうか」と言う。はっきり言って、私は嫌だった。ただでさえ言葉のハンディキャップがある上に、アシスタントでは、生徒の誤解を招くことは必至だ。私は勉強に来たのではない、教えに来たのだ。水泳は出来なくなったが、他のスポーツだって、任せてくれればしっかりやってみせる。しかし、現状はそれを許さなかった。私の CNEPS における初仕事は、バレーボールのアシスタントと決まった。

前にも述べたように、CNEPS は施設を持たないので、ティニス市郊外にある国立競技場 Lat Dior を借用するという形で、授業を行っていた。主要施設は、陸上競技場、バレー・バスケット・ハンドボール兼用コート、バレーボールコート等である。国立だけあって、スタンド付きのなかなか見栄えのする施設である。私のアシストするバレーボール授業は、その中の一角にあるコンクリート下のバレーボールコートで行なわれることとなった。

バレーボール授業の対象は1年生（男22名、女4名、計26名）で、担当教官は Sougou Fara というセネガル人で、専門はハンドボール。第1回目の授業はすでに終わっていたので、私は2回目の授業から参加した。簡単な紹介のあと授業に移る。リーダーシップは彼がとるので、私は生徒の間を回って簡単な各種技術の説明に専念した。

そんな感じで1カ月が過ぎ、私は早くも疑問を抱くようになってきた。バレーボール授業は週に2回で、その頃には半分以上の授業がこなされていたが、私はもうほとんどやる気が失せてしまっていた。おもしろくないのである。人の授業に出てアシスタント、授業に出て何の目的も主体性も見い出せない。甘えだ、と言う人があるかもしれない。自分のその場で出来る限りの事をやればいいではないか、と言われてもしかたがない。でも、私はヒョウ子とはいえ、プロなのである。そんな実習生みたいな事は大学だけで結構だ、授業をやるのであれば、やはり1人で1つの授業を持って、計画を立て、生徒を導いて行きたい。それに、私はここで2年間働かなければならない。

しかし、学校内では、私の評価はあまり良くなかった。特に同僚のフランス人からは、差別に似た待遇を受けたことさえあった。彼らにしてみれば、独立当時から我々がやって来たものを、今さら日本人なんかが……という言い分だろうが、私にとっては不快きあまりなかった。

以上のような理由で、これ以上授業を続けることは、得策ではないと思われた。誤解されては困るので言うておくが、その頃、首都ダカールでは、水泳の

水泳指導において考えること

ナショナルチームが活動を始めつつある、という情報があった。学校それに私自身の中に原因があったことは否めないが、私として最も大きな理由は、自分の力を効果的に使いたいという事であった。とにかく3月中旬で前期授業が終わるので、それまではアシスタントを続け、それ以後はナショナルチーム指導に回りたいという内容で調整員に許しを受け、3月からはダカール住いと決まった。

3カ月住んだ我が家とも暫くお別れである。ダカール行き荷物を揃えながら、私の中にはどうしようもない敗北感が満ちていた。新しい出発の際には、いつも力がみなぎるものだが、今度ばかりはそうもいかない。とうとう学校に馴染むことが出来なかった……。そんな中途半端な気持では、心が晴れないのも無理はなかった。

ダカールには新しい仕事がある！ 今度こそは職務を全うしなければならぬ、失敗は許されない。セネガルに来て半年、3回目の引越し——。心は不思議にさめていた。

4. ナショナルチームのコーチになって

3月ともなれば、西アフリカのこと、暑さが身をもたげてくると思いきや、今年は例年になく寒波(?)のため、ダカールの街はまだ肌寒かった。カボ・ベルデは首相官邸の隣、先年度の末にオープンしたばかりの Hôtel Savana、ここにある50メートル6コースのプールが、私の新しい職場だ。来たる4月上旬のチュニジア・セネガル対抗体育大会のため、水泳ナショナルチームが、すでに水しぶきをあげているのだった。

とは言え、第3国であり、おまけに施設が少ない(セネガル人の使えるプールは、ここ Savana のみ)ことが災いし、実力は大したことはないだろうと思っていたが、やはりそうだった。人間極限を目指せば、自然とその外見も芸術的になるものである。プールで今、水しぶきを上げている者達のそれは、あまりに程遠かった。

そもそもこのような環境下で、一流を目指すこと自体が不可能なのである。逆に言えば、こんな所でよくもまあこれだけの技術を身に付けたものだ、感心させられる。どうも抽象的になってしまったが、とにかくレベルが低いという事は、一目瞭然であった。

セネガル水泳連盟は、日本のように体育協会の中に事務局を持つ財団法人ではなく、また、FINA(国際水連)にも加盟していない。いわば同好会みたい

なもので、組織の人間は皆ボランティアである。それでも会長、副会長のものと、8州のうち3州（フルーブ、カップベール、シンサルム）に委員会を持ち、積極的な活動を行なっている。もちろん、3州のうち唯一セネガル人が無料で使えるプール（Savana）を持つカップベール州に、その中樞が置かれている（他は川か海で行なっている）。

水泳コーチは、その地方の出身者でかつては水泳選手だった人などが、率先して行なっている。もちろん、しっかりとしたコーチング論、生理学、その他のセオリーを踏まえている訳ではなく、その多くは経験とカンに頼っている状態である。

ナショナルチームがトレーニングを行なっている、この Savana プールについて少々触れようと思う。このプールのある Hôtel Savana が去年オープンしたことはすでに述べた。実は、何と1945年にフランスの援助で建てられたもので、昔はリド（Lido）のプールと呼ばれ、一般にも開放されていた。ところが財政難のためやむなく、セネガル・フランス合併でホテルの施設として接収することに決定、約3年で工事を終え、先年度新たに“Savana”ホテルとしてオープンしたのである。

リゾートホテルとなったことは、自動的にプールが一般のものではなくなったということである。ここでセネガル水泳チームは、ホテルからシャットアウトをくらひ、ホームグラウンドを失ってしまったのだ。現在は、合併で経営するホテルだという事で、青年スポーツ省から使用許可がおり、やっと午後5～7時の時間帯をトレーニングに当てられるという状態であった。しかしそれも、4月のチュニジアチームとの対抗戦までという約束であるから、まさしくセネガル水泳界にとっては受難の年と言えそうであった。

ナショナルチーム専任コーチは、Abdoulay Karim Thiem というダカール市内の高校体育教師であり、チュニジア大学の教育学部体育学科で学んだ理論のしっかりした人物。私が好感を持った、数少ないセネガル人の1人だ。連盟の会長から、彼と2人でとりあえずチームの面倒をみるようにとの事で、私の仕事は始まった。チームは10名程度、うち3名が女性である。

ダカールには、3つの水泳チームがある。1つは Diaraf という Savana の職員と近所の人々で構成されたチーム、1つは U.S. Gorée という、過去奴隷売買の忌まわしい島となった Gorée 島の住人で構成されるチーム、もう1つは、ASFA (Association Sportive Force Armée) という軍隊チームである。男子7名のうち2名が Diaraf、2名が U.S. Gorée、残り3名が ASFA という

スポーツ省
来したが、
、5月、6
受けてい

水泳指導において考えること

構成に女子3名（これも Diaraf）が加わり、チームトレーニングが始まった（時々、何人かの飛入りもあったが、この10名はほぼ常時トレーニングを行なった）。ここでは、その感想を述べようと思う。

まず女子だが、これは問題外という感じ、お嬢さまの水遊び——といった程度のものだ。とにかく3名共練習嫌いな上に、あまりプールにやって来ない。水泳は持続的なトレーニングを必要とするスポーツである。1週間に2、3回しかトレーニングしないのであれば、しない方がよい。もともと私は男子にしか興味がなかったので、こちらの方はどうでもよかったが、そう邪険にも扱えないので、一応世話はしてあげた。3名のうち2名が混血（フィンランド系、中国系）なので、セネガル人に教えているという感じはしなかった。

男子は、常時やって来るのが7名、なかでも私の目を引いたのが Maliek Fall (Diara) と Samba N'Doye (ASFA) の2人。Maliek Fall は28歳のロートル選手だが、セネガル記録を7つも持ったスーパースター、やはり7名の中では一番良い泳ぎをしている。彼の名は、去年何度も新聞で見えて知っていた。腕の強さは他の追随を許さない。最近腹が出てきたと言って、ダイエットしている。物静かな好青年である。

もう1人の Samba N'Doye は軍隊の選手だが、すばらしい素質を持っている。水泳の場合、素質というのは、フォームに対するカンもしくは筋力や、柔軟性などに現われる。彼は特に筋力がすばらしい。少々練習嫌いなどころがあったたびたび私を困らせたが、鍛えようによっては、ハイレベルの実力をつけることは間違いない。Maliek はスター性という点、Samba は将来性という点で、特に印象に残った。

さてさて問題のセネガル・チュニジア対抗競技大会、何と水泳の部は中止——と言っても、これはもともと予定には入っておらず、先に述べた Abdoulay の、とらぬ狸のなんとやらで、チュニジア留学中のコネを頼って、この対抗戦の1つに入れてもらおうという計画だったのが、オジャンになったというおそまつなものであった。もうセネガル人気質にはすっかり慣れさせられていたので、さほどのショックは感じなかった。しかし、やはり選手はガッカリしていた。対抗戦の予定日には、皆で記録会を行なった。そして、その日でプールは使えなくなった。

新たな問題が山積みのセネガル水泳界。私は、セネガルに来て初めてのプールでの仕事に、多少満足はしていたが、これからのプール使用をめぐる問題については、やはり大きな不安を抱いていた。

5月がやってきた。プールは使用出来なかった。副会長は、青年スポーツ省とプールの持ち主（すなわちホテルのオーナー）の間を忙しく行き来したが、ラチはあかなかった。それは6月になっても同じ事であった。私は、5月、6月と全く仕事の無い状態で過ごすハメになった。新たな試練が待ち受けていた。

米崎隊員の報告書を読んで

梅田 利兵衛

これまで多くの水泳指導担当の隊員の報告書を読ませていただいたが、米崎隊員の場合は、現地訓練の当初から特に悪い条件のもとで、他の多くの隊員が直面するような困難な諸問題につきあたりながらも、自力でこれらを見事に解決し、本来の任務完遂への確固たる手がかりを掴むに至ったすぐれた体験例として取り上げられたものと思う。

これらの問題の中で、先ず第1にあげなければならないのは、当初の現地訓練のために派遣された機関も、また、現地訓練を終わって正式に配属された新しい機関のいずれもが、施設の未完成のために、組織的・機能的に本来の活動を開始しておらず、張り切って赴任した本人も拍子抜けて、訓練らしいものが何も行なわれなかった事である。

第2の問題は、本来の任務である競技水泳の指導どころか、一般水泳の指導のための設備・指導計画・協力者など、何の準備もなく、受け入れ態勢が全くなかった事である。しかし本人は一念発起、ないないづくしの条件下で、自発的に海での水泳指導を開始した。

第3は、他の多くの隊員の経験している、現地の人達との職業意識や働きぶりと、日本人特有の気まじめさとの相違から、一種の違和感のある事に気付かなかった事である。仲間の忠告によってそれを知り、本人の言葉では、一種の妥協によってうまく解決した。

第4は、発展途上国に多い盗難である。全くの油断からで、あり金の40万円余を盗まれた事である。この事によって、本人が抱いていた現地人に対する信頼感を途端に失ってしまったという。

隊員としての外国での経験をした人なら、以上のことは何処にでもある事で、この程度の事で参ってはいは、隊員としての任務は果たせないよと言われるかもしれない。しかし、私がここで取り上げたいのは、関係者の長い間の努力にもかかわらず、依然としてこの種の基本的な問題が未解決のまま、繰り返されている事である。その原因が派遣国側にあるのか、日本人特有の生まじめさや弾力性のなさにあるのか、よく分からないが、すべての派遣隊員共通の問題として、対策がとられなければならないと思う。

次に、水泳指導上の問題について、重要と思われる事項を取り上げてみたい。現地訓練は、前記のように何も無い悪条件のもとで、隊員が自力で、自分の道を切り開いていく訓練をするのが主旨であるとすれば、米崎隊員の場合は、その典型であり、本人は成功裡にこの訓練を終わったことになる。しかし、スポーツの中でも、特に生命を失う危険性を含んでいる水泳では、生命の安全をすべてに優先させるという原則に基づいた対策がいくつかある。

水泳は、泳げない人達に、水の中での安全を確保する能力を身につけさせるというねらいで指導される反面、その初歩的段階が最も危険を含んでいるのが事実である。従って初心者や未熟者の指導は、絶対的に安全を保証し得る条件下で指導されなければならない。米崎隊員が指導した水泳場は、報告では何の監視や救助の態勢の整っていない、しかも流れがあり、水底も平坦でなく、水温も低いという悪条件の多い所ようである。ただ本人は、学生時代の臨海実習の経験を生かし、安全のために必要な事前の調査、施設（ロープによる区画は最初失敗したようであるが）、グループ別指導（泳力別のグルーピングをしなかった点に問題はあつたが）、泳者の健康調査等の打つべき手をちゃんと打っていることに着目しなければならない。この事を特に取り上げたのは、単なる競泳の選手であった人や、プールにおける水泳指導だけの経験の持ち主の隊員には、同じような条件下では、絶対に同じような指導をしてもらいたくないという事を強調したいからである。

従来隊員の中には、競泳指導と一般水泳の指導や、教員養成大学の水泳指導を担当した人も多かった。今まで隊員が死亡事故を起こした事は聞いていないが、将来にわたっても起こらないとは保証できないのである。できるなら、プールだけでなく、海や河川の自然の水泳場の指導法や救助法、教急処置等の教育をしてほしいと思う。また、ただ1つの特技だけしか指導できないというのでなく、米崎隊員が実施して成功したような、遊びや専門外のスポーツの技能をも身につけた、教養の広い隊員の募集や訓練について配慮してほしいと思う。

以上、米崎隊員の、特別に長かった現地訓練の報告に関する所感である。同君のその後の本任務における立派な活躍の報告を期待したい。

（協力隊技術専門委員）

あ と が き

青年海外協力隊員の報告書集を昭和54年度に発刊して以来、今年で5年目を迎えました。これまで、23カ国の報告書集を刊行し、多くの帰国隊員の皆様方から、現地の体験に基づく、貴重な生の声を寄せていただきました。一昨年度からの試みとして、今回のセネガル編におきましても、冒頭に現地事情を説明する報告書を置き、以下に、業務報告書を配置して、当国理解の助けとなるよう編集しました。今回、セネガル編においては、帰国隊員が少ないため、一部、現在活動中（製作当時の）隊員の皆様に、執筆をお願いしました。報告書集も、数をおうごとに、内容も充実さを増してきており、各界の、多くの皆様方の、協力隊を知る上での貴重な参考資料となってきております。

今後共、ご活用下さる皆様方からの、忌憚のないご意見、ご提言をいただき、一層の充実をはかりたいと思っています。

末筆ながら、この報告書集のために、ご多忙中にもかかわらず、積極的にご協力をいただき、報告書に対する適切なコメントをご執筆下さった、技術専門委員の先生方ならびに、報告書の収録を快諾され、追記の原稿を寄せられた、帰国隊員の皆様に厚くお礼申し上げます。

なお、本報告書集のご活用にあたり、他への転載等を企画される場合は、青年海外協力隊事務局（啓発課）に、必ず、ご相談下さるよう、お願い申し上げます。

昭和58年12月

青年海外協力隊事務局 啓発課

海外協力の現場から——青年海外協力隊員の記録〈セネガル編〉

昭和58年12月発行

編 者 国際協力事業団青年海外協力隊事務局

発行所 国際協力事業団青年海外協力隊事務局

〒150 東京都渋谷区広尾4-2-24

電 話 (03) 400-7261(代)

印刷所 日青工業株式会社

〔非売品〕

